に歸す。人望も爰に歸す。一生其德を全くすべきぢや。若其守が疎なれば。不祥の器となる。通途の人よりも危きぢや。

才智藝能も。此に準じて。天の與ふる一德ぢや。此德また災害のつきそふ處ぢや。此も自身にもせよ。他にもせよ。この才智藝能を棄よと云ではない。其守を知るべきぢや。上で云へば孔門の顏回の。不幸短命なるも天命が全きと云れぬところがあるぢや。中で云へば秦越人が壽を全ふせぬ。屈原が。楚國を放れて汨羅に沈む。下で云へば。楊脩嗣衡が良死を得ぬ。王勃李賀が類の短命なる。一切詩人文人の類が多く放逐せらる。一切の藝者の貧窮なる者多き。みな面白きことぢや。

世間一切の珠玉珍寶物具。皆此に準ず。此も先祖より持つて來た寶器のあるを棄よと云ではない。あるに隨てその守りあるべきことぢや。上で云はゞ。卞和氏が璞を得て刖れた類。此名玉の出るは。世の福分なれども初て得る人は。其道なければ。其身に災ありと云ことぢや。大抵は。得がたき寶を貴ばぬと云がよき教ぢや。中で云へば。虞公が垂棘の玉。屈產の乘を貪りて。其國を亡ぼした類。故なくして寶物の來るときは。其心の用ひやうの有るべきことぢや。下で云へば。金銀財寶。諸の珍好物ゆゑ身を亡ぼす者多きぢや。古往今來みなかうじや。鳥獸も。虎が皮ゆゑ殺さるゝ。象が牙ゆゑ身を亡ぼす。鸚鵡が。人語をよくまねぶ故に樊籠に入れらるゝ。翡翠の羽の美好なる故殺さるゝ。皆不祥の器ぢや。此も虎皮象牙の文。鸚鵡が能言翡翠が羽の美なるを咎むるではない。

此類を推して。人道を慎み天道に順ずべきことぢや。

老子經に。大成若缺。大盈若沖。大直如屈。大巧若拙。大辯若訥と云ひ。天下有道。却走馬以糞。天下無道。戎馬生於郊。罪莫大於可欲。禍莫大於不知足。咎莫大於欲得。故知足之足常足とあり全く此戒相ぢや。論語に。禹吾無間然。惡衣服而致美乎黻冕。卑宮室而盡力乎溝洫と云。此も全く此戒の趣ぢや。誠に老子も外ならぬ人ぢや。異端ではない。外道ではない。夏の禹王も外ならぬ人ぢや。異端ではない外道ではない。若通じて言はゞ。古今命世の者。多くは此十善中の人と云べし。其中老子の教は。多分天道を說き少分人道を云。論語禮記等は。多分人道を說き少分天道を言ふ。此中。天道ある處は人道此に從ふ人道全き處は。天命此に應ず。點檢し勝來れば。悉く此道の左右ぢや。天地の間。此道時に隨て隱顯す。東夷西戎。何れの處か是ならざるべき。限局して守る者は。少分身を修め家を安んず。通貫して用ふる者は。無爲にして天下國家を安んず。惡く用ふる者は。放蕩として禮儀を廢す。謬れば。申子韓非子が如きに墜つ。甚だしきに至つては。張角林靈素が類にも流るゝぢや。孔子の書を善く用ふる者は四海一家の如く。萬民一身の如くぢや。惡く用ふる者は。禮教に滯ほり。反て國を亂す謬れば明の建文君方孝儒がやうになる。甚だしきに至つては。漢の王莽。宋の王安石が類にも墮つ。

孔丘老聃の意には違ふことぢや。

又孔子易を讀て、損益の卦に至りて喟然として嘆ず。子貢問。夫子何爲ぞ嘆ずと。孔子答ふ。夫自ら損する者は益す。自ら益する者は缺く。吾是を以て嘆ずと。此損の卦は見れば忿を懲して止まればならぬ。自ら貪欲を慎み止めればならぬ。此に惰りあれば身に災が出來るぢや。國に災が出來るぢや。此益の卦を見れば。善を見ては行はればならぬ。過を知りては改めればならぬ。此に惰りあれば身に災が出來るぢや。國に災が出來るぢや。功なくして祿ある。德うすくして位貴き。不意に財利を得る。分に過て稱譽を得る。みな智者の慎む處ぢや。此祿位は。壽命の減するか。或は眷屬を奪ふぢや。此財利は。必ず禍の伏する處。此稱譽これ毀謗の兆ぢや。若し謹慎餘りあつて。災難に遇ふ。此難は禍の基ぢや。滿分に他を惠んで怨讐を生ずる。此怨讐は必ず人望の歸する基ぢや。世の愚なる者は。災難に遇ふて憂惱す。憂惱增長すれば。鬼類便を得て。災害が斷絶せぬぢや。可惜福祿を失ふぢや。怨讐に遇ふて瞋怒を生ず。瞋怒が增長すれば。此も鬼類その便を得て。生々怨敵となる可惜人望を失ふぢや。正眼に看れば。易の書も全く十善のよそほひぢや。

又老子に。知レ足者富。とあり。遺教經に。知足の人は。貧しといへども常に富めり。不知足の者は。天堂に處すといへども。猶意にかなはずとあり。此に至りて。內道外典を分別するは相違せるこ

とぢや。老子に又知二其雄一。守二其雌一。爲二天下一谿。爲二天下一谿。常德不レ離。復二歸於嬰兒一。知二其白一。守二其黑一。爲二天下一式。常德不レ忒。復二歸於無極一。知二其榮一。守二其辱一。爲二天下谷一。爲二天下谷一。常德乃足とあり。此等も面白き教ぢや。

佛在世に。波斯匿王が。逝多林に往き。下乘の處に至り。象より下りて。世尊の所に拜詣す。世尊王の氣息喘ぐを見て問たまふ。大王は何ゆゑ氣息喘急なるぞ。王云。我身體肥滿して。行步艱む故にと。世尊因に多食を戒めて。偈を說きたまふ。夫人常應二自憶念一。若得二飯食一應レ知量。身體輕便受レ苦少。正得二消化一護レ命長と。時に波斯匿王此偈を聽受し。顧て婆羅門に命ず。食時每に。汝我側に在て常に此妙偈を誦せよと。此等の事は小事なれども。大事に比すべきことぢや。

通鑑に。趙宋大祖時。永寧公主侍坐興二皇后一同言曰。官家作二天子一日久。豈不レ能レ用レ黃金一鈒肩輿。帝笑曰。我爲二天下一守レ財耳。豈可二妄用一。と。史記に。孝文帝時卽位二十三年。宮室苑囿。車騎服御。無所二增益一。嘗欲レ作二露臺一。召レ匠計レ之。直百金。帝曰。百金。中民十家之產。吾奉二先帝宮室一。常恐レ羞レ之。何以レ臺。此等が大君たる人の志と云ことぢや。

女子の中に。左傳に。晉羊舌氏が妻た。羊叔姬と云。其子の叔向。申公巫臣氏の女を娶らんとす

羊叔姫云。吾聞之有寄禍者。必有奇禍。而有甚美者。必有甚惡。夫有美牲足移人。苟非德義則必有禍也。又史記に。秦の末。軍卒が陳嬰を立て王たらしめんとす。嬰其母に問ふ。母云く。自我爲汝家婦。未嘗聞汝先古之有貴者。今暴得大名。不祥也。誠に心を用ふれば小人婦女の智慧でも。此不貪欲の法は明かなることじや。事の成壞も明かなることぢや。但私に蔵はるゝ者が自ら晦ますばかりぢや。夏桀。殷紂。周の幽厲。六朝の東昏侯。陳の後主の類。實に智慧は羊叔姫。陳嬰が母より劣ると云て可なりぢや。大抵。高位大祿の人は。過去十善の餘慶なるに由つて。貪欲薄く。華奢に隨順せぬものぢや。下賤困窮の者は。宿緣つたなき故に慳貪深く。華麗を好むものぢや。世に高貴の人。財利に耽けり。華奢を好み。事に貪欲に隨順するは。多くは奸佞の小臣に誘はるゝ故と云ふことぢや。又念の生ずるも其分限不相應なる事は。多くは凶事の兆と云ことぢや。若貪欲相應すれば。此戒の違犯となる。增上すれば。身を亡ぼし。國家を敗る。此を初に慎まれば。終に救ふべからざるに至るぢや。王者は王者の心あるべく。臣佐は臣佐の心あるべく。士庶人は士庶人の心あるべきぢや。王者たる者の。臣佐民庶の念を生ずる。上位の者の。下位の念を生ずる。下位の者の。高貴の念を生ずる。富者の慳吝なる。貧人の奢を好む。當路權勢の士の高逸を好む。隱士の名利に志す類。みな不相應と云べきぢや。例を擧れば。秦の始皇が六國を併せ呑むは。英雄王者の心ぢや。不相應ではない。後仙術を好んで。不老不死の藥を求むる。是を不相應と云。大抵は此等の常途ならぬ念は。命の終る先兆と知るべしと云こさぢや。若世の一類の者の家族を捨て。草衣木食を以て仙道を求むるは變ではない。一途高尚の志しとも云べきぢや。若宮殿華麗を極め。采女圍繞して長年を求むるは。愚の至りと云べきぢや。漢の武帝。唐の玄宗みな同一條ぢや。甚だしきは。唐の武宗。宋の道君等世人の笑ふ所ぢや。佛法の中には。提婆達多の類ぢや。世尊の名號を嫉み自ら思ふ。釋迦は是淨飯王の子。我は是斛飯王の子。釋迦四月八日に誕生す。我四月七日に誕生す。釋迦三十二相を具す我三十相を具す。釋迦六神通を得たり。我五神通を得。其違ひ幾くかある。しかるに人間天上。釋迦を聞けば禮拜供養す其言ふところ。群類伏從す。我を見ること草芥の如し。所有の言教も。人齒錄せず。譬て云ば。月の失ふは日の光によろ。此釋迦世に在て。我名聞利養を失ふと。これより世尊を害し奉る心生じ。次第に增長して終に其身を失ふたと云ことぢや。此提婆達多は大菩薩の權の示現でも有らうか。示現と云も。末世衆生の爲め示現なれば是を以て人道をも慎み。天命にも順じ。法性にも順ずべきことぢや。其外。臣庶の。分外なる念を生じた者の。その身を亡ぼしたことは數多ぢや。漢の吳王鼻王莽。唐の安祿山。史思明。明の震濠が類。歴代の叛臣賊子の類。みな人の知りて居ることぢや。若其身を全くせんと思ひ。身を節にして。此戒に隨順するにしくはない。其壽命を長く保たんと思ひ。嗜欲を薄くして此戒に隨順するにしくはなきぢや。又前に云た。除の君が。吳の

季札の劍を見て。心に欲する色あつた類。此等が死の近づいた先兆と云べきぢや。他の腰間の劍を心に求むまじきは。小人庸流も知るところぢや。小國でも其主たる者の。此心有るべきことではなきぢや。總じて。常に異なる念の生ずるときは。自ら省て邪正を知るがよい。若正念相應して大道を求むるは格別。爾餘の私にわたる念は速かに制伏すべきぢや。此を制伏する道は。此不貪欲戒に在るべきぢや。

又言語の恒を超え分に過るも。此戒の違犯ぢや。若增上すれば身を亡ぼし家を敗る兆ぢや。左傳に孔子卒す。魯の哀公誄を作りて云く。俾屏二余一人一以在位と此余一人と云は支那國の禮に。天子の自稱で。諸侯は。僤りある辭と云ことぢや。此を子貢が見て。君其不レ沒二於魯一乎。生不レ能レ用。死而誄レ之。非レ禮也。稱二一人一。非レ名也。君爾失レ之也と。此哀公。後果して遂に出奔すとあり。身の行ひの恒に超え分を過るも。此戒の違犯ぢや。若增上すれは。身を亡ぼし家を敗る兆ぢや。此に左傳ぢや。鄭駟秦富而侈。嬖大夫也而常陳二卿之車服於其庭一。鄭人惡而殺レ之とあり。子彦が子の子思が言に。不レ守二其位一而能久者。鮮矣とあり。孟子に。葛伯獵す。童子餉を餽る。葛伯見て。童子を。殺して其餉を奪ふ。此に由りて湯初て征す葛より始むとあり。民家の餉は。國君の口に適ふべきではなけれども。畢竟して戲れと慢心との長ぜるより起りたことぢや。民庶嬰孩をも侮らぬが十善の心ぢや。又左傳に。齊の懿公。庸織が妻を奪ふ。是に由りて終に身を亡したぢや。人の妻を奪ふまじきは知れたことなれども。臣僕を侮る故に出來たことぢや。臣僕の類にも讎を失はぬが十善の心ぢや。不貪欲戒はかうぢや。一切世間に於て。護持せればならぬ法ぢや。一念分を超え貪欲に隨順すれば。自心に背くぢや。世間に背くぢや。人倫に背くぢや。天道に背くぢや。法性に背くぢや。一言半句その分を超ゆれば。自心に背く。世間にそむく。人倫にそむく。天道に背く。法性に背く。一行一作其分を超ゆれば。自心に背く。世間に背く。人倫に背く。天道に背く。法性に背くぢや。此を初に慎まれば。後救ふべからざるに至るぢや。この常を守り分を超えぬことは。至りて易き道なれども。其德は廣大なることぢや。天地の道ぢや。萬物の情ぢや。古今不易の大道ぢや。日月星辰。その常あるを見よ。若常度を違へるは。不吉の徵ぢや。四時常あるを看よ。若時候不順なるは。災の兆ぢや。山海常あるを看よ。若山崩れ海涸るは。不吉の兆ぢや。萬物常あるを看よ。若雞の晨する。雄雞のよひ鳴きするも。不吉と名くるぢや。元朝の亡るとき。杜鵑が上都に啼しと云。狐が宮中より。出たと云ことぢや。萬般みな思うて知るべきぢや。此身有て衣る。其限を知る。身に適へば止む。此衣服十分の好みを求めず。華麗は一向所論でない。此身有て衣る。其限を知る。身に適へば止む。此衣服十分の好みを求めず。華麗は一向所論でない。沙門法の中に。染壞割截等の儀ある是ぢや。殷の紂王が衣二珠玉一ことは愚の甚だしきぢや。此口有て喫ふ。其限を知る。十分の好味を求めぬ。若其味甚だ口に適ふときは。三分にして一を減

す。沙門の中に。節量食の式。水淨の儀ある是ぢや。外國に六斎を常食とするは。十善の儀ではない。班足王が人肉を食する。易牙が其子を煮しは。尤も甚だしきことぢや。

此眼有て見る。五采の明を害することを知る。十分の好色を求めぬ。若其色甚だ眼に適ふときは。其守を知る。沙門法の中は。金錦莊飾具等を好まぬ。是ぢや。東昏侯が園中の石五色の彩をなす。

蜀主王衍が。繒を結んで山を爲り。其上に酒宴する類は甚だしきことぢや。

此耳有て聽く。五音の聰を傷ふことを知る。十分の好きを求めぬ。若其音聲甚だ耳に適ふときは。其守を知る。俗典の中に。鄭聲淫聲を遠ざくる。此義ぢや。沙門法の中は。歌舞作樂。故往觀聽せぬ。是ぢや。

此鼻有て香を取る。是も十分の好きを求めず。鼻根は眼耳に比すれば鈍根なるもので。害少きことなれども。此中にも其守を失はぬぢや。沙門法の中は。香油塗身せぬ。此義ぢや。唐玄宗のとき。五家出行に。香數十里に聞ゆとあるは甚だしきことぢや。

平生の安んずる處。受用の資具。劍佩の飾。皆分を減ず。府庫の設け。宮室の營み。皆古に順ず。論語に昔魯人が長府を作らんとす。閔子騫が見て仍舊貫一如レ之何。何必改作と云た。沙門法の中は。樹下石上。一鉢自から足る。受二人供養一趣自ら除レ惱とあり。古人が。損レ來自知こ有待爲ア累と云た。此義ぢや。此位ありて居る。下を侮れば害の生ずることを知る。亂世には功勞の臣と坐起を共にして。其忠義を勵ます。治世には有德を尊重して。風化を淳厚にすと云ことぢや。沙門法の中は。諸〻の賢聖德を隱して凡夫に如同する。此儀ぢや。此富ありて有つ。妄りに用ふれば德を敗ることを知る。財利民の爲につむ。器械國の爲に設く。城邑橋梁。神社佛閣その宜きに隨て國界を莊嚴すと云ことぢや沙門法の中は。資財みな三寶に歸して自ら蓄積せぬ此儀ぢや。

此威力ありて他を伏す。驕れば禍蕭牆の中に起る。顏色常に和す。威嚴此中にありて盡きることなし。音聲常に和す。威嚴此中に在て盡きることない。舉動常に謙下す。威嚴此中に在て盡きることなし。萬國を制伏するに十分の威權を用ひぬ。此中威海外を靡け。德餘寡に及ぶと云ことぢや。沙門法の中は。遺教經に。執二持應器一。以レ乞自活自見如レ是とあり此儀ぢや。

よく此戒を護持する者は。家宅十分の安を求めて。病あるとき。醫に十分の功を求めぬ。人に交りて。十分の親交を求めぬ。臣佐を用ゐに。各〻その長ずる處を取る。器財を用ゐに唯時の用達するを取る。奴僕を役使するに。十分の勞を爲さしめぬ。軍に臨んで。十分の勝をとらぬ。敵を亡すに。其遠裔を殺し盡さぬ。書を讀むに解し盡すことを求めぬ。事に臨んで十分の才を盡さぬ。十分の名に居らぬ。十分の功に居らぬ。萬般の事此守を失はぬと云ことぢや。子弟を導くも。沙門の弟子を度するも此不貪欲戒を以て主とすと云ことぢや。正眼に看來れば。一切世界に一物の捨べき

ばない。耆婆童子が草木瓦石を取用ひて皆藥とする如くぢや。一切世界に一法の取るべきはない。上聖果を求むるも好肉上の疵ぢや。下衆生を度するも。老婆の飴を含んで孫を弄する如くぢや。元來大地に衆生なしぢや。若度すべき衆生を見ば。此人は愛見に屬す。經中に凡夫一念心上に微塵等の菩薩ありて。悉く菩提心を發し。菩薩の行を修し。無上菩提を得るとあるぢや。十方世界に一法も不可得なるぢや。もし求むべき菩提を見ば。此人愛見に屬す。經中に。遠ニ離一切顛倒夢想一。究竟涅槃。とあり。論の中に。現前立ニ少物一謂ニ是唯識性一。彼有ニ所得一故。非ニ實住ニ唯識一。とあり。法執戒禁取を以て。强て法を求むべきではない。若凡を憎み聖を愛せば。此人憎愛取捨にわたる。若一分無明を斷じ。一分中道を證せば。此人階梯に滯ほる。不貪欲戒を滿足すとは名づけられぬぢや。華嚴に。衆生妄に分別すれば。佛あり。世界あり。若眞法性を了すれば。佛もなく。世界もなしとあり。此法性が直に是緣起ぢや。佛果究竟も。一物鎭長靈でない。頑空無體でばない。此緣起が直に是法性ぢや。凡夫身心。從來の面目を改むることではない。此緣起不思議の中業相の影を現ず。流を逐うて止ることを知られば此業相衆生を昇沈して。累劫窮まりなきぢや。若本源に達すれば。到る處が解脫大海ぢや。末の末まで解脫大海ぢや。若佛身の影をあらはせば此佛身が大涅槃ぢや。解脫大海ぢや。若菩薩の身をあらはせば此菩薩の身が大涅槃ぢや。解脫大海ぢや。若緣覺身聲聞身をあらはせば。此緣覺身聲聞身が大涅槃ぢや。解脫大海ぢや。若諸天の身をあらはせば。此諸天身が大涅槃ぢや。解脫大海ぢや。若人間身をあらはせば。此人間の身大涅槃ぢや解脫大海ぢや。若阿修羅身畜生身をあらはせば。此阿修羅身畜生身が大涅槃ぢや。解脫大海ぢや。若餓鬼地獄身をあらはせば。此餓鬼地獄身が直に大涅槃ぢや。解脫大海ぢや。此中に九界の迷情を捨てゝ。佛界の覺路を取らんと思はゞ。此影を厭うて彼影を捉る如くぢや。元來取るべきこともなければ。捨べきこともない。厭ふべきこともなければ。求むべきこともない。一切處。一切時に。唯此不貪欲戒相應するぢや。業相の中に法性に達す。法性の中に業相に達す。此性に適ふて。大願心を發す。一切時が菩薩行願の在處ぢや。一切處が菩薩行願の在處ぢや。此行願を以て。此國土に在り。此人に交る。萬人が親愛し稱譽す。我事に相關らぬ。唯譽る人が譽るばかりのことぢや。萬人が憎惡し毀謗する。我事に相關らぬ。唯毀る人が毀るばかりのことぢなく。捨べきこともない。此中に我不貪欲戒滿足するぢや。一切の苦惱憂愁あり。一切の歡樂適悅あり。捨べきこともなく。取るべきこともない。此中に。我不貪欲戒滿足するぢや。此戒法我に非ず我所に非ず。生々の處此戒と俱に生ず。此戒と俱に長ず。富四海を保ちて心に繫縛なし。貴き億兆の上に居して心に倨傲ない。心に繫縛なければ。此富未來際を盡して用ひ盡されぬぢや。心に倨傲なければ。此位世界のあらん限りは。盡されぬぢや。なぜぞ。法性無盡なれば戒善も無盡ぢや。戒善無盡なれば善業果も無盡ぢや。善果戒法を助けて。常に世界に居す。此位此富。生々の處

に隨逐して。影の形を逐ふが如くぢや。戒法善果を助けて。常に法性に順ず。此繫縛なく。此偈傲なし。不貪欲戒の法法としてかくの如くぢや。此戒善日夜に增長す。四海みな十善の民ぢや。奸臣の苛政を設け。貪吏の賄賂を求むる樣なことは。其名だも聞かぬと云ことぢや。廊廟には篤行の補佐を見る。山林には禪定の沙門を見る。人事全くして天氣應ず。五星の逆行。水旱諸災は。其名だも聞かぬと云ことぢや。天氣正うして地氣應ず。田野開け。諸穀成就し。海中に珠寶を出して地上に醴泉を出す。器財其宜きを得。人物其宜きを得。人々端麗。正直美貌。諸の惡疾醜陋は其名をも聞かぬと云ことぢや。諸の盲聾頑闇。叛臣賊子の類は其名をも聞かぬと云ことぢや。機有て感ぜざることはない。賢聖必此地に迹を垂れ諸天神祇此國を守護すと云。不貪欲戒の法。法として是の如くぢや。

華嚴經に。貪欲之罪。亦令三衆生墮二三惡道一とあり。是が異熟果ぢや。若在二人中一得二二種果報一一者心不レ知レ足二者多欲無レ厭とあり是を等流果と云ことぢや。他の經に。世界の五穀も實のり惡く官位俸祿も減ずとあるは。增上果ぢや。

不貪欲戒

○不瞋恚戒

安永三年甲午三月二十三日示衆

師云。此不瞋恚戒は。通人庸流に在ても。容易ならぬことぢや。まして。王公大人に在ては。其利害尤も著るしきぢや。謹愼に護持して。事々自ら省察すべきことぢや。」世間の惡事其數多と雖も本源は貪欲瞋恚の二ぢや。その中。自らの志しを破り。德義を賊ふは。貪欲を第一とす。世を亂し。事を害するは。瞋恚を第一とす。前の戒と。次第かくあることぢや。說ときは此別相あるに似たれども。貪欲ある者は必ず瞋恚あり。瞋恚ある者は必貪欲あり。其惡不善法たることは一ぢや。貪欲を離るれば瞋恚も薄くなる。瞋恚を離るれば貪欲も薄くなる。其善功德たることは一ぢや。今世を治め。人に長たるに就て。此戒を要とするぢや。

外書にも。其爾萬邦有レ罪。在二予一人一とあり又。罪疑惟輕功疑維重。與三其殺二不辜一。寧失二不經一とあり。賢者の言行。かうぢや。又孔子の家兒罵らるゝことを知らず。曾子の家兒うたるゝことを知らずとあり。若家に打罵呵責の事のあるは。其主人たる者は耻べきことぢや軍陣と云ふものは。世間閑靜の大なることにて。善順柔和に相違せるだにあるを。怒兵は必ず敗軍と云。爾餘の事。みな怒りを敗れぬと云ことはない。若事にふれて怒りの心起らば。此敗れの兆と

知るがよきぢや。燕の太子丹。魏の高貴鄉公が。憤激に堪へず。禍の端を發して自ら死亡を招く。女子の中にも。晉の何充が妻郭氏が。由なき嫉妬故乳母を殺して吾一子の終に育せざる。其類多きぢや。華嚴經の中に。菩薩。一念心の瞋恚の火に因つて。無量億劫の功德法財を燒失ふとあり。論語に。一朝忿忘二其身一以及二其親一。非レ惑矣。とあり。」諸經論の因緣は數多あることぢやが。その中に一事をいはゞ。西域記等に。佛滅後健馱羅國に一の羅漢あり。一沙彌隨侍す。此羅漢常に禪定に入りて。食時ごとに。繩床ながら龍宮の請を受く。此沙彌心に疑ふ。和上毎日何れの處に受請あると。一日繩床の下に隱れて試む。凡そ佛は常に念に忘失なきに由つて。入定の隔ないと云ふことぢや。羅漢は其德滿足に至らざる故。憶念なければ凡夫に同じと云ふことぢや。此日も羅漢常の如く繩床ながら龍宮に到る。沙彌の繩床の下より出るを見て。此處は汝が來るべきにあらずと。龍王も此凡夫僧の來るを悅ばず。此時沙彌。龍宮の莊嚴。龍女の容貌を見て。貪欲相應す。食時に至つて。羅漢には天の甘露を供し。沙彌には人間相應の食物を與ふ。沙彌此にて瞋恚生じて。自念言發願す。食物は上座も下座も平等なるべし。德あるも德なきも其隔あるまじき理なり。我德なきを悔り。差別するは惡むべし。我出家已來持戒誦經の功德を以て。大力の龍王となり。此龍を殺し。此龍宮を奪ふべしと。總じて善願も惡願も誠心決定せることは。此感應あると云ふことぢや。此時はや龍王頭痛す。羅漢此念を知りて再三諫む。汝持戒淸淨なれば。勤精進せば。現在に聖果にも到るべきぞ。縱ひ聖果に登らずとも。諸天に生ずべきぞ。諸天の果報は諸龍の比類ならず。龍宮は七寶莊嚴あれども。此は摩尼珠の德なり。畜生部類を離るゝことあたはず龍女も化現する所は諸の天女にもまがふべきなれども。其本形は惡毒蛇の姿にて。甚だ惡むべきぞ。惡願を止めよと沙彌瞋恚增上して。此教を受ず。其後經行のとき。足より水生ずるを見て我願滿すべしと云つて。袈裟を以て首を覆ひ入水し。終に大龍と成つて。此龍宮を奪ひしとあり誠に一切煩惱は。其體煩雜にして衆生を惱亂することぢや。少事の瞋恚を降伏し得ぬぢや。持し。此法に遇ひ。此師にあふ。勝緣具足するだも。此沙彌少年出家し。淸淨に戒を護又昔天竺國に一の貧家あり。其家婦姑常に和せず。或時その婦飯を炊ぐ。姑非理に呵責す。婦瞋り恚とも。姑に對して相爭ふことあたはず。傍なる羯羊に向つて。此羊こそ畜生よと云つて。もえぐひを以て打つ。其火が羊の毛にもえつく。羊なきさけび。にげ出て積しわらの中に入る。其火わらに付く時。風烈しく大火になり。民屋を燒亡して。國王の象部屋に及ぶ。象が其象部屋を推倒し。逃げ出て。隣國に走り往て人民田畠をそこなふ。是が兩國の爭となり。數十年の軍陣が起りたと云ふことぢや。看よ。婦姑勃蹊が兩國の軍陣となるぢや。一念瞋恚の過に由りて。無量劫の過患となる。互に能緣所緣と成て。自他共に沈淪すること。此たぐひぢや。初一念の瞋恚は纔なれども。その罪業障の增長する。實に恐るべきことぢや。

經中に。まむしの口に毒あり。蜂の尾に毒ある類。皆瞋恚の姿とあり人間の容貌醜陋なるは。人見て惡賤す。瞋恚の餘業とあり。地獄界の猛火あるも。此瞋恚增上せる姿と云ふことぢや。此等は譬ば風寒暑濕の病。五臟の虛實に由つて。種々の怪夢を見る如く。無しと云はれぬぢや。

此心ありて此身を生ず。元來瞋恚を生ずべきことでなきぢや。此身心ありて。山河大地に住在す。元來瞋恚を生ずべき器でなきぢや。此國界ありて。此に死し彼に生ず互に往來し互に盲聾す。正知見に看來り。正念に思惟すれば。全く是法の著しき處ぢや。丸ごかし不瞋恚の儀ぢや。此心平等なり。萬法を容て障碍せぬ。此身平等なり四大を集めて隔歷なし。正知見に看來り。正念に思惟すれば。全く是法の著しき處ぢや。丸ごかし不瞋恚戒の儀ぢや。一切器世間かくの如くぢや。一切衆生世間もかくの如くぢや看よ。同類集まり生じて。自ら其名を知らず。異類相對して。各來處を知らぬ。緣有て合會す。異類も我用となる。緣盡きて離散す。形骸も黃土となる正眼に看來り。正念に思惟すれば。全く是法の著しき處ゝ丸ごかし不瞋恚戒の儀ぢや。」此世界平等なり。山川草木皆己心中の法門ぢや。飛花落葉悉く我迷情を開解する道場ぢや。清風明月。我と共に善を倚し惡を止むる友ぢや。馬の轡を銜む。牛の鼻木を受くる。狗の門を守る。雞の曉を報ずる。山林に花果ある田野に穀米ある。みな我手足庫藏ぢや。男女大小起居動靜みな我善知識ぢや。唯惡業因緣怨讐構造せるを除くぢや。元來平等性の中。彼に是なく此に非なし。此に愛なく彼に憎なし。正眼に看來り。正念に思惟すれば。全く是法の著しき處。丸ごかし。不瞋恚戒の儀ぢや。

此人の此世に在る。貴賤相從ひ。老少相隨ふ人畜交り生じ。萬物布列すること手足の一體を共にし二十指二十爪の各々布列する如くぢや。右邊是非なく。左邊是非なし。其是非を見る者は見る者の過ぢや。其瞋恚を生ずるは生ずる者の過ぢや。骨肉相纏縛して其中念相の假りに相續することぢや。

海水の一波纔に動すれば萬波隨ふ如し。前波は後波の起るを知らず。後波は前波より動かし來るを知らず。前念を緣として。後念續いてを起る。或は慳貪むれを焦し。瞋恚事を敗る。正念に思惟すれば。前念我他彼此なく。後念我他彼此なし。唯慳貪を起すは起す者の失ぢや。瞋恚を生ずる者の過ぢや。虛空に對して瞋恚を生ずるが。此虛空は。元來天地萬物を容て。我瞋恚に相隔からぬ。此瞋恚勞して功なきぢや。山川草木に對して瞋恚を生ずるが。此山川は耳目なく。思慮なく我瞋恚を見聞分別せぬ。此草木は。春夏に茂し。秋冬に萎て我瞋恚を屑ともせぬ。此瞋恚勞して功なきぢや。鳥獸に對して瞋恚を生ずるが。此鳥獸は自ら水草を逐ひ。自ら食を求め友を求む。我言意を解せぬ。此瞋恚勞して功なきぢや。人間に對して瞋恚を生ずるが。此人間は。日夜に衰老して終に死に歸す。石火電光の暇。且く此世に存在するも。枯骨皮肉に裹まれたる物ぢや。我相手となるに何の所詮なし。此も勞して功なきぢや。過去に對して瞋恚を生ずるが過去は已に跡かたもなきぢ

や。未來に對して瞋恚を生ずるが。未來は未だ來らざれば安排布置がならぬぢや。現在に對して瞋恚を生ずるが。現在は念々に過去に屬す。過去の過去際より。未來際を盡して。唯勢して功なきぢや。我身心の苦惱不如意は。我業力に由る。他の知るところに非ず。他の慳貪恚慎は他の妄分別に由る。我身心に關るにあらず。一類愚昧の者。我業力に誑されて他を瞋る過つたことぢや。一類愚昧の者他の妄分別を執着して。自ら瞋恚を動かす。淺間しきことぢや。迷謬の著しきぢや。法性海中。其境或は心に順ずるに似る。其境或は心に違ふに似る。この順違雜り生じて。此世界がむづかしくなる。二六時中。唯是我他彼此ぢや。生より死に至るまで。唯是憍慢嫉妬ぢや。順境に對して愛を生ず。此愛衆生を惱亂して。狙まはしの狙を使ふ如し。違境に對して瞋恚を起す。此瞋恚衆生を惱亂して。丈夫の少兒を弄する如し。愛より瞋恚を起す。瞋恚より愛をおこす。此心境界を生ず。此境界心を起す。環の端なきが如く。青蠅の腥肉を離れ得ぬ如くぢや。

華嚴經に。心は好畫師の如く。種々の五蘊を造る。世間一切の法。法として造らざることなし。心の如く佛も亦しかり。佛の如く衆生も亦しかり。心佛及衆生。是三無差別とあり。又經に譬を擧げて。畫師が五彩を以て夜叉の形を畫きなして。自ら怖るゝ如しとあり。一切衆生が。自心に思ひを起し。自心と云ふ名をつけて。此心より境を生じ。自ら造作せし境に隨て愛憎を起す。此に愛を生ずれば。彼も愛を以て應じ。彼に瞋恚を生ずれば。彼も瞋恚を以て應ず。境が心に隨て種々に轉變す。不可得なるものが衆生となり來り。瞋恚心となり來る。瞋恚の一念心が。あられぬ姿を成す。誠に愚なる畫師が自ら畫き出した夜叉に怖れて。自ら夜分におそはるゝ如くぢや。

此に一の近き故事があるぢや。晉の平公の時。師曠と云ふが樂師と爲りて仕ふ。或時平公出て畋す。乳虎車前に伏す平公悅んで師曠に問ふ。我聞く。霸王の君の出るとき乳虎伏して動かぬはいかなる事ぞと。師曠云。君の駕するところ駿馬にあらずや。平公云。駿馬を驂にせんと。師曠云。駿馬が駮に似たる故なるべし。駮と云ふ獸は虎を食すと。又或時平公出。朱文の鳥來り繞りて久しく去らず。平公悅んで師曠に告ぐ。霸王の君の出るとき。鳳凰下ると。今日我出るに朱文の鳥下りしは如何なることぞ。師曠云。君は狐裘を服せずや。平公云しかり。師曠云。鳳にはあらじ。東方に文身朱足の鳥ありて。名を誅珂と云ふ。是は。鳥を愛せずして狐を愛すときく。此鳥君の裘を見てなれなづくなるべし。總じてさしてもなきことを。吉事德義のやうに思ふは。災の兆と告げた平公心内不レ悅。他日小臣に命じ。殿庭に蒺藜を布かせて。師曠を召す。師曠召に應じて來るに。足膝を破る。そのとき師曠天に仰ひで嘆ず。今且く汝と戲る。何故深くなげくと師曠答ふ。人自ら妖を興して自ら賊ふ。國君の殿庭。蒺藜生ずべからず。此蒺藜ある。滅亡の兆なるべしと。果して久しからず內に。平公卒すとあり。此等は小事なれども。緣起の大體に比況すべきことぢや。

初心に此處解しがたくば。且く夢を以て比對して解せよ。睡眠の中に。念想生ずれば此形の外に形顯る。眠る身と夢の内の身と一つと云ふべからず。異と云ふべからず。眠る形は夢の形を知らず。夢の吾身は。別に眠れる姿あることを知らぬ。此夢中に形生ずれば。山河大地生ず。此吾身と山河大地と。一と云ふべからず。異と云ふべからず。山にいろ〳〵の山あり。河もいろ〳〵の姿を見る。山河大地生ずれば。或は他の有情生ず。此吾身と。他の有情と。一つと云ふべからず。有情生ずれば親疎分る。親き人にあへば悅び。豺狼猛獸にあへば。怖畏を生ず。此怖れらるゝ猛獸に實體なきのみならず。怖るゝ吾身も實體なきじや。此は何れの處より現ずるならば。睡眠の中念想轉變に由りてこれ有るぢや。今日目前の境界もかくの如くぢや。一念心生ずれば。念に念相あり。前念が後念の緣となつて念々相續す。此念相續して。必ず内外分る。内に自心を見。外に山河大地屋宅田地。金銀財寶。人間物類生ず。此中境生ずれば愛憎分る。人物生ずれば親疎生ず。迷ふ者。此現今の境に於て實解をなせども。今日を境界。唯是妄心夢中の所現ぢや。一異を云ふべからず。内外を云ふべからず。親疎を云ふべからず。愛憎すべからず。此妄心夢中の世界に誰かされて。貪欲を生じ。瞋恚を生じて。無量劫の沈淪を受くるは。悲しむべきことぢや。

此人間に夢ありて。面白きことぢや。此に因りて業相轉變の比況し解せらるゝも。面白きことぢや。寄諦思惟して。土偶人が鏡に對するが如きも。面白きことぢや。順逆の境に對して。貪欲瞋恚を制伏するも。面白きことぢや。制伏力を得て。一切惡事に隨順せぬも。面白きことぢや。此山河大地は一念心の轉變なることを知るも。面白きことぢや。今日吾形容も。一念心の轉變なることを知る面白きことぢや。信ある者は其力を得。信なき者は其力を得ぬも。面白きことぢや。得道の人は池邊に蛙のおどる。樹上に鳥のさわぐ。春半に百花の香を呈する。秋初に冷風を催す。みな不可思議解脫の現前する處と云ふことぢや。經中に。羅漢果を證せし人は。左の方に香を以て供養す右の方に損害の心を以て來る。此二人に愛憎なしとあるぢや。現今目前に虛空と云ふものありて。白きぢや。此虛空ありて。法の比況し解せらるゝ。面白きじや。現今目前に。山河大地と云ふものありて。面白きぢや。此山河大地虛空の中に安住し起滅して。面白きぢや。現今目前に衆生と云ふものありて。面白きぢや。此衆生虛空の中に安住し起滅して。面白きぢや。

此世界に。此人間あり。空中に往來し。元來根帶なし。空中坐臥して自由の分なし。空中に天を戴く。此天空に浮んで。元來根帶なし。何やうに迷を重れても。一念心の瞋恚生ずべき理なきぢや。空中に地を履む。此地空に浮びて。元來根帶なし。何やうに迷を重れても一念心の瞋恚生ずべき理なきぢや。眼中に空ありて。此の色を視る。耳鼻口門に空ありて。此聲を聞き。此の香を嗅ぎ。此の味を知る。身中に空ありて。此の觸を覺す胸中肚裏臟腑皆空ありて。善惡邪正是非得失あり。世に處して。瞋恚を生ずるは。愚の至りと云ふべきぢや。此の色あり。唯是れ空中の影ぢや。此の聲

あり。唯是れ空中の影ぢや。此の香あり。唯是れ空中の影ぢや。此の味あり。唯是れ空中の影ぢや。此の觸あり。唯是れ空中の影ぢや。此の善惡邪正是非得失あり。唯是れ空中の影ぢや。唯食欲あり。唯是れ空中の影ぢや。此の瞋恚あり。唯是れ空中の影ぢや。迷はゞ迷へ。此の迷ひ元來根帶なし。覺らば覺れ。菩提は是れ空の義ぢや。眞正道人の世に在ること。虛空の如くぢや。七天は空中に在りて鬖鬖彌布す。大地は空中に在りて墜墮せぬ。元來虛空の上下はなきぢや。倒世界の人間も。井中に水を汲は。力を勞して水を得。空中に雨露をふせぐは。屋を覆ひて居住するぢや。此の緣ありて此の世に生ず。萬般唯だ緣由の差排ぢや。世事の思ふまゝならぬ處に。面白きことあるぢや。此の緣ありて此の苦樂を生ず。一切唯だ迷情の差排ぢや。我身の思ふ儘ならぬ處に。面白きことあるぢや。經說にかくあるぢや。元此の世界唯だ虛空のみなり。洞然として一物もなし其の邊際を云ふべからず。其の時空中に微塵生ず。此微塵を緣として。又彼の微塵生ず。其の微塵兩々相合し聚集して。次第に安布し。此世界現じ。山河出來るじや。何故に此微塵聚集して或は山と成り或は川と成るならば。此一々の微塵に。悉く堅濕煖動の四相を具す。此四相。或は聚集し。或は離散す聚集の邊に世界成立す離散の邊に。世界壞滅す。面白き物ぢや。一微塵の中に四相具足すと言へば。むつかしき微細なることを思ふべきぢやが。今眼に見ゆる物を以て推して知れ。空中に一片の雲生ずるに。其の色あり。其の形あり。其の動靜あるぢや。山中雲の生ずる處に坐して居れば。其の濕も覺ゆるぢや。一微塵に。堅濕煖動の四相具足することこの趣ぢや。水中に泡が生ずるも。其の姿あり。其の色あり。大小動作あるぢや。地上に一草生ずるも。其の色あり。其の姿あり其の濕もあり。功德もあるぢや。一微塵に四相具足するも此の理ぢや。物に大小はあれども其の理は違はぬぢや。

經中に。此の世界は。四大の所成とあり。四大と云ふは。地水火風ぢや。堅濕煖動を以て性とす。微りまへは。堅は地。濕は水。煖は火。動は風ぢや。此微塵の轉變に。堅相の多分聚集せるを。地大と云ふ。草木金石等。皆この地大に屬す。地にも濕ひもあり。煖まりもあり。動相もあるもので。此四相は相離れぬことなれども。多分に就て地を堅性とす。濕性の多分積集せるを水大と云ふ。雨露霜雪等。みな此水大に屬す。水にも。煖あり。動あり。堅相もあるもので。此四相は相離れぬことなれども。多分に就て。水を濕性とす。此中水の堅相と云ふは。長流水にも。一滴水にも。其形あるを以て知れ。煖と動とは知れ易きぢや。云ふにも及ばぬぢや。煖相の多分積集せるを火大と云ふ。日の光よりして。金石草木より出る火一切煖まりあるもの。光明あるもの。皆此火大に屬す火に濕も堅も動もあるものなれども。多分ににに就て。火を煖性とす。火の濕は知り難けれども。炙治して身體に潤澤を生ずる類。物を炒て濕を生ずる類にて知るべきぢや。動相の多分積聚せるを風大と云ふ。一切有情の息風。及び。一切有情非情の生長する。皆此風大に屬す。此風に。煖も

あり。堅もあれども。多分に就て風を動性とす。風の堅相も知り難けれども。つぢ風旋風水等にて。風の形あるときを知るべきぢや。」元來四大は相融せるもので。地の中にもあり火もあり。風もあり水の中に火もあり。風もあり。火の中に水もあり。地も風あり。風の中に地水火もあるものぢや。多分に約し。各自に名を立てゝ。地大。水大。火大。風大とするぢや。此四大各堅濕煖動を具足する中に。堅相ある處には。堅相が多分よりかたまりて大地となり。濕相ある處には。濕相が多分相歸して大水となり。煖相の多分ある處には。煖相がより合ふて大火となり。動相の多分ある處には。動相が相應じて大風となる。面白き物ぢや。此因緣ありて和合する。此因緣ありて壞滅する。世相面白きことぢや。」

天竺の諸論師が滅因の立破を論ずるも。面白きことぢや。元來一微塵の中に。堅濕煖動の相離れぬ故に。水と成て濕し。火と成て煖め。風と成て長養し。地と成て其形を生ず。大にもあれ小にもあれ。此四大互に因となり緣となりて。萬物を造作するぢや。正眼に看來れば。此心微妙なる物で。一塵の中に入て。世界成立の因となり。世界壞滅の緣となる。何の入さか說くべき。一塵直に自心の性相ぢや。世界直に自心の性相ぢや。若くは成立するも自心の性相を知るぢや。若くは壞滅するも自心の性相を知るぢや。」一類の衆生ありて。此世界百千萬劫確乎として住すと見る。一類の衆生ありて。此世界。念々轉變すと見る。自性空中。各自の業ありて此見差別す。面白きことぢや。此中。若自ら達すれば法々解脫し。萬境自ら如々ぢや。自ら迷ふ者は見るまじき物を見る。思ふまじき事を思ふ。此心。境界を逐ひ。境界。心を役使し。此四大を以て自身を造立し。安排布置し。現今の指爪髮毛皮肉筋骨五臟六腑などゝ云ふ類。皆地大に屬す。此は人間死すればみな朽て土に歸す。迷者の習ひ活て動き痛痒を覺すれば。是を我物と思ひ。日夜に保着すれども。唯これ生緣未だ盡きざる間の妄想のみにして。元來土塊に異ならぬぢや。一切山川大地。草木叢林を以て自身とすと說くは廣大なる事を言ひ出すやうなれども。元來此地大を自身と思ふより。看よ。遠くはなきぢや。平生二六時中正憶念すれば。此境界に相違せぬぢや。此身中。膿血涙唾痰陰膏汗髓。小水精汁などゝ云ふものは。皆水大に屬す。外より水をもち來りて口に入れ。養はされば。此類は潤るゝぢや。又此身の津液を以て外物を潤せば。小分其潤ひを助く。且く皮肉の內にあると外にあるとの異のみにて。水に相違なきぢや。通途の者は此を自身と思ひ。日夜保着し。自他隔歷すれども。元來この水滴。自身と認むべきものに非ず。一切の河海井池。雨露を以て自身とすと說くは。廣大なる事のやうに聞ゆれども。本來此膿血を自身とするより見よ。平生二六時中私だに交へれば。此法界身に相違せぬぢや。此身の煖氣は。火大に屬す。此四肢百骸。その命根任持する。此煖氣と俱となり居るぢや。此煖氣去り盡れば。形木石に異ならず。火大がなければ。人は活て居られぬものぢや。熱病增上すれば。眼前に火光を見る。此身の火大ある知るべきぢや。此身內の

火。外の日月の光と。相違せぬぢや。金石草木より出る火と相違せぬぢや。愚なる者は。此身内の煖氣を愛して。生を樂ひ死を惡む。一切日月寶珠。諸の火光を以て自身とすと說けば。廣大なることを云ふやうなれども唯此皮肉煖氣の分齊を自身と認むるを以て比對し看よ。今日の人も二六時中に。私の念に誑惑せられざれば。此法界身に相違なきぢや。此出入の息風。身の毛孔に通ふ。內の五臟よりして。外の皮膚髮毛まで生長す。皆風大の力ぢや。此出入の息。もと母の胎內に在りては。母の息と出入を同じくすと云ふ。分體の後。或は出息を初とす。或は入息を初とす。口を開いて外の風を內へ引入る。入るに勢ひありて又外に出づ。出るに勢ひありて。又內に入る。此風の出入する間を。活たる人間とす。十年にもせよ。二十年にもせよ。三十年にもせよ。五十。六十。七十年にもせよ。此息通ふ間は人間なるべけれども。出る息の勢力遲ひて再び入らざれば。木石と異ならぬものぢや。此世界の風と息風とは。元來ちがひなきぢや。鍛冶のふいごの如くで。此五尺ばかりの皮膚を往來するまでのことぢや。一切風大の自身とすと說くは。廣大なることを云ふやうなれども。本來斯の如くぢや。二六時中貪欲瞋恚に役使せられざれば。此法界身は當處に顯るゝぢや。此地水火風の四大。暫らく積集して離散せざる分齊に。人間一生の苦樂昇沈あるぢや。憶念すれば面白きぢや。

天竺の醫方明に。此四大を以て病を察し。四大を以て病を療治すと云ふことぢや。風大病に百一火大病に百一。水大病に百一。四大相雜する病に百一。此を四百四病とす。それ故水を服して病を治する方あり。身に灸して病を治する方あり。天地の氣を服して病を治する方あり。勿論地大の藥物を以て病を治する方ありと云ふことぢや。

此內の四大と。外の四大と。相順すれば增長す。相違すれば敗壞す。みな面白きことぢや。此內の四大に。色身强弱の差別志性智愚の差別あり。外の四大に。土地の墳壤。氣候の調不あり。此等の差排。こと〳〵く面白きことぢや。若得道の人は。左之右之。法の現前するところと云ふことぢや若諸天の中は淨妙の天宮。淨妙の天身。下類の測るべき所ならずと云ふ。畜生等の四大は。麁穢臭穢。常に苦惱逼切すと云ふことぢや。鬼神の部類は。或は總身火炎なるもあり。又總身風の如くなるもあり。其福分藥相に隨て。種々ありと云ふことぢや。得道の人は此等の差別。みな明かに知ると云ふことぢや。經中に。四大各神有とあり。密敎に。地天の法。多く福德增益門に修す。水天の法。多く請雨に就て修す。火天の法。護摩あり。此に息災も。增益も。敬愛等も成就す。事火婆羅門は。殊に敬重す。風天の法。多く神足を求むるに就て修すと云ふことぢや。此四海大神は。人間の身に徧滿して。人間あることを知らぬ。人間は四大を受て我身として。四大神あることを知らぬ。思へば面白きぢや。一微塵の中。此法門ありて。大小麁細互に融し。三世起滅互に攝す。一世界の中此法門ありて。三世互に攝し。麁細互に融す。一切世界の中此法門ありて麁細互に融

し。三世互に攝す。經中に。毛孔に世界を含すと。維摩居士が方丈室中に。八萬四千の師子座を容るると。劫數を食頃に經るると。有志の者は。法の趣きを知るべきことぢや。世の愚擬なる者は。凡夫が功德滿足して聖域に入ることを。蝮蝎が蟬になり。蝸牛が柱をつたひ軒をつたひて。屋に登る如く思ふは不是ぢや。若し輕躁なるもの。空腹高心に是心是佛と說き。煩惱則菩提と說くは不是ぢや。衆生界の外別に佛界あるに非ず。佛界の外に衆生界あるに非ず。佛界と衆生界と。元來一異を云ふべからず。迷ふ者は。諸佛の無上正覺の中に居て三毒を起す。此三毒衆生を惱亂すること。屠者の鮮肉を燒煮するが如し。諸佛は常に衆生三毒の中に在りて。無漏大定智悲に安住す。此無漏大定智悲。衆生界に應現して。月の萬水に影をうつす如くぢや。

此衆生界。往く處として地大ならざるなく。一切衆生。見る處として地大ならざるなし。自心に自心を執すれば。目前の境界。染汗法となる此の地大。沈重愚擬となり來る。愚痴の境界自心を黑じ心より又愚擬の境界を造して。乃至地中の蠢動となる。劫より劫を累れて此地大のある處は。愚擬のある處ぢや。若みづから回光反照せば。此心地萬德を生ず。此地大のある處。直に禪定のある處ぢや。」此衆生界。往く處として。水大ならざるなく。看る處として水大ならざるなし。若し流に隨ふて止むことなければ。此水は愛欲となり來る。愛心より愛境を造立し。愛境より愛心を相續して乃至愛相應の世界。魚龍の身心となる。劫より劫を累れて。此水大のある處は愛欲のある處ぢや。

若自ら回光反照せば。此水大。慈悲と相應す。衆生を攝取して。悉く救拔す。經中に。佛心とは大慈悲これなりとあるぢや。」此衆生界。往く處として火大ならざるなく。看る處として火大ならざるなし。若し能所相對して自他隔歷生ずれば。此火大。烈焰瞋恚となり來る。諸の違惱の境。我瞋恚を發起し。我瞋恚より。違逆の境を造立して。乃至瞋恚相應の世界。惡趣の生死となる。劫より劫を累れて唯純苦聚のある處ぢや。」若自ら回光反照せば。此火大。智慧と相應す。業種を淨盡して。諸佛の光明となるぢや。」此衆生界。往く處として風大ならざるなく。見る處として風大ならざるなし。若うかれ往いて止まざれば。此風散亂となり來る。散亂の境自心を熏じ。散亂の心境界を亂して第三禪已下。此風大に由りて禪定を亂す。今日出入の息ある者は。皆散亂に屬す。乃至散動の諸蟲となる。經中に。迦羅毘羅蟲。風を得て其身廣大に成るとあり。劫より劫を累れて唯散亂の有る處ぢや。若自ら回光反照せば。此風大。神通妙用を起す。阿難尊者の風奢迦三昧に入て。身を四處に分つも。其一分の德と丟ふことぢや。又斯の四大に一の空を加へて五大と云ふ。又更に識を加へて六大と云ふ。皆法の規則ありて差はぬことぢや。此中且く入道の初要。十善相應の分齊を說くぢや。諸有志の者は。入に隨て法甚深なるを知るべきぢや。」又經論の中に此說あるぢや。劫初は。人壽無量歲住して。得失是非なし。善惡の名字なし。然るに此心動作あり。暫らくも止息すべきに非ず。此心相轉變し。情欲兆すによりて。次第に飲食屋宅。國都聚落。男女

貴賤わかれ。種々の人事おこる。此人事差別の中に世界の法として惡法增長すれば。壽命も。福德も。相好も。次第に減損す。此時を減劫の時節と云ふ。善法增長すれば。壽命も。福德も。相好も次第に增長す。此時を增劫の時節と云ふ。此減劫の初。人壽八萬四千歲にして。大寒大熱なく。惡風暴雨なく。水旱疾疫の流行なし。世界動物なり。人心動物なり。長時無事ならず。善に進まざれば必ず惡に墮す。漸次に世衰ふ。初て偸盜の者あり。此時人壽半を減じて。四萬歲となる。執政の者。刑法を制して人民を治む。初めは此刑法を畏れて。世間惡事少し。後は侵す者漸く多し。刑法隨ふて嚴酷になる。此時人壽また半を減じて二萬歲となる。此後奸民殺刑を恐れて。初めて妄語あり。此言語正きを失ふとき。人壽又減じて一萬歲となる。此後偸盜妄語のみならず。殺生兩舌の者あり。邪婬嫉妬の者あり。人壽又減じて五千歲となる。此後非法惡貪。諸の邪法增上して。人壽また減じて二千五百歲となる。此後惡口綺語の者あり。人壽又減じて千歲となる。此後邪見の者あり。善を作して善の報あることを信ぜず。惡を作して惡の報あることを信ぜず。父母に孝を作さず君に忠を盡さず。老者を敬はず。有德を尊重せず。愚者。智者を師とせず。自ら用ひ。自ら誇り。非法を法とし。非道に道を立つ。人壽減じて五百歲となり。二百五十歲となり。次第に減少して一百歲に縮まる。此人壽百歲の時。釋迦如來出世したまふとあり。世界の法として。減劫の中にも。人民善を行すれば。壽命も福德も。其儘に住して。暫く減ぜぬとあり。唯減劫の法として。善に住

する時節は少く。惡に趣る時節は多く。佛法の中にだに。惡事に隨順する者は多く。諸善奉行する者は。少くなりゆく。まして世間には讒諂面諛の者は時を得。道を守り志を立つる人は衆人戲誚す。人壽また減じて五十歲となる。這般になり下りては。十善を說き。十善大。行ずる者は。諸人惡く謗り憎んで。相共に往來せず。十惡を行ずる者は。互に讚嘆隨喜す。此極惡事增長するとき。子の壽命は父より減じ。孫の壽命は子より減じ。斯の如くなりて四十歲に減じ。三十歲に促る時七年七月七日の雨降て世大に饑饉す。人民餓死して。十に二三ものこらぬとあり。世間の五穀の種も。朽壞して再び生ぜぬとあり。此を小の三災の第一饑饉災と名く。總じて人と云ふものは。愁憂すれば善事を思ひ習ふ。此饑饉災に遭ふて下品の厭離を起す。勿論諸〳〵の菩薩。諸〳〵の羅漢凡人に如同し。其根機に應じて。少分の十善を數へたまふとあり。此時初めて雨晴れて日光を視。人民歡喜して。少分善事に隨順す。此善事に隨順するに由りて。暫く此三十歲の壽命ありて住す。或は四十なるもの希にあれども。中夭して三十に滿たずして死する者多しとあり。此時たまさか粟稗等あれば。世の重んずる所となる。諸〳〵の金銀珠玉は。隱沒して再び顯れず。諸の錦繡綾羅の色よき絹も再び現ぜず。諸の花の美しき色も再び出來らず。諸菓等甘味の物も再び現ぜず。人の相好も次第に惡しく成りて。其時の相好端麗と云ふ人の貌は。今の貧窮醜陋の人の如く。平人通途は今の疥癩の者の如しと云ふ。此小善心ある故。世界其儘にて住す。減劫の法として。善法は保

ちがたく。惡法は增長し。後ほどわろくなる習ひ久しからぬ間に。又昔の饑饉災の事を忘れ。我私を主とし。恩義を思はず。段々惡事長じて。君臣も相欺き。親子兄弟の間にも。互に長短を求む。他家の交は唯妄語綺語貪欲瞋恚。殺盜邪婬のみになる。其時相好も福德も。更に羸劣になり壽命も二十歲に減ず。此人壽二十歲の時に七月七日の疫病流行す。天地の氣候不調なるに就て。疫疾の鬼神力を得。上下貴賤みな病に臥す。臥すもの多く死す。能緣所緣の習ひ。此死せし者亦癘疾の鬼となり。人民を殺害す。此七月七日の災に死する者。前の七年七月の饑饉に十倍百倍すとあり。此を小の三災の第二疾疫災とす。此七月七日過れば。此時中品の厭離を起して分に隨て善事に依る。菩薩羅漢凡夫に如同して。一分の十善を敎ふ。此時初めて日月の光も淸く。天地の氣候も暫く調ひて。疫病の流行止む。少分善事の力に由りて。二十歲の壽命ありて暫く住す。世界減劫の法として。二十歲に過る者。二十歲に滿ずる者は少く。滿せずして死する者は多し。久しからぬ間に。又疫疾の患を忘れて。萬事唯己が欲に從ふ。父子或は相傷ふ。鴟鴞の母を食する如く。君臣或は相凌ぐ。豺狼の食を爭ふ如く。人民の私增長して。十惡のみの世界となる同じ十惡と雖も。今の十惡よりは又更に熾盛なること百千萬倍とあり。人機も劣りて。少分の道理も一向通ぜず。飲食衣服もいよ〳〵麤になり下りて。草葉を以て身を掩ひ。草實を以て口腹を養ふ相好もいよ〳〵醜陋になり下りて。今の人より視れば。畜生にも類すとあり。此時人壽また減じて

十歲となる。生れて五月を經れば。男女婚嫁をなす。十歲を滿ずる者は。少く十歲に滿ぜずして。命の終る者は多し。一向惡事のみの中に。殊に瞋恚增長す。父母その子に於て害心を生じ。子その父母に於て害心を生ず。兄弟姉妹。君臣夫婦の中に於て。互に誹謗し。罵詈し。打傷し。損害すること。獵師の鹿を逐ふ如しとあり。此時世界に刀兵災起るとあり。他を看れば瞋恚生じ。聲を聞いては瞋恚生ず。國土は純に荊棘林となり。木石瓦礫も鐵蒺藜の如く。手に取る物ことごとく皆利刀の如しとあり。瞋恚の熾盛なるに任せて。向ふ者を皆互に殺害す。手足分段して。其忿猶止まず身首所を異にして。更に蹂踐すとあり。此間七日を經。此を小の三災の第三刀兵災とす。此災難に人民の死亡する。前の饑饉疾疫の難よりも百千萬倍す。日月も光彩を失ひ。天地の氣候も常にかはるとあり。其時唯一類の善根の衆生。此鬪諍の害を避けて。山中に逃げかくる。此を減劫の底下とす。人間たる者の果報として。是より惡きはなしと云ふことぢや。此七年七月七日の雨。饑饉災は。愛欲の水より增長す。衆生の心中に愛欲の水增長すれば世間に此災起るとあり。七月七日の疾疫災は。散亂愚癡より起る。衆生の心中に。散亂愚癡增長すれば。世間に此災難に生ずと云ふことぢや。此三毒三災の中に。初の七年七月七日の雨。饑饉災。次の七月七日の疾疫に死する人よりも。後七日の瞋恚鬪諍に繇りて死する人の倍々增長するを以て。瞋恚の大害

なることを知るべきぢや。其七日過て。日月の光彩あらはれ。氣候常に復る。その時。彼のかくれ避けし一類善根の人。山中より出見れば。國土は皆死人相枕し。骸骨縱横して。一の生人を見ぬ。暫くあつて。外には一類善根の衆生。山中に遁れし人ありて。かしこの山よりも一人こゝなる山よりも一人出で來る。その時互に相見て。親愛の心生ずること。小兒の母を見るが如く。互に是はいかなることにてかくありしぞ。是はいかなることにてかくありしぞと云ふて泣くとあり。此時諸人相集まり。上品の厭離を起し。再び退轉せず。互に親子の如く相親み。善心を生ず。此に至り。菩薩若くは羅漢世に交り出て漸次に十善を敎ふ。人民惡極まりて善を思ふ時節なるに由つて。好絹の染色を受けやすきが如く。先づ殺生を離る。此より壽命增し。父十歲なるに其子二十歲を保つ。壽命增するに由りて。善心を增長し。俱に善法を行じて。偸盜を離る。此世界人民悉く不殺生不偸盜を奉行するとき。父二十歲なるに其の子は四十歲を保つ。人民の福分も少しく古に復す。此壽命增し。世界も漸次によくなるに就ては。其心も自から正く。此よく邪婬を離る。次に妄語を離る。次に兩舌を離る。次に惡口を離る。次に綺語を離る。次に貪欲嫉妬を離る。次に瞋恚を離る。次に惡邪見を離る。かくの如く漸々に十善の世に還る。壽命も福德も。相好も。智慧も。次第に增長し。乃至四萬歲の壽を保つ。此時人民の善根いよ〳〵純熟して。深く後世の罪を恐れ。慇重に福業を修習し。父母に孝を竭し。主君に忠を盡し。有德の人を恭敬す。乃至八萬四千歲の壽命を保つて減少なしと云ふことぢや。此を增劫と名くとあり。其後又此十善漸次に衰ふ。次第に壽命減少す。減少するに就て心麁獷になり十惡次第に現起す。極々の時に至りて。復十歲となる斯の如く八萬四千歲より。減じて十歲に至り。十歲より復增して八萬四千歲に至り。增しては減じ。減じては復增す。斯の如く二十增減するを。一中劫と云ふ。此中劫の數滿じて。最後增劫の後。壞劫時至りて。此須彌世界壞滅す。此時一向に雨露等の潤ひなく。七つの日並び出づ。初に此日輪。次第に光昭增長し。諸の藥草等枯槁す。次に第二の日輪出るとき。大小の溝坑枯竭す。第三の日輪の出るとき。小河大河枯竭す。第四の日輪の出るとき。阿耨達池枯竭す。第五の日輪。第六の日輪の一分に由りて。大海枯竭す。第六の一分と第七の日輪に由りて。須彌山大地世界皆燒盡して。灰炭餘影なく。虛空になるとあり。壞劫の初より此虛空となるまで。又一中劫を經るとあり此虛空になり竟て又一中劫の時を經るとあり。此空劫已りて。次に成劫の初。空中に雲布いて車軸の雨ふる。夫よりして次第に世成立し。光音天より人間に下生して。無量歲住す。此間にまた一中劫を經るとあり。此後住劫の初に成りて八萬四千歲住し。乃至減少し十歲に至り。十歲より增して八萬四千歲に至る。世界の規則違はず。又二十增減して。一の火災ありと云ふ。斯の如く七つの火災ありて。一の水災ありと云ふ。水災とは。水輪より水出て。世界みな水に漂はざるゝこと。凍を水に浸す如しとあり。初めの火災は。初禪天まで燒す。此水災は二禪天に至る。斯の如く七つの火災ありて一つ

の水災あり。七つの火災ありて。一つの水災あり。七々四十九返の火災。七返の水災ありて。次に風災ありと云ふ。此風災は。風輪際より毘嵐猛風起りて。世界の物を吹倒す。日輪・月輪・諸天の宮殿なも吹きちらし。互に扣擊して微塵となる。諸の須彌。鐵圍山なも吹きちらし。互に扣擊して。微塵となる。たとへば米麥の粉をちらす如しと云ふことぢや。此の三災を前の饑饉等の小の三災に對して。大の三災と名く。此よりして。又世界成立して。七つの火災ありて一の水災あり。七つの水災ありて。一の水災あり。七々四十九の火災。七つの水災ありて一の風災あり。又七つの火災七つの水災ありて一の風災あり。此風災は第三禪天に至ると。佛說にかくの如くあることぢや。此も小根劣機なる者は。得信すまじきことぢや。なぜぞ。肉眼の所見でなく。思慮の及ぶところでなきぢや。肉眼の當りまへ。人中思慮の當りまへを以て云へば。此世界成壞の法は虛妄と云ふも可なりぢや。若し夏の蟲蜉蝣などを集めて。此人中四時の規則を說かば。得信すまじきことぢや。なぜぞ蜉蝣が當りまへを以て云はゞ。此四時二十四氣。七十二候の規則。人間萬般の事業は。虛妄と云ふも可なりぢや。此人間の。天地の間に起滅する。彼の蜉蝣に異ならざれば。この世界成壞の規則は。人間の知るべきところならず。たとひ强て解し得るも。人事に益なし。但し宿福深厚の人のみありて。佛說に信を生じ。此を以て自ら心地を照す。麁細融攝し。古今該羅して。優に聖域に入るぢや。何者か主宰と爲りて。此世界成壞を安排布置す。此初めの火災は。衆生の瞋恚より起る。次の水災は。貪愛婬欲より起る。終りの風災は。散亂より起る。四大の成壞。三毒の緣起。何れの處より來るぞ。唯これ現今衆生一念心上の安排布置ぢや。此一念心亦蹤跡なし。元來生なく滅なく。來なく去なし。悟らんと欲せば直に悟れ。汝が一念心。元來不可得ぢや。迷はんと欲せば迷へ。汝が一念心上の愛水世界をうほして生ず。生ずる者は必ず滅す。生滅ある處必ず來去あり。年代久近あり。小の三災。大の三災あり。此三千世界。同時に生じ。同時に滅すと云ふことぢや。儒者の中にも。この世界壞滅あることは。古より言ひ傳ふることぢや。近世ある者が。天地の間は生ありて滅なし。生々してやまずと云ふは曲談ぢや。古人も。此人間を小天地と名く其理あるべきぢや。此人間。生有りて。此滅あり。眼に見る所ぢや。此人間生滅あれば。此天地も生滅あるは。必然の理ぢや。此生滅有りて其規則ある。亦必然の理ぢや。元來緣起は麁細一致ぢゃ。牛馬の主人を識る。木に棲むものゝ風を知る。穴に居る者の雨を知る。芭蕉の雷聲に葉を開く。葵の日に向うて轉ずる。小物と雖もその規則差ひなきぢや。此中小人は小事を識る。大人は大事を識る。自心の及ばざる處。他も知るべからずと云ふは不是ぢや。

華嚴經の中に。瞋恚の罪。亦衆生をして。三惡道に墮せしむ。たま〳〵人中に生ずれば。二種の果報を得。一には短命。二には常に惱害せらる。恒に人に短を求めらるとあり。此を異熟果。等流果と云ふ。國土に毒蟲荊棘など多きは。瞋恚の增上果と云ふことぢや。

不瞋恚戒

○不邪見戒之上

安永三年甲午四月八日示衆

師云く。第十は不邪見戒ぢや。邪は正に。對ぜる名。よこしまにひがみたること。見はみると云ふ字。こゝは目でみるではない。心に見定むる處があることぢや。此見る處がよこ道へ往きたるを邪見と云ふ。此邪見と云ふ。此邪見の怖るべきを知りて正知見に隨順するを不邪見と云ふ。法有りて此不邪見を護するを。不邪見戒と云ふ。此邪見數多あれども。要を取りて言へば。斷常の二見に過す。斷見にいろ〳〵有れども。まづ善を爲して善の報なく。惡を作して惡の報なく。神と云ふもの。佛と云ふもの。今現に見るべきならねば。これもなきことゝ思ひ定むるを。斷見と云ふ。常見も種々なれども。且く人は常に人となり。畜は常に畜となる。人の畜生となるべき理なく。畜生蟲蟻の類が。人となるべき理もなしと思ひ定むるを。常見と云ふ。」正知見と云ふは甚深なれども。且くかうぢや。佛菩薩も世にまします賢人聖者も有るべく。神祇も目にこそ見えれ有るべく善を作せば決定其報有り。惡を作せば決定その報有りと信ずれば。此戒は全きぢや。此邪見の罪輕からぬ理は。まづ之を憶念せよ。通途おしなべての者を凡夫と云ふ。凡は凡庸の義にてよのつねと云ふことぢや。夫は士夫にて。男子の通目。なみ〳〵の者と云ふことぢや。此凡夫が此人

間界に在る。生れし朝より死する夕までかうぢや。此身有り。此鼻孔耳門口門有り。世界に色有り聲有り。香あり。味あり。男子女人あり。貴賤尊卑あり。苦樂憂喜有りて。皆心に適ふと適はぬと差別す。心に適ふ境界に貪愛を生じ。心に適はぬ境に瞋恚を生ず。かく形が別々に見え分れて有れば。此と彼と相對して。人に勝りたしと思ふ。左傳にも。有二血氣一者必相爭。とあり。此等を貪欲瞋恚。愚癡憍慢等と名く。此が誰れ教ふることを待たずして。生れしより。此身心につきそひたる煩惱なれば。俱生の惑と云ふ。此煩惱が人間天上等の生死輪廻となる。淺間しきことなれども。一切凡夫の當りまへなれば。惡趣には墮せぬと云ふことぢや。生れし後。成長し智慧づきたる時。或は邪教邪師に從うて其法を受け。或は自ら邪思惟分別して。斷常の二見を起し。甚だしきは殺生偸盜等に恐れなきやうになる。父母師僧の教に違背するやうにもなる。神祇をも畏れぬやうになる。聖賢德者をも蔑にするやうになる。因果をも信ぜぬやうになる。義理をも廢するやうになる。是は生れまゝの凡夫分際よりは。一段長ぜし煩惱なるに因りて。此を分別起の惑と云ふ。此類の者が惡趣に墮すと云ふことぢや。」此俱生の惑。分別起の惑の差別あることを憶念すれば。實に邪見の恐るべきことを知るぢや。近く天命人道に順じ。遠くは法性に順じて。此邪見を遠離するか今日說く所の戒相ぢや。

總じて戒法は不思議なるものにて。此戒善が身にあれば。外の惡事に自ら遠ざかる。譬へば國に武

備有れば。敵國が得窺はぬ如く。又人の元氣充實したる者は。風寒暑濕の外邪が侵さぬ如くぢや。」不殺生戒その身に具れば。假令怨賊毒蟲に遇うても。慈悲心生ず。諸の父を弑し。君を弑し。非理に有情を損害する惡賊煩惱はよりつかぬぢや。」不偸盜戒その身に有れば。金銀財寶。祿位官爵等の中に非理の求めはない。家燒劫盜。穿踰私竊などの惡賊煩惱はよりつかぬぢや。」不邪婬戒その身に有れば。他所誣の男女の境に於て。自ら愛著を生ぜず。一切非理の愛著。穴隙を鑽て相窺ひ墻を踰て相從ふなどの惡賊煩惱はよりつかぬぢや。」不妄語戒その身に有れば。一切語言が。自ら眞正なるぢや。一切欺誑惑亂。僞物を造作し。僞書を作り出す等の惡賊煩惱はよりつかぬぢや。」不綺語戒その身に有れば。言に虛飾がない。一切の口合ひ。非時の言論。小歌淨瑠璃等を弄ぶ。惡賊煩惱はよりつかぬぢや。」不惡口戒その身にあれば。言語自ら柔輭なるぢや。諸の罵詈呵責。惡聲怨言等の惡賊煩惱はよりつかぬぢや。」不兩舌戒その身にあれば。言語に仁愛の相あらはるゝ。諸の他の親孔を破り。隣里鄉黨の交を惡くし。君臣父子の間を離する讒言諂諛の惡賊煩惱はよりつかぬぢや。」不貪欲戒その身に有れば。二六時中到る所に足ることを知る。諸の多欲惡貪。威勢を羨み名利に耽ける惡賊煩惱はよりつかぬぢや。」不瞋恚戒その身にあれば。五尺の姿全く慈悲と相應す。一切の眉を顰め額を蹙め。目に三角を生じ。憂惱痛戚。嫉妬變異等の惡賊煩惱はよりつかぬぢや。」不邪見戒その身に有れば。一切の人民。貴賤男女を見るときにも。山河大地を見るときにも。全く因果應報の相ぢや。全く眞如實相のよそほひぢや。一切の邪思惟分別聖を蔑にし賢を誘り。神祇を侮り。佛菩薩を誹毀する惡賊煩惱はよりつかぬぢや。」此防非止惡の功能が任運無功用に日夜に增長して。暫くも息ぬ。譬へば日月の常に運轉して萬國を照す如く。草木の種子朽敗せざれば。枝葉花果日夜に增長する如く。獨樂の如く。自鳴鐘の如く。雪こかしの如く。境無邊なれば戒も無邊。心無盡なれば戒も無盡。此等の事は。淨持戒者の自ら知る所ぢや。世間富饒なる者なられば富饒の德は知らぬ。位ある者なられば。位の尊きことは知らぬ。詩人なられば詩の巧拙は知らぬ。學者なられば文學の面白きことは知らぬ。歌よみなられば歌のよしあしは知らぬ。醫者なられば清閑樂は知らぬ。その如く。自ら戒法を護持する人に非ざれば戒法の尊重なることは知らぬぢや。此不邪見戒法の中に。宿福深厚の者は。思の外なること有るものぢや。目には見ねども。佛有ることを信ずる假令心に得る位に至らずとも。法有ることを信ず。自ら凡夫位に在りて。聖者有ることを信ずるぢや。譬へていはゞ病人の此世の緣つきぬ者は。明醫の言を信じ。良藥を服し。親好看病の言に隨順する如くぢや。毓君が扁鵲の言を用ふ。此に因つて其太子蘇生す。佛在世に婆伽陀城の長者婦が。者婆の言を信じて。死すべき病の平癒せし類。引正王の。龍樹菩薩の數を守りて長壽を得し類。命根有るべき者は。明醫に逢うて其言を信ず。その如く。正法の惠命ある者は。不邪見戒に隨順するぢや。又譬へて云はゞ。賢君明主は。忠臣を信任し。諫言を用ふ

る如くぢや。漢の高祖が。諫に從ふこと。流の如く。唐の太宗の。魏徵が苦諫の言を用ひたりし類。その如く。正法の因緣ある者は。必ず不邪見戒に隨順するぢや。此に反して。宿福なき者は智者も愚者も。學者も不學者も。佛あることを信ぜぬ。聖賢あることを信ぜぬ。神祇あることを信ぜぬ。善惡報應あることを信ぜぬぢや。譬へて云はゞ。世間に病根深き者は。明醫の言を信ぜぬ。良藥を用ひぬ。扁鵲が齊の桓公を見て。君疾有り。今腠理に在りと。後五日復見て。君は血脉治まらず。恐らくは深からんと。後五日復見て君の疾。腸胃の間に在り。治せずんば將に深からんと。桓公初めより用ひず。後五日を歴て。扁鵲復見ゆ。桓公を望見て退き走る。桓公人を使して其故を問はしむるに。疾の腠理に在るときは。湯熨の及ぶ所。血脉に在るは。鍼石の及ぶ所。其腸胃に在るは。酒醪の及ぶ所。其骨髓に入りては。たとひ司命が來りても。之を奈何ともならぬ。今君の疾已に骨髓に入る。臣是を以て請ふことなしと。後五日ありて。桓公體に病を覺ゆ。此時扁鵲已に遁れ去る。桓公遂に死す。此等の類。古今通じて有り。重病必ず死の人は明醫の言を信ぜぬもの。又多くは明醫に逢はぬものぢや。その如く。正法の惠命なき者は。正知見の人に逢はぬもの又逢うても信ぜぬものぢや。又譬へて云はゞ。世間に亡國の時は。讒佞の臣左右に侍りて。忠良は多く隱遁す。假令明臣智臣有りても。その言を用ひず。其諫を聽かぬものぢや。唐の玄宗の時。安祿山より諂ひ事ふ。時の宰相張九齡。安祿山に謀反の相あるを知りて。彼に過有りしとき奏聞す。嚴科に處すべしと玄宗此を用ひず。太子肅宗も。此謀反の相を知りて奏聞す。彼は恐るべき者と。此をも用ひず。其後果して天寶の亂起る。此類亡國の兆と云ふものぢや。その如く。正法の因緣なき者は正知見の人に逢はぬもの。又逢うても信ぜぬものぢや正知見の中には。此神祇あるぢや。無しと云はれぬ。此聖者賢人あるぢや。無しと云はれぬ。善を作して其報あるぢや。無しと云はれぬ。惡を作して其報あるぢや。無しと云はれぬことぢや。古より明君英主は。山川宗廟の祭を忽にせぬ。孜々として善を修して。此を子孫に貽す。昔者莒伯。放逸にして祀らず。湯王牛羊粢盛を供するに。猶ほ其祀に怠る。終に其國を亡ぼし身を亡ぼすに至れりと云ふ。殷の紂王の惡事の中に。慢二於鬼神一と云ふが亡國の一事ぢや。周禮の天官に。祭祀以馭二其神一とあり又春官に。太宗伯の職。掌建二邦之天神人鬼地示一之禮以佐王。建二保邦國一などゝあり。左傳の昭公四年に。先務脩二德音一以享二神人一とあり。同じく。古者。日在二北陸一而藏レ氷。黑牡秬黍以享二司寒一とあり。司寒と云ふは。北方の神の名ぢや。此等に依りて看よ。佛法東流せぬ已前にも。明君英主は。神靈あるを信じて。其祭祀を忽にせぬ。暗君庸主は。神祇を蔑にするぢや。善を勉め惡を恐るゝも。此に準じて知れ。此中佛あることを信じ。法あることを信じ。善惡の業空しからぬことを信じ。神祇あることを信ずれば。上一人より下庶人に至るまで。此戒は破せず。此德を日夜に發ひ立つれば。人々聖賢の位にも

至る。近き處に在りて而も甚深なり。易き處に在りて而も廣大なることぢや。

前に云ふ所の邪教とは。天竺の數論師が二十五諦の法。勝論師が六句義。十句義の法。路迦耶が撥無因果の教等。總じて十六異論。九十六種の外道の類。支那國にて云へば。累代の五嶽の道士。宋朝已來の儒生。老子孔子の道をとり謬る者の教などぢや。

前に云ふ所の邪思惟とは。天竺支那より此邦に至るまで。世智辯聰の者の思惟分別か。皆此中に攝す。」この邪思惟は。愚癡の煩惱なれども。菽麥を辨ぜぬ樣なる者には反てない。一類思想多き者に在り。若は緣事にふれて。忽然として解了生じ。若くは細思審察して。其解了生ず。宿世の緣に隨て。初一歩に正道か邪道かの徑路分る。世に宿福深厚の者は少く。業障深重の者は多き習ひ。多少の人が。若くは斷見。若くは常見。此二途が落着場所ぢや。此斷常の見に墮つれば。此不邪見戒を破す。初一歩の時。眞正の善知識に逢うて。其教導を得れば。眞に正道に趣く。譬へば病人。病輕き內明醫に逢ふ如くぢや。若し時を經へ。年月を隔れば。其迷深重になる。若し他人を導けば。業障增長して。累劫正道は遠ざかる。鬱頭藍子。阿藍迦藍が。佛世尊の教導に漏る類ぢや。

其斷見と云ふは。一類の世智辯聰の者が。思惟度量するに此身有て此心有り。生れし初めは只箇の赤子。二十三十は箇の成人。七十八十は箇の。老耄山氣男多く。澤氣女多し。此習ひ有りて。此性あり。亂世に武勇の士多く。治世に文雅の士多き。孟母三遷して。其子大賢と成り。鬼谷子縱橫の說を教て。弟子遊說の客と成り此乳養あつて嬰孩生育し此老病有りて。身心壞滅す。肚熱に惱まさるゝ者は。譫言し煩悶して死す。老を盡すに歸する者は。羸々として陽氣去る。陽氣去り盡きて。形木石の如く。冷骨髓に徹す。腸胃腐爛して。臭氣外に溢る。燒けば灰埋めば土に成る。此身滅して。其心何れの處に殘るべきぞ。燈火を吹滅するが如く。更に一物の留るべき物もなければ。去るべき物もなしと。」まづ是が極底下麁相の斷見と云ふものぢや。此樣に見定むれば。因果報應の理は虛誕に極まる。善を作して惡の報もなく。からくり人形のそこれたると同じ事と云はればならぬ。

又一類世智辯聰の者が思惟度量して此姿形は皮肉を以て虛空を圍みしもの。內におのづから天地の氣が籠る。是が心となる。天地の淸氣を稟けし者は聖人賢人となり。濁氣を稟けし者は佞人愚人となる。此淸濁の別は有れども。天地の氣に相違はない。若人が死すれば。此身は灰か土かに成てしまふ。身が無くなり已れば。この一元氣依り處を失ひて。飄然として風の通る如く。泯然として烟の消ゆるが如く。跡かたもなくなると思ひ定む。」次に此が少し巧なる斷見と云ふものぢや。此は前の見處と同じ樣なれども。其差別あるぢや。前の見處は。身死する時其心直に無くなるに極まる。此見處は心を天地の氣と思へば。元來形骸の外に心を見る故身心同時に滅すと定め難い。古戰場などに鬼類のあらはるゝ類は。勇者奮勵の氣のしばし散ぜぬと云はればならぬ。此が前の見處と別な

る處ぢや。又元來氣なければ終には盡きるに極まると云はねばならぬ。此に至りては前の見處と同轍に落着す。」凡夫と云ふ者が。妄想分別を以て思惟すればいつまでも妄想のみぢや。誠の道には遠きことぢや。」その者が。一つの譬を擧げて曰く。清夜盤に水を湛へ置けば。此中へ月影がやどる。此月影は天より下りて盤の中に入るにあらず水あれば其處にうつる。其水をこぼし了れば月影はなくなる。先にうつりし月影が天へ飛揚り。本の月中に歸るにあらず。當處に生じ。當處に滅す。若し此盤の水を彼の甕に瀉すとき此盤の月影が。水と共に彼の甕に入にはあらず。當處に滅して當處に生ず。人と云ふ者も其ごとく。皮肉。虛空を圍んで。氣が內に籠り。其心となる故。衆形がなくなれば心も隨て滅す。善を作して善の報有るべきならず。惡を作して惡の報有るべきならず。佛者が愚癡なる故に。此器の水を彼の器へうつすとき。此許の月影が彼許へうつり往くやうにおもひて。因果報應を怖るといふ。」此等の解了を。驪龍の珠を得たるが如く思ふて。書籍にかきのこし置くものも有り。世智を以て分別する者はかうぢや。何方までも。世智ぢや。元來この生死去來世智を以て知るべき處でない。彼の月影の盤水にうつる譬も。麁相に思惟せばさもあるべきやうなれども。具に思惟して看よ。理に當らぬことを知るべきぢや。

今正く譬へて云はゞ。心性は月の如く。境界は盤水の如く。妄念想像はかの月影の如くぢや。盤水有る處は必ず月影有り。月影は月輪の體ならねども。影は必ず月に由りて生ず。かくの如く。

境界の有る處は。必ず其念生ず。必ず本性に因りて起る。盤の多少に隨ふて。月影も亦多少有り。月影に多少はあれども。天上には唯一月輪のみ。斯の如く。念想は境に隨ふて多少あれども。心性は唯一法性のみぢや。此盤水を彼の甕にうつすとき。此月影が彼へ移り往くに非ず。當處に滅して當處に生ず。念想も亦斯の如し。看よ聲の念が去りて香に移り往くには非ず。香の念が去りて。味に移り往くには非ず。聲の念は。聲處に生じて聲處に滅す。味の念は。味處に生じて味處に滅す。一つの器に水を貯ふれば。一つの影有り。百千の器に水を貯ふれば。百千の影有り。念想も亦かくの如くぢや。一境を緣するときは。此念は一相に似て現ず。百千の境を緣すれば。水念は百千に似て現ず。廣大の境を緣すれば。此念は廣大に似て現ず。微細の境を緣すれば此念は微細に似て現ず。其水をこぼし了れば。其月影が飛揚りて天上の月中に歸るには非ず。當處に生じて當處に滅する如く。此境去れば。この念去りて本性へ歸するには非ず。唯當處に生じて當處に滅す。昨夜の月影は昨夜に滅す。滅し已りて無かと思へば。今夜盤水を貯ふれば。必ず昨夜の月影の如くにうつる。今年中秋の月影は去年の影ならねども。必ず去年中秋の月影に違ひなくうつる。念想も亦かくの如く今日の念は昨日の念ならねども。必ず昨日の如くに生ず。假令十年二十年昔の事も。其境來れば其念生ず。境過去に屬すれば。此心も過去に屬す。境未來に屬すれば。此心も未來に屬す。過去は未來の爲に緣となり境となる。具に思惟すれば。此譬の中にも。因果報應の理は

明かに現ずることなれども。知らぬ者は知らぬぢや。

蕭齊の時范縝と云ふ者が有りて。盛んに無佛を稱す。その時。竟陵王子良と云ふ人は。篤く佛法を信ず。或時竟陵王が。縝に謂ふ。君は因果を信せぬ。今現に富貴貧賤あるはいかにと。范縝答ふ。人の生るゝ樹花の同く發く如し。風に隨ふて散ずれば。或は籬墻にふれて糞溷の中に墜つ。其茵席に墜る者は殿下なり。糞溷におつる者は下官なり。貴賤は殊なりと雖も。因果に關らぬことゝ。」此等も。一往聞けばさもあるべき樣なれども。再三思惟して看よ。道理に應ぜぬ。花の風に隨うて散ずるは。なるほど一時の拍子にて。茵席の上に墜るも糞溷の中におつるも。强て差別はない。其故花が當りまへで云ふに。茵席に落ても苦もなく樂もなく。好き事とも思はねば。惡き事とも思はぬ。糞溷に落ても。苦もなく樂もなく。好事とも思はれば。惡き事とも思はぬ。人間はそれさへ大に違ふ。貧賤なれば自身のみならず。親屬まで苦む。富貴なれば自身のみならず。親屬まで榮耀す。花の散ると同じ樣ではない。世智辯聰の人は。譬の取りやうも當らぬことゞもぢや。古人も死生命あり。富貴天に在りと云ふ。風の吹いて來る如くとは云はぬ。伯牛が手を執りて。斯の人にして此病あり命なるかなと云ふ。風に吹かるゝ如しとはない。此等を以て看よ。人間一生の貴賤貧富。患難逸樂。時の拍子とばかりは云はれぬ。命を受くる所有るべきぢや。此者が又神滅論と云ふ書を著して云ふ。形はこれ神の質。神と云ふ者は形の用。利の刀に在る如く。刀沒して利の留ること無に由りて。形滅して神の殘る理なしと。」此も一往はさもあるべきなれども。再三思惟せば。その大に相違せることを知るべし。夫れ人は萬物の靈なり。天地に參て三才と稱す。此人の此心ある。方寸の間に隱れて。天地の外を該す。一類定まり有りて。萬物の理を備ふ。現今出で來りて。古今の成敗に明了なり。天地も此人間有りて。上に覆ひ下に載す。萬物も此人間有りて。各其用あり。神祇も。此人間有りて。其德を顯す。其來る處を對すれば。幽玄にして知るべき所ならず。刀の鍛冶が手より造作する如くに非ず。其用處を詳かにすれば。麁細兼了して蹤跡を得難い。鑿の木を穿ち。芒鎌子の草を刈る。大刀に大刀の用有りて。此を小事に用ひられず。小刀に小刀の用有て。此を大事に用ひられぬ如くには非ず。此心有りて此心の貴きを知らず。人趣に生を受けて人趣の貴きを知らず。悲しむべきことぞ。

支那國に佛法の渡らぬ已前にも。聖賢の書には。此斷見なきぞ。古書をよく看よ。且らく一二條を擧ぐれば昔者。吳の公子季札が其子の葬に。其封を環り號哭して。骨肉歸二復于土一命也。若二魂氣一則無レ不レ之也。無レ不レ之也。と云ふ。左傳に。齊の公子彭生が死後に形を顯したる。魏武が妾の父の。草を結びて恩を報じたる。鄭の伯有厲鬼と成りて祟をなしたる。子產が。鬼歸する所あれば乃ち厲をなさずと云ふて。伯有が子の良止を立て宗廟あらしむ。此に由りて妖鬼しづまりしあり。其後子產晉に適いて。趙景子と此鬼を論ぜし。此類多きことぢや。

此等の斷見が一たび起れば。正法の淨信心を失ふのみならず。支那仁義の教も立たず。忠孝の道も立たず。天を祭り先祖を祭るも。むだごとになりゆく。本邦神道の教も立たぬ樣になる。諸惡の中に。諸見ほど猛利なる惡はない。諸見の中に斷見ほど。猛利なる惡はない。此見が一たび生ずれば。諸の善根を失ふことぢや。

其常見と云ふは。一類世智辯聰の者が思惟度量するに。胸の中あばら骨の間に。昭々靈々たる物が一物ある樣に覺ゆるぢや。死する時には。若くは目より。若くは鼻より飛び去りて。人間にもあれ天上にもあれ。畜生にもあれ。絲に隨ふて其處に生を受くること。譬へば舟に乘る者の。輿に乘りうつる如く。窮民の此屋を出でゝ。彼の家に往き住する如しと。まづ通途の常見はかうぢや。此は極下劣の見なれども。禪定知見がなきものは。出家も在家も此見を出ぬ。博學座主の。口には唯識の理を微細に云ふ者も。一乘圓頓の趣を精しく講ずる者も。內心は多く此見に住す。靈利なる衲子が。古則公案を判斷し。或は些子の消息を面白く言ひまはす者も。內心は多く此見に居る。憐むべきことぢや。」是より甚だしき者はかう思ふ。人はいつまでも人。畜はいつまでも畜。男はいつ迄も男女はいつ迄も女。生々の處。楷定して變異せぬ。世間の道理も。五穀各其種子有りて。米麥混ぜぬ。華果各その種子有りて。李奈あやまらぬ。桃の實を植ゆれば桃の木生ず梅には梅ならぬ。瓜を植ゆれば瓜生ず。芥子は生ぜぬ。若し犬が生を轉じて。人となり來らば其者は人に

吠えつくべきなれども。終に人に吠えつきたる小兒もない。若し猿が人に生じ來ること有らば其者は輕躁騰躍なるべきなれども。終に。樹梢を攀ぢたる小兒もない。人はいつまでも人にて。その中に。善根あれば。善き處に生れて富貴榮耀の身となり。惡業多ければ。惡き處に生れて貧賤患難の身となる。唯人間の中。所作の業優劣有りて。貧富貴賤智愚賢不肖差別す。畜はいつまでも畜にて善因緣あれば。山林に遊戲し。好水草を逐うて逸樂を受く。若し惡業あれば。重を負ひ。遠に往き奴隸に打たれ。或は强き者に殺害せられ。獵師の弓矢に中る。唯畜生道の中に爲す所の業の優劣に由りて。苦樂を招くと。此等は更に下劣なる見なれども。今時の者に。喉くびを押へて實情を吐かせば。此見處の者も多かるべきぢや。此より更に下劣なる者は。國々の中にも。大方人數も定まり有りて人が死して鬼となり。鬼が死して又人と成る。めぐり旋ると覺ゆ。總じて緣起の法として。此土地有りて此人あり。此人有りて此穀米器財あり。國の廣狹。人の多少。穀米器財の有無。皆其分限の顯るゝものなり。是を肉眼を以て見。妄想を以て思量すれば。如上の見處を起すもさもあるべきことぢや。經の中に輪王十善の世。人民熾盛なれば。海水減じて土地を增すさあり。肉眼を以て定むべき事に非ず。妄想を以て計るべき事に非ず。又此常見の中に。一類の正直なる妄想有り。明の代に鮑性泉と云ふ者。天樂鳴空と云ふ書を著し。其中に記す秀州北門の李畫師ある炎熱の時。庭中に出て。視るに。大なる蛭が。石の上に在りて日光に曝され。反覆して苦しみ死し。暫くの間

に其腹裂けて蜻蜓に成り飛び去る。李藹師が心は。蛭が日に曝され死するは。必ず蜻蜓になるべきものと思ふ。其後是も炎天方寸の雲なきさき大なる蛭を見る。故に箸を以てはさみ取り。石上に置いて。日光に曝し看る。是も反覆して苦しみ死す。暫くの間に。皮裂けて。此度は蜈蚣に成りて走り去る。鮑性泉が之を評判して。同じ様なる蛭が。同じ様なる死なれども。初めは自業自得の死なる故に。蜻蜓に化し去る。蜻蜓と水蛭とは同じ蟲なれども。其位異なり。水蛭は重濁遲鈍の者蜻蜓は空中に飛行して。輕清自在なる者。其業力の純熟。期せずして然り。後の蛭は。人故に殺されて。瞋恚相應の死なる故。人に害ある蜈蚣に成る。蜈蚣は蜻蜓に比ぶれば毫釐千里なり。此一念瞋心其まゝ毒物に化す。臨終の一念に由りて。淨土に生じ。惡趣にも入ること。決定此理あり藏識體なし。緣に從うて相を現ず。業に定性なし。刹那に變易すと。此居士は。法に志有りて雲棲の袾宏天台宗の智旭等と。互に相唱和せし人にて。自ら死期を知りて豫め其子に命じて。其日に齋を設け親族朋友を請じ。齋了りて禪定に入る如く終を取りしとあり。憐むべき生なるものなれども。此見處は常見有相執着の妄想にて。正法知見には遠くして遠い。生死の道理はかくあることではない。蛭の腹が破れて蜻蜓が出る。此蜻蜓を蛭の後身と云はれぬ。試みに看よ。あらめ昆布の類を。薄の中に浸し置くに。蛭に變ずること有り。此蛭を海布昆布の後身とは云はれぬ。馬尾に糞土がつきて蜂に變ずること有り。また馬尾に着いてある間に。其首も腰も羽も出來る。此

が成就し了れば。馬尾を離れて飛び去る。此蜂を馬尾の後身とは云はれぬ。また木の葉が卷いて。色が變じて芋蟲に類せる蟲となること有り。この芋蟲に類せる蟲も。木の葉が後身とは云はれぬ。又草木の枝に目鼻がつき。小枝が手に成りて。蟷螂になること有り。此蟷螂を。草若くは木の枝の後身とは定められぬ。月令に。季夏の月。腐草螢となると。此節には。諸の腐草が。同時に發心して光明の業を造ると云ふべからず。莊子に烏足の根蠐螬となり。葉胡蝶と成ると。此は一物が二の蟲と化す。此二類を。此一物分身して二類を現ずと云ふべからず。又石蛤石蟹の類を。見れば。有情が非情に化する事もあり。此類數多し。若し思量臆度を以て此等の趣をはからば。風を繫ぎ。虛空に畫くよりもはかなきことぢや。修行道地經に。常有の者は。惡趣に入ること希なれども。解脫を得ること晩きと。常見有相執着は。眞に憐むべきことぢや。支那宋元已來。我邦中古已來。見處を書あらはせし書は。多く此類ぢや。總して肉眼を以て見。妄想を以て推量る間は。正知見は得られぬ。此天樂鳴空は。續藏の中に入つてあるが。此類の淺はかなる書を聖教の部類に從へ置くは。悲しむべきことぞ。此外修行力なき禪者の語錄。さり違へたる教者の注疏などを。藏經の中に入れおく。誠に末世ぢや。法寶は此通りに成り。佛像は十に七八は造り謬り。僧儀は一向に違ふ。聖教を棄てゝ僞經を讀誦し受持する者も多い。誠に悲しむべきことぞ。

又一類世智辯聰の中に。此見處の者あり。一切の法は。有と思へば有ぢや。無と思へば無ぢや。一念

心上に執着あれば。多生の生死の業となる。好鉢に念を殘せし者が。餓鬼となり來りて鉢を舐る瓜を踏んで追悔せし者が。惡趣に入つて蛙に責めらるゝ。一念心上に前後際斷すれば。見聞覺知の境が皆解脫知見となり來る。本來無一物の處に。地獄もなく天堂もない。三世不可得の場所に何の業か有るべきと云ふ。是も龐相に聞けば。高きこと。面白きことの樣なれども。無理ぢや。前の鮑性泉は眞の道にこそ遠けれ。正直にてよきが。此は一向に目に見しこともなくて。妄に言ひ出すに由つて。更に謬る。志あらん人は。よく思うて看よ。いかほどに無と思ひ定むるとも。目前の壘席柱天井障子がなくなる物に非ず。或は磯邊の石有りて船を寄するに便ならぬに。此石を無くすれば。世人渡海運送の助となる故。無と思うて無に成ることならば。無してやりたきものなれども。さうなる者ならず。又いか樣に有と思ひ決すとも。なき物が現じ來ることならず。飢たる者が。いかほど深重に食を憶念しても。食が出來はせぬ。凍たる者が。いかほど衣服を思惟しても。衣服は出來はせぬ。今貧窮下賤なる者に。財寶俸祿を觀じあらはしてさらせたならば。悅ぶべきなれども。是もいかほど觀じても。なき財寶俸祿が出來るものならぬぢや。是は佛說の唯識所變の理を。自己の妄想にあてがふ。淺間しき見處と云ふべし。

又一類の世智辯聰がかく思ふぢや。色身は壞滅の法。心性は不滅の道。此身朽敗すれども。心性は滅せぬ。此身限りあり。五尺の小身のみ。此心極まりなし。天外地外に充滿す。壞滅の法に隨順すれば。六道の苦樂昇沈窮まりなし。不滅の道に順ずれば。四聖の妙果を得ると。此等も龐に聞けば面白き樣なれども。淺間しき見處なるぞ。佛說の眞如緣起を聞いて。これを自己の妄想と率合し。あてがひ拵えた見處ぢや。一人にて斷常二見を帶び來りて。色身に斷を計し。心性に常を計す。兩種外道の轍迹に追逐し。東西に奔走して。車塵馬足に生涯を送る者共ぢや。此樣なる見處だては皆いらぬことぞ。眞正知見は。此等の途轍でない。今世の見處だてを好み。悟り樣のことを云ふ者を看よ。多くは貧窮なるぢや。子孫に災あるぢや。此類皆人道に違ふ。世智辯聰を長ずるは。天の惡む所なるぢや。伶俐俊發は反て耻べきの甚だしきぞ。本を推して云はゞ。法性に背く。若し立上りては。古人云ふ。澄潭月影。鳳ニ波瀾一而不レ散。靜夜鐘聲。隨ニ扣擊一而無レ虧。猶是生死岸頭の事なりと。口欲レ言而辭盡。心欲レ緣而慮亡するも。有言に對し。妄想に對せるなりと。本業瓔珞經に。善惡一相。明闇一相は。阿鞞闍國外道の偈なりと。具さに憶念すべきことぢや。此外見處と名くべきならず中に。色々の妄想あり。一類偏見の者が斯く云ふ。諸道みな假り設けしことなり。夫れ佛法の中。釋迦如來と云ふ。實に其人有るに非ず。其誕生入滅。年代部に依つて異說あるを以て知るべし。唯阿難迦葉等が。信を後世に取らん爲めに。一箇の奇妙不思議底の人を假り設けて。自ら所得の道を成立したるものと。又此說をなす。儒中に孔子と云ふ。實に其人有るに非ず。野合して孔子を產むと云ふ。又尼丘山に禱りて孔子を得。丘字仲尼と名くと云ふ。家語などに浮漫

の說あるを以て知るべし。唯子貢曾參等が。信を後世に取らん爲めに。一箇の君子樣の人を假り設けて。自ら所立の道を弘めたるものと。又此說をなす。道家に老子と云ふ。實に其人有るに非ず。その書中。三公と云ふ。偏將軍上將軍と云ふ。仁義ならべ稱す。此類みな古語に非ず。此を以て知るべし。關令尹喜等が。信を後世に取らん爲めに。一箇の飄然たる人物を假り設けて。自ら所立の道を證したるものと。又此說をなす。中古禪宗の。達磨と云ふ人も。實事ならず。付法藏傳にも。師子尊者に至りて法斷絕すとあり。後人婆舍斯多尊者已下を加へて。達磨に及ぼす。梁武の問答も。魏の宋雲が流沙に逢ひたるも。皆年代相違あり。歷史に通ぜざる者の所作なり。惠可僧璨の類が。列子莊子に附會して思ひ寄しことを。世に信を取らん爲に。一箇の俊邁活潑底の人を假り設けしことなり。此より降りて。諸宗の佛法は。皆夢に託して說き出す。顯密の祖師。多くは夢中に夢を說く人と。

又一類偏見の者が。思惟分別してかく云ふ。誠の道と云ふものは。今日の有るべき通りに在る。今の捉を守り。今の道を行ひ。今の言をいひ。今の君に仕へ。今の人に交り。今の衣を着し。今の食をくらひ。今日の業を本とし。心をすぐにし。身持を正くし。物いひを徐かにして。立ふるまひを慎み。親ある者は。能くこれに事ふまつり。君ある者は。能くこれに心を盡し。子ある者は。能くこれを訓へ。臣ある者は能くこれをおさめ。夫ある者は能くこれに從ひ。妻ある者は能くこれをひきゐ。兄ある者は能くこれを敬ひ。弟ある者は能くこれを愍ひ。年よりたる者は能くこれをいとほしみ幼者は能くこれを慈み。先祖のことを忘れず。一家の親をおろそかにせず。勝れたるを貴み。愚なるを侮らず。凡そ我身に當て惡きことを人になさず。するどにかど〳〵しからず。ひがみて頑ならず。迫りてせは〳〵しからず。怒るとも其ほどをあやまらず。喜ぶとも其守を失はず。受まじき物は。塵にても取らず。與ふべきに臨みては。國をも惜まず。色を好んで溺れず。酒を飲んで亂れず。人に害なき物を殺さず。身の養ひを慎み。貴賤共に其分に違はぬ。古今萬國。みな道は此にとゞまるを。

又一類偏見の者が云ふ。天竺支那日本共に道を說く者悉く加上して立つ。天竺には世間人倫に加上して。梵天四禪を說く。其後の者が。此梵天四禪に加上して無想天と云ふを說き出す。此無想定に加上して。其後の者は無色定を說く。阿藍迦藍は不用處定を說く。鬱頭藍子は非想非々想定を說く。沙門は其上に加上して。滅盡定。涅槃を說く此沙門の中に。阿含三藏敎等に加上して。法相大乘。或は空無相の敎を說く。又其上に加上して。一乘秘密乘などを說く。」支那の敎には周代に齊桓晉文の覇業の上に出て。孔子が文武を憲章す。此儒者の上に出て。靈觀が夏の道を說く。揚朱は又其上に出て帝道を說き出す。許行は神農の道を說く。莊子が徒は無懷氏葛天氏を說く。此邦の神道は。最初に儒佛の道を牽き合せて。兩部習合と云ふ。その次に佛者の徒が。神道の起りた

るを妬み。本迹緣起の神道を說いて。表は神祇を顯して。底裏は此を佛道に歸す。其後一般の禰宜神主。佛法の世に盛なるを妬み。此二途を破して。唯一宗源の神道を說く。其後には此を王道に歸して。王道神道を說く。近頃は表に神道を說いて。底裏は儒道に歸す。三國共に人情は一樣なりと。或者が云ふには。是は上の今日の有るべく。道と立し者の見識なりと。

又一類の書生が。論語孟子を讀み。宋儒性理の學を信ず。或時一つの禪者に遇ふて。些子の消息を聞いて。一省々發すと思ふ。其後。孟子の浩然の氣。中庸の上天の載りは。無聲無臭と云ふ。鳶飛んで天に戾り。魚淵に躍ると云ふも。相應する樣に覺え。論語の天何をか言ふや。四時行はれ。百物生ずと云ふ。曾點が沂に浴し。無零に風して。詠じて歸らんと云ひ。相應するやうに覺ね。聖賢の地位も外ならずと思ふ。此者が後に先生と成て他を導くに。此妙處は。佛法も儒道ト違はなけれども。儒者には。身を修め。家を齊へ。天下を平かにする道あり。佛法にはこれ無きに因つて。唯儒道のみ全き道と。其至つて憐むべきことは。草木國土。悉皆成佛と云ふを聞いて僻解を生じ。禪家の三種病の則を看て妄想を長ずる類と云ふことぢや。

又一類の者が云ふ。天地の間に定まれる道なし。昔より衆聖人の手を歷へて。次第に成立して。世を濟け民を救ふと。此樣に道を拵え事にて。定法なしと云へば。聖人と云ふも。作者の名にして。聰明睿智の德のみを稱するにあらずと云はればならぬ。仁義も。民を救ふに付いたる名にして。德義の名に非ずと云はればならぬ。何事も皆安排布置に落ることぢや。

神道と云ふ者の中に。一類偏見の者此說をなす。一切神祇みな愚民を畏れ慎ましむる教にして實跡を求むべからず。此陰陽。此日月。此四時。此山川森落。强て分配して神號を立す。聖賢の君。有功の士。下勇憤の士。放逐の臣。凡そ衆人の思ふ處。此社を建て祭る。既に神あり神社あれば世人附會して怪談を立つ。世に害なきことは。王者も此を禁ぜず。正史も隨ふて記す。聖德太子。舍人親王等。假を以て世を救ふ。其事實を求むべからず。舊事記。神代卷みな一定ぜず。天照皇太神を或は男子とし。或は女人とするを以て知るべし。其事蹟皆惡虛にして信じ難し。若陰陽五行の配屬と云ふは大害なけれども。其五行の分配も。漢儒にだも及ばず。爾餘の神書。大成經の類は僞作と思はる。伊勢內外宮。神官の秘する所の五部の書なども。皆兩部習合家。眞言天台の沙門の安排せし所にして古書に非ず。自餘神主禰宜などが家々の書は多く短才寡聞の者の作りしものなり。年代蹟相齟齬するを以て大理を知るべし。

又一類の者が。大成經などを丸信じにして。疑はしき事有れば。神託を受くと云ふて齋戒をなす。齋戒了りて。自ら神靈我爲にかく決すと稱して。新に奇事怪談を加へ。或は祭祀の式などを造作す。密教に附會し少しく改易して。神道を說く。四大五大は理を盡さず。唯五行のみ是盡理の說なりと云ふぢや。

一類の者は〻神祇造化。氣化。形化。心化等の名目を立て。安排布置するも有るぢや。世間に妄想も無邊なるに由つて。諸見もかぎりない。爾餘衆多の見處解了。或は書籍の中に記し。或は世に現存す。大凡此類は。宿福の人には少く。貧賤の者には多い。謹慎の家には少く。無頼の家には多い。過去世十善の闕失より起ることゝ知るべし。此等の少解了に由りて。大法を喪に。するは。人間天上の路を失ふ。經の中に衆生憐むべしと有り。誠に生れたまゝに貪欲瞋恚の煩惱を具へて有るに。其上邪教或は邪思惟に因つて。現在の福緣を失ひ。當來の苦果を穫ることぢや性相學者の無性有情なくば。最後の佛。化他の德を闕べしと云ふを見て。義解會通の分齊を知る。教者の。如來惡性を斷ぜば。普現色身何に由つて現ぜんと云ふを聞いて。分教開宗の差排を知る。孟子荀子の書を看て。辨論時に用なきを知る。張儀蘇秦等が遊說を看て。利口の邦家を覆へすを知る。申子韓非子が刑名法術の書を看て。世智の世を亂すを知る。司馬相如謝靈運が風を看て。文章の實義にそむくを知る。楊雄王通が學を看て。模擬の德を亂るを知る。宋儒が歷代君臣を褒貶せしを看て。書生の時宜に昧きを知る。梁湘東王の戎服して老士を講ずと云ふを看て。博識の時宜を害するを知る。千般萬般。凡夫のなすところは。唯これ凡夫行にして。凡夫の思ひ慮る處は。唯これ妄想ぞ。自ら分を知り。自ら業果を信ずるには如ぬぢや。前に云ふ處の不邪見の德を發ひ全くせば。人々聖賢の地位にも到るべしとは。別事にはあらず。

善を作して善の報あり。惡を作して惡の報あり。是の一つにても。比屋みな聖賢の地位に入るべし。善を作して善の報有ることを信ずれば善を作さずには居られぬ。惡を作して惡の報有ることを信ずれば。惡を止めずには居られぬ。惡をなさず善を作す人は。其のまゝ善人なるぞ。今日も善人。明日も善人。內心に惡なければ。實の智慧生ず。此の生も善人。來生も善人。善より善にうつり。實智慧を全くする。人を賢人と名づく。聖人と名づく。若し世に聖賢あらば。聖ほます〳〵聖なるべく。此萬善智慧圓滿具足せる人を佛世尊と名づくるぢや。さて〳〵世間の者が。近き處に在る道を忘れて迷ふ。むつかしくなき理を外にして謬ることぢや。

此佛有ることを信ずれば。的を見て矢を發つ如く。孜々として善を作して止まぬ。元來平等法性の中に。此佛を信ずれば。此心卽ち佛心と云ふべし。此場所省發も入らぬ悟もいらぬ。敎相判釋もいらぬ。文章利口もいらぬことぢや。

此佛となるべき道を。法と名づく。其道を行ふ人を。菩薩と名づく。此道を守護する者を。諸天神祇と名づくることぢや。

此神祇有ることを信ずれば。たとひ小根劣機の者も。人しらぬ心の內にも。惡事は思はれぬ。まして惡事はなされぬ。人と云ふものは習はせに由る。善を習へば善にうつる。此習が性となり。此善が我心身となる。天神に事へて。天神の德を我身に全くすゝ。地水火風の四大神を祭りて。四大の德

を全くす。此德を全ふする時節が。聖賢の地位に入るべき時節ぞ。支那國の古書に。歷代王者の五行の德を述ぶる。是もなきことに非ず。天下を掌握の中に全くする人は。自ら四大五行の德あるべし。萬般唯信ある者と共に言ふべきことぢや。

不邪見戒之上

○不邪見戒之中

佛在世の事ぢや。經中に。日連尊者に摩訶羅の弟子有り。此人出家の後。自ら諸根闇鈍なるを省て。懺悔の心生じ。自滅せんとす。尊者神通力を以て直に其處に至り。告て曰く。汝自滅することを勿れ。汝に生死の趣きを知らしめん。卽ち禪定に入り。將いて海濱に至る。此海濱に一つの女人の屍有りて仰ぎ臥す其面上に蟲有りて。或は鼻より入て口より出づ。或は目より入て鼻より出づ。摩訶羅これを見て問ふ。此はいかなる人の屍ぞと。尊者曰く。此者は商主の婦なり。其夫寶を求めんため海洲に赴く。此女人別れを惜み悲泣す。哀聲傍人を感動す。同旅の者云ふ。萬里の海渡生死ばかり難きなれば。別れを惜むも其理あり。然れども。今日に至りて思ひ止まるべきならず。同船あるべしと。商主が此言を用ひて將いて往く。時に海中難風起り。其船破碎し。同伴悉く溺れ死す。此女人は平生鏡に照し面を見て。自身の眉目のうるはしきを樂みし者なり。今面上の蟲は彼が後身なりと。此摩訶羅是等のことを觀じて。淨信心を生じ。其後尊者の敎授を受て。終に羅漢果を證得せりと云ふことぢや。總じて心のある處は。形のある處。形の生ずる處に其心生ずるぢや。此女人自らの眉目鼻口のそなへに自ら執着せし故。一息微斷の時。其着せる心。還りて己が面上に生じ。蟲と爲りて曾くも離れ得ぬぢや。摩訶羅と云ふは梵語で。此に

は老なり愚なりと翻す。愚人の年を重れたる者の名ぢや。看よ。正法は智愚を擇ばず。唯信ある處に此縁起實相は顯るゝぢや。今日の者も。純一に心を寄せば假令摩訶羅なりとも。甚深の法に通達すべきぢや。

是は佛滅後のこと、付法藏傳等にある緣事ぢや、天竺國に、夫婦相敬愛して情厚き者有り。其夫少壯の年に命終す。此妻殊に悲しみに堪へず。亡夫の爲に。脇尊者を請じて供養す。そのとき鼻より蟲出たるを。庭上に投じて踏躪らんとす。尊者云く。且らく待て。此は因緣の有ることぞと。女人が云く。この七八日の間。我鼻の内を惱ます。今幸に出と。尊者再び告ぐ。此は汝が夫の後身なり。彼常に汝が容色を愛し。身心繫縛せり。其死せし日より汝が鼻の中に生ず。此蟲を殺さば。汝が身に災有るべく。其罪も深かるべしと。因に神力を以て此蟲の本形を顯し見せしむと云ふことあり。此も心の赴く處に生を受けたものぢや。前は己が面に生じ。此は妻の面に生を受く。受生の處は別なれども。生死緣起の理は一ぢや。

是は佛在世の事ぢや。僧護經にあるぢや。舍利弗尊者の弟子に僧護比丘と云ふ有り。或時商人友を結んで。南方大寶州に赴く。功德の爲めに此僧護比丘を請じ。船中に供養せんことを願ふ。僧護比丘之を和上舍利弗に白す。舍利弗之を世尊に白す。世尊利益至るを觀見して聽許す。時に海中難なく。大寶州に至り。隨意に諸〻の珠玉牛頭栴檀を乞ろ。歸路商人議す。陸地を取らんや。海路を取らんや。海路は危難多し。陸路に赴くべしと。皆船を棄て陸地を取りて歸る。或時僧護比丘靜處に思惟し。同伴を失ふ。獨り行路に迷うて異路に入る。路次種々希有の事有り。其中に一の裸形の有情。火に燒かれて苦を受く。又或所に。兩人の禿頭の者互に相抱きて。此も火に燒かれ苦を受く。此類總じて五十六事あり。其より一つの林に至る。此林中に五百の仙人住す。初めは釋迦の弟子來り。我閑林を汚すと云ふて共語せず。其中上首の者慈悲あり。一樹下を許す。僧護比丘此樹下に在りて。初夜思惟し。中夜暫らく眠息し。後夜に至りて聖伽陀を諷す。時清夜月明かに。其聲林木に傳ふ。諸仙感嘆して。到り來り安慰す。僧護比丘聖法を說く。諸仙各信を生じて。此僧護比丘に從ふて出家し。悉く聖域に入る。次第に禪法の教授を受く。久しからずして羅漢果を證す。僧護比丘此五百の羅漢を誘引して歸着し。祇園精舍に詣す。時に諸商人も其會にあり。僧護比丘進んで世尊を禮し。裸形有情の事を問ふ。世尊答ふ。彼は過去迦葉佛の時の出家人なり。僧の臥具を妄に受用せし罪に由りて。此孤獨地獄に在りて。今に此苦を受く。次に兩出家の抱いて苦を受くるを問ふ。世尊言く。此も迦葉佛の時の出家人なり。兩人互に相愛して。毎夜相抱き臥す。此罪に因りて。孤獨地獄に在りて。今に苦を受くと。次第に五十六事を問ひ奉る。世尊具に五十六事。及び仙人證果の因緣を開示す。其時在會五百の商人此等を聞いて悉く信を生じ。進んで五戒を受しと。

此等は甚深なることぢや。前の女人面上の蟲と。其樣子は殊なれども。その理は一ぢや。譬ば夢中におそはれて。種々の境界を見るが如く一息截斷の時。業相に轉ぜられて樗形を見る。其時樗形と自心と。一と云ふべからず。異と云ふべからず。心の赴く處が生死の或る處ぢや。業火に燒かるゝぢや。兩出家人は。愛念に因りて形を顯す。形に因りて愛念を生ず。此身心が出來れば業火に燒かるゝぢや。是を以て。前に云ひし。鮑性泉が言ふ處の。蛭の蜻蛉蜆蛤に變ぜし事を返照し看よ。邪正洞然たるぢや。

是も經中にある事ぢや。目連尊者後夜坐禪より起つて。大衆に告ぐ。此曉天の時。樓閣形の有情號泣して虛を凌ぎ去るを。六群比丘此を聞いて相語す。此目連人を誑惑す。我等神通なしといへども。阿含阿毘曇を奉持す。何處に樓閣形の衆生あるべき。大衆も皆疑ふて。此を世尊に白し奉る。世尊言く。目連の見る處虛ならず。しかれども。此類稀有の事は。妄に人に告ぐべからず。目連の多言なるは非なりと。大衆再び白す。此はいかなる衆生ぞと。世尊言く。此れ輕地獄の衆生なり。前身人間たりしとき。佛閣を己が遊覽所となしゝ故。此報を受て久しく苦しむ。此類甚だ多しとかうぢや。心の住所に其形現ず。業に隨ふて其報を受く。今此人間に生ずるも。業に隨ふて生じ。生を受くるに隨ふて其念の相續することぢや。此人間分際を看れば。樓閣の衆形生なゝきけば。奇怪なる樣に思ふべけれども。正眼に看來れば。珍らしきことではない。且く此人間の眼鼻と云ふものも。手足と云ふものも。自性法界より看れば稀有なるものぢや珍らしき物が出來てあることぢや。

百丈禪師の垂語にかうしたことがある。人の命終のとき。一生所有善惡の業緣悉く現前す或は悅び或は恐る。六道も五蘊も。俱時に現前す。舍宅を見る。舟船車輿を見る。光明顯赫たるを見る。此は自心の貪愛より現ず。一切の惡境も。そのとき皆變じて嚴好の境と成る。但愛の重き處に隨ひ。業識にひかれ。着するに隨うて生を受く。都て自由の分なし。龍畜良賤も亦總未定と。此垂語は面白きことぢや。此中に爲人垂手の手段もあれども。大抵かく有るべきことぢや。傳戒相承の義に此趣きあるぢや。聖敎の文にも有るぢや。死するとき刀風あり。內より發して。其支節を解す。頭上より脚下に至り。大苦痛を生ず。心識惛昧にして。諸根守を失ふ。此時一生作しゝ處の善惡業相。其目前にあらはるゝこと。市に入て諸〻の器財を見るが如し。其諸業の中强き者先づ牽く。其業相の現ずる。若くは順若くは逆。一定し難し。或は魔來りて相を現ず。好相も取るべからず。或は思想轉變して。種々異相を見る。若くは恐怖の境界。若くは適悅の境界。みな其取捨を云ふべからず。唯正知見の人のみ在りて。法に自在得と云ふことぢや。又經に此說あるぢや。臨レ死の人面上に五色の風あり。若地獄に入る者は黑色。若畜生に生ずる者は。青色若餓鬼に生ずる者は黃色。兼て舌を出す。人に生ずる者は。常色。若天に生ずる者は鮮華色。綺光

愛すべしと。若側らに侍りて。死者の相を看るに。或は手を擧げて打拂ひ。或は虛空を攫み。或は白沫を吐き。或は身體煩悶し。手足繚亂する。此類みな惡相なりと云ふことぢや。若柔輭の顏色慈愛の相有りて命終し。若くは合掌歡喜して。正念相應する等は。善相なりと云ふことぢや。大抵は。善相なる者は善處に生じ。惡相あらはるゝ者は惡趣に入ると云ふことぢや。若其傍に居らば。佛菩薩を念ぜしめ。大乘經諸陀羅尼を讀誦するを要とするぢや。近邊みな寂靜なるがよいと云ふことぢや。夜分の燈燭もかすかなるがよいと云ふことぢや。病人平生の功德善根を讚嘆するがよきぢや。假令平日に怨ありとも。其時は云ふまじきぢや。起居食事萬端みな病人の心に適ふべきことぢや。又別因緣有りて。得道の人も。外に苦相現じ。又惡人の苦相なきも有ると云ふことぢや聖敎の中に人の死する時。直に中有の形あらはる。極善極惡の者を除きて。其餘の者は。必ず皆此中有の形が現ずとあるぢや。中有とは。此生既に盡き。次の受生の緣未だ來らず此時中間の身心あらはる。此身心。死有の位に非ず。生有の位にあらざる故に。中有と名づくるぢや。此中有に六道差別す。此人間の中に。此生緣つくれば死すまじと云ふことはならぬぢや。譬へば高峯より大石をまろばし墜とすに。中間に遮止すべき術のなきが如くぢや。既に死して直に生ずるも。其中間の有がありと云ふことぢや。若其父母に定めて此子を感ずる業あれども。若くは父若くは母に違緣あれば。暫く其生緣の來らぬこと有るべし。或は餘緣有て。生處定まらぬことも有るべし。其間は此中有の委に處すと云ふことぢや。又生處の決定せぬ者の類が。中有の間。善緣惡緣に由りて轉變ずることも有と云ふことぢや。中陰四十九日の間に。亡者の親屬たる者。善根を修すべきことみな聖敎に有ることぢや。印度の部計の中に。大衆部等は。中有を立てぬ。此等は法相の差排と云ふもので。生死去來の道理。相違あるではなきぢや。若極善の人ならば。此世界が直に七寶淨刹となり來る。或は願に從ひ生を受て。衆生を利益し或は其處が直に四空天となる。間に變を容れぬと云ふことぢや。

又極惡人には中有はないと云ふことぢや。緣事を擧げていはゞ。佛滅後。或尼寺に一人の中年容貌端正の尼有り。持戒精勤衆人に勝る。諸の尼衆問ふ。女人の法として。智慧淺薄にして。煩惱熾盛なり。汝志性堅固なること衆人に勝る。若くは聖者に非ずやと。此尼涙を垂れ。慚愧して答ふ。一つの懺悔すべき事あり。我少年のとき早く嫁す。一人の男子を得たり。我夫たる者久しからずして死す。一人此兒をそだつ。容貌も才藝も。相應に生ひ立しに由りて。母子の愛情いやましに深し。此者成長するに就て。同類近隣の女子ある者は。多く娶すべき思を寄す。此者みな辭すほどなく病に臥して。日々に憔悴す。衆醫が皆云ふ。此は風寒暑濕の侵す所ならず。心の抑鬱より生ずと此を聞いて。その親き者に思ふ處を問はしむ。彼答ふ。我おもひあれども。有るまじきことなり。昔ふべからず。問ふ者慇懃に問ひこゝろむ。彼云ふ極めて慚づべきなれども。我母に愛着心生じて

此病となると。此者此由を我に告ぐ。我も有るまじきことなれども。一子を殺すことをなげかはしく思ふて其事を許す。彼これを聞いて。次第に其病平癒に赴く。或夜我床に上らんとする時。家居動搖し。彼が身戰掉し。大地くぼんで陷らんとす。我此を悲しんで。彼が髪を取て引擧げんとす。其髪脫けて終に陷り沒す。其髪今現に爰に在り。此因緣に由りて。生死の怖るべきを思ひ。世染の思なく唯三寶に歸投すと。此等が極惡の中有のなき現證と云ふことぢや。

其餘の善惡雜る者は。必ず此中有あつて現ずと云ふことぢや。若天に生ずべき者は。諸天相應の中有あり。人間に生ずべき者は。人間相應の中有あり。餓鬼は餓鬼相應の中有あり。地獄は地獄の中有。畜生は畜生相應の中有ありと云ふことぢや。

此中人間相應の中有は其姿二三歲の小兒の形の如しと云ふことぢや。此中有のあらはるゝことを譬敎に譬喩を以て明して。印子の泥を印する如しとあり。此は土人形などを造る喩ぢや。印子とは。おしかたのことぢや。人形を作る者が。土泥を能くとゝのへおきて。摸に入れて造る。此譬は近く人々日に見る事にて。しかも生死去來の相を解するには甚深なるぢや。又板木を以て紙におすも。又鑄工が蠟形を以て佛像などを作るも同じきぢや。餘文には。蠟印の泥を印する如しともあるぢや。印子を以て泥に印する時。印すると下へうつるとか。同一時同一相ぢや。中有も此通りにて。此生緣の盡る時か。直に中有の初にして。同一時同一相ぢや。泥は印子にあらず。印子は泥にあらぬ。

泥と印子と。其體別なれども。必ず印子の模樣が。直にこれ泥の模樣ぢや。その如く。此に作りなせし業相は中有に非ず。彼に顯るゝ中有の姿は現在の善惡業相にあらず。今日の業相と。中有の姿と。其體別なれども。現今の善惡業相が直に是中有の姿ぢや。印子と泥形とは。其模樣文は一なれども。一と云ふべからず。其泥形と印子とは。異なれども。異と云ふべからず。彼の中有の形と此業相とは。必ず一樣なれども。一と云ふべからず。中有は中有。業相は業相なれども。異と云ふべからずぢや。此死時の刹那と。彼の中有の姿と。その同時に成ずることを。聖敎に喩を以て明して。秤と錘との低昂する如しとあり。秤を以て物の輕重を定むる時。右昂れば左低る。左昂りて右低る。低と昂と必ず同時ぢや。此生死去來の相もその如く。此に死する時が彼に中有の顯るゝ時ぢや。

此中有より彼の生有に赴くことも。亦印子の泥を印する如くぢや。中有の念相の如く。彼の生有を成ず。此も亦秤錘の低昂する如く。此中有の滅するときが。直に彼の生有の最初ぢや。」此死有は心識晦劣なれども。無量の善惡業煩惱無明を具へて彼の中有にうつること。大船に衆多の器財穀物を積んで纜を解く如くぢや。此中有は色身幽微なれども。亦無量の善惡業煩惱無明を具へて彼の生有に赴くこと。大船の衆多の器財穀物を積貯へて。風帆にまかせ往くが如くぢや。俱舍瑜珈等の所說に。中有の人趣に赴く。必ず七日の內なり。若その時。父母の因緣いまだ熟せざれば。

死して復生ず。此中有の壽命は七日に極まる。乃至七々四十九日には。決定して生を受くることあり餘經に。或は久しきを歴るも有りと云ふことぢや。傳戒相承は。此二文共に障礙せぬぢや。法の當相。諸〻の異說を合して一緣起の相ぢや。五年十年が脩でもなく。一日二日が短くでもない。唯是夢中の脩短ぢや。面白きことぢや。過去現在未來の三世も。唯これ妄心夢中色々と現ずるのみにて。元來實體なきぢや。此等の事も能く思惟すれば。廓然として開解せればならぬ。一日二日が短くもなきことを知れば。今日も法と成り來るぢや。明日も法と成り來るぢや。夜も法と成り來るぢや。晝も法と成り來るぢや。刹那の間も法と成り來るぢや。五年十年百年千年が脩くもなきことを知れば五年十年も法と成り來るぢや。百年千年も法と成り來るぢや。未來の未來際までも法と成り來るぢや。此法を云ふは贏劣の法ではない。諸佛の無上正覺の法ぢや。夢を以て譬へば。夢中に五年十年の事を見る。覺め來れば暫時の間ぢや。元來夢と云ふものは。想念の所現なれば。世間の事實に當て其脩短を云はれぬものぢや。中有も此に類して。唯業相轉變の久近なれば。現今人間世界の年月に當られぬことぢや。此人間世界の日月年時は唯是人間世界の日月年時に。こゝ。中有の脩短ではない。中有の脩短は唯是中有の脩短にして。人間世界の日月年時ではない。一日二日が短くでもなく。十年二十年が脩きでもなく。緣來らざれは一刹那の間に數十年を經るぢや。緣來れば數十年も一刹那に攝し來て卽ち生ずるぢや。元來業相の轉變は實體なきものぢや。中有の長短も。

現今の長短も。電光を尺として陽炎をはかる如くぢや。

此中有の法として。假令千里萬里を隔つるも。其有緣の生處を見る。其聲を聞く。假令中間にそこばくの國土あり。山川聚落あるも。皆畢竟じて龜毛兎角の如くぢや。其中間に百千の衆庶。萬億の人民有るも。皆畢竟じて龜毛兎角の如くぢや。唯其因緣の在る處が。我眼のおよぶ所。わが眼の及ぶところが。我生死のある所ぢや。譬へて云へば。此所に安臥して。夢中に出羽奥州の事を見る。長崎對島の事をみる。其中間の山川聚落人物は何ほど有りても。龜毛兎角の如くぢや。緣起元來不可思議ぢや。千里萬里が遠くでもなく。隣里鄉黨が近くでもない。元來法は遠近を離れたるものぢや。面白きことぢや十方世界種々國土あるも妄心夢中に色々と現ずるばかりで。實體なきことぢや。此も能く思惟すれば。廓然として開解せればならぬぢや。百里千里が遠くなきことを知れば。支那天竺も法と成り來るぢや。新羅百濟も法となり來るぢや。見ぬもろこしが法となり來れば。名を聞かぬ世界も法となり來るぢや。眼前咫尺が近きでもなきことを知れば。隣里鄉黨も法と成り來るぢや。五尺の小身も法と成り來るぢや。目に見えぬ微塵極微も法となり來るぢや。此法と云ふは贏劣の法ではない。諸佛の無上正覺の法ぢや。夢中に百里千里の事を見るも。唯これ方寸の中の轉變と云ふべきことぢや。此方寸も元來規度を以て度すべきなられば。方寸が近きでもなく。百里千里が遠きでもない。中有も如レ是。業力の牽く處は。百里千里も唯是眼前ぢや。因緣なきところは咫尺も

千里ぢや。眼前が近きでもなく百里千里が遠きでもない。現今の境界も中有の境界も元來游絲をのべて春風を繫ぐ如くぢや。

其中有の眼根は。天眼の如く障礙の外を觀ることあり。不思議なるものぢや。眼根に見ゆる處が生處の國ぢや。其國土の中に。次生の祿位官爵。君臣朋友。苦樂昇沈が定まるぢや。此國土と中有の念相と。一と云ふべからず。異と云ふべからず。國土のある處は。即ち念の生ずる處念の生ずる處が即ち生處ぢや。一期の苦樂昇沈ぢや。その處に心相が移り往くこと天上の月の水中に影を移す如くぢや。此國に假令百千萬の家は有るべきなれども。餘は此眼の所見ではない。唯其所生の家が。此中有眼根の所見ぢや。その所見の家が。即ち生處の定まる所ぢや。此中に次の生一期の氏族貧富。威勢高下定まるぢや。此家姓氏族の中有の念相と。一と云ふべからず。異と云ふべからず。此家姓氏族が。即ち念の生ずる處念の生ずる處が即ち次生の生處ぢや。

其家にたとひ百人千人有るも。餘人は此中有の所見ではない。唯其父母のみ目に見ゆと有り。此時兄弟姉妹嫡庶の分際が定まる。此父母と。中有の念相と。一と云ふべからず。異と云ふべからず。此父母が。即ち中有の念相の生ずる處。念の生ずる處が即ち次生の生處ぢや。其時中有の念相に。必ず父母に於て親愛の念が起るとあり。此中有衆生の親愛の起る時が。其父母交會親愛の心と。必ず同時ぢやとあり。此も其父の親愛の心。母の親愛の心。其子の親愛の心が一と云ふべからず。異と云ふべからずぢや。此父母交會が即ち中有念相の生ずる處。中有念相の生ずる處が。即ち次生の生處ぢや。何故かくぞ。元來一切衆生は。平等々々なるものぢや。此平等法の中に緣來れば生ず。緣去れば滅す。違緣なれば互に瞋恚を生ず。順緣なれば互に親愛を生ず。此因緣轉變は本來の自性には相關らぬことなれども。生死去來の中には。決定して免れぬぢや。此中親子因緣の會遇するときは。必ず父も母もその子も。親愛の心が同一時に至極すと云ふことぢや。此も經論の中に。多くは其中有の差別有りて。男子に生ずる者は。父に恚を起し。母に愛を起す。女子に生ずべき者は。父に愛を起し。母に恚を起すと云ふ文もあれども。傳戒相承の義は。且らく父母共に親愛を生じて託胎する義に順ずることぢや。

此親愛の心相應する時は。その父母の衣服相好も。中有眼根の所見ならず。唯父母の身支のみ。此中有眼根の境界と成り來ると云ふことぢや。此父母の身支と。中有の念相と。一と云ふべからず。異と云ふべからず。父母の身支が。即ち中有念相の生ずる處。念相の生ずる處が。即ち次生の生處ぢや。中有の色心は微昧なれども。大船の衆多の器財穀物等を載せて。風帆に隨ひ湊にはせ入る如く。過去善惡業。一切智愚。賢不肖。福祿患難等の種々の業相を殘さず。任持し來りて。此生有に赴くことぢや。此時父母血分の二滴が直に此中有眼根の境界。過去業相の依り所。此生の袋ぢや。此父母の血分と。中有の念相と。一と云ふべからず。異と云ふべからず。父母の血分が即

ち中有念相の。生ずる處中有念相の來する處が。即ち次生の生處ちや。一生色身の强弱。相好の醜。身の長短。智慧愚痴。德相貧相煩惱の厚薄。報障等の差分大抵此所に定まるぢや。此時中有滅して生有と成り來る。此も託胎の初めと。中有の終とが同一相にして。印子の泥を印する如くぢや。印子は泥にあらねども。印に由つて泥形が定まる。中有の福德智慧。煩惱業相を取もなほさず。此生有が現ずるぢや。土泥は印子にあらねども。印子の模樣を其まゝにうつして。少しも相違せぬぢや。生有の煩惱智慧福德業相。皆中有の任持し來る通りぢや。此中有の滅すると生有の初めとは。全く同一時にて。稠錘の低昂するが如く。いづれを先ともいづれを後とも云ふべからずぢや。前の死有の終と中有の初と。同一時同一相にして。一と云ふべからず。異と云ふべからざる如く。今は中有の終と生有の初と同一時同一相にして。一と云ふべからず。異と云ふべからずぢや。初め託胎の姿は至りて微味なれども。此一生の苦樂昇沈。藝の巧拙。運の强弱。みな此所に具足するぢや。能々思惟すれば面白きことぢや。胎内の五位。皆過去世の業相の通りに成熟す。十月滿じて生れ出る。父母も何底の物が生れ出ることを知らず。其子も何底の處に出ることを知らず。唯業力裝飾して。此一期の報身を成ずることぢや。此中少分は其父母の善惡現緣に由つて其子の相好智慧も轉變し。其母の行住坐臥。飲食衣服。志性作業に由りて。其子の身相の好惡康羸も轉ずべきなれども。大抵は業相自から一定して。此世に出生するぢや。出生の後父母の乳養飲食衣服等の差別。家の貴賤身の貧富。作業の高下。交友の親疎。身の勞逸。心の憂喜。藝の巧拙。力の强羸等。皆目に見る通りぢや。此中。居は氣をうつし。養は體をうつし乳哺。飲食。衣服等のそだてに由りて。身の壯健羸劣も分るれども其大體は業相成熟したことは改まらぬものぢや。看よ親咸心を盡して育つる小兒に。病身短命なる者もあるぢや。繼母などの憎み恚くんで育つる小兒に。壯健長壽なるものも有るぢや。周の先の棄は。母が林中水上隘巷に棄つれども。鳥獸が覆育すと云ふ。徐の偃王は。母が水濱に棄置くに。犬來りて覆育すと云ふぢや。此類古今少からぬぢや習興性。父母師長。教導の力に由りて。善より善に移れども。其大抵は業相成熟し來たることは遷されぬものぢや。堯の子に丹朱。舜の子に商均が出る。又瞽瞍が子に舜も有り。鯀が子に禹有りと云ふことぢや。今日現在になす事愼むべきぢや。智者は。善惡の業。毫釐差なきことを知る。君に忠を竭し。父母に孝を盡して。君親の歡を得るときが。直に我福德の定まる時ぢや。君を蔑しし。師教に悖うて。君父師僧の憂戚を生ずる時が。直に我惡業苦報の成就する時ぢや。後學を教導して。其慧解を生ぜしむる時が。直に我生々の處。惠業の成ずる時ぢや。鳥獸を殺すに。彼が苦の至極する時が。直に我生々夭折の報の成就する時ぢや。

地獄も。餓鬼も。畜生も。諸天も。その苦樂昇沈は懸に違ふぢや。なれども其業種子の成就する中有の現ずる。其道理は同じことぢや。經論の中に。諸天の中有は。頭を上にして坐す。人間等の

中生は。鳥の飛ぶが如く倏に往く。地獄の中有は。頭を下に向けて。高きより墮つるが如しとあるぢや。又諸天に。生ずる中有は淨妙の珠の如く。或は音樂等を聞き。或は淨妙の香を嗅ぎ。或は清涼の風に觸れて適悅の樂みを得ると云ふことぢや。人間等は。苦樂相雜し。淨穢相雜すとあり。其中福德の人は樂多く。無福の者は苦惱多しとあり。地獄等の中有は。或は熱風に迫り。寒風にくるしみ。或は恐怖の相あり。或は炎焰圍繞すとあり。經論の中に。此三界二十五有。共に必ず愛を以て受生す。諸天に生ずる者は。彼の淨妙の宮殿樓閣を見。或は舞樂管絃に心を寄せ。或は林樹浴池等を見て生を受く。地獄等に生ずる者は。寒風になやまされ。火光の所に愛を生じて。八熱の地獄に往き。或は熱風に逐はれ。清涼の池を求めて。八寒の地獄に生を受くとあり。多婬の者が。劍樹上に美女を見て。此に念を繫けて苦を受くるなどの事が說いてあるぢや。餓鬼畜生も此に準じて。初生の時は必ず彼の境界に愛心を起して生を受くと云ふことぢや我相に因つて業を貯へ愛心に因つて受生するは。一切凡夫の通相ぢや。

不邪見戒之中

○不邪見戒之下

善惡報應の空しからぬことは。古今聖賢の通義ぢや。易に。積善の家には必ず餘慶あり。積不善の家には必ず餘殃ありと。看よ世間俗中すらかくあるぢや。此言が虛ならずば。業果あるも信ぜらるゝ。正知見にも近かるべきぢや。假令未だ三世あることを知る地位に至らずとも邪見とは云はれぬぢや。又孔子の家語に。子貢問二於孔子一。曰。死者有レ知乎。將無レ知乎。子曰。吾欲レ言二死之有レ知一。將恐孝子順孫妨レ生以送レ死。吾欲レ言二死之無レ知一。將恐不孝之子漠二其親一不レ葬。賜欲レ知二死者有レ知與レ無レ知。非二今之急一。後自知レ之。と有り。此等面白きことぢや。經中にも。世尊は十八難を答へたまはずとあり。死後去ることあり去ることなきは。自知せしむべき趣きぢや。漢書などに。李廣は才氣無雙なり。匈奴號して漢の飛將軍と云ふ。文帝賞嘆して云ふ。國初に出でば萬戶侯豈云ふにたらんやと初め吳楚の反せし時より。匈奴に事あるころ大小七十餘戰。至る所に功あり。然れども爵邑を得ず。官九卿に過ぎず。老年に及んで。大將軍衛靑に從うて。匈奴を伐しとき。道に迷うて期限に後る大將軍人を遣はして。失軍の曲折を朝廷へ奏すべし。幕府に參りて簿を上らんと云ふ。此を憤て自刎す。李廣嘗て望氣王朔と談語す。漢匈奴を擊つてより已來。我必ず其中にあり。諸部校尉已下。材能中人に及ばざる者すら。軍功を以て侯を取る者數十人。我

は此人に後れれども。終に尺寸の功の。封侯を得べきなきは何故ぞと。王朔曰く。君自ら省よ。心の中に悔恨有るべしと。李廣曰く。我隴西の大守たりしとき。羌を伐つ。其時降者八百餘人を誘うて。同日に殺す。今に至るまで悔恨すと。王朔曰く。禍は已に降る者を殺すより大なるはなし。此れ將軍の侯を得ざる所以なりと。此等の事實も。擴ろめ思惟せば。業果あることも信ぜらるゝぢや。又前漢于定國が父于公が。此門より駟馬の車を出すべきぞと。漢鄧禹が。吾百萬の兵に將として。未だ嘗て妄に一人を殺さず。後世必ず興る者有らんと。于公が後は。于定國が封侯を得る。鄧禹が後は。鄧皇后が國母と爲りたぢや。此類古今多きぢや。正法の東流せぬ已前も。道はかくれぬぢや。佛出世にもあれ。佛未出世にもあれ。藏て藏はれぬぢや。隱して藏はれぬぢや。

又鬼神と云ふもの。此も藏て藏はれぬぢや。隱してかくされぬぢや。古人が幽にして鬼神となり。明にして人となると云ふも。且らく人間肉眼より云ふ言葉ぢや。三界夢裡の差別。何れの所か幽暗ならざるべき。法性等流の緣起。何れの所か顯明ならざるべきぢや。人中餘善の事多ければ。善神力を得。人中惡事增上すれば。惡神便を得。無しと云ふべからずぢや。聖文に十八空の般若は。十六善神の威耀を得る處。五篇七聚の律儀は護戒神の安心立命する處とあり。此緣有りて鬼神跡を隱す。邊鄙の所に。別に鬼路有りて鬼國に赴く。明醫の來るを知りて病鬼が走り隱るゝ類ぢや。此緣有りて神祇人中に顯る。左傳莊公三十二年に。神虢の地に降る惠王が內史過に問ふ是何故ぞ。對へて曰く。國之將興。明神降之。監二其德一也。將亡。神又降之。觀二其惡一也。故有二得レ神以興。亦以亡。虞夏商周皆有レ之。中庸にも國家將レ興。必有二禎祥一。國家將レ亡。必有二妖孽一。と初心の者は。此等を信ぜよ次第に。正知見を得る基となるぢや。此に信ずると云ふは。律儀に聖賢の書を信受するぢや。或は理を擴めて信ずることぢや。其理を決擇するは。唯聖賢に在り。凡夫のまれをすべきでない。或人が著せし鬼神論と云ふ書に。此を宋儒の理學に安排布置して云ふた。皆閑言語ぢや。兎角因果應報を信ぜれば世間はくらやみぢや。云へば云ふほど理窟のみぢや論語に。子路が鬼神に事へんことを問ふ。孔子の答に。未レ能レ事レ人。焉能事レ鬼。と敢て死を問ふ。未レ知レ生焉知レ死。と。看よ後儒の云ふ如く。一氣飄然。泯然として盡ると云ふやうなる淺近の理ならば。孔子が直に子路に告べきことなれども。十哲の中に子路にだに告ぬからは。此中別に深趣有りて存すと知るべきぢや。今の儒者書生の當り前にて云はゞ。孔子の子路にだに告ぬことは。措いて論ぜぬがよい。鬼神の事は。唯經傳を信ずるがよい。假令佛法を信ぜずとも。君子たることを妨げぬぢや。論語に不レ語二怪力亂神一。とあり學者の心に用ふべき處ぞ。墨子に。鬼神之明二智於聖人一。猶三聰耳明目之與二聖賢一也。と。老子に神得レ一以靈。とあり。此等皆面白きことぢや。神祇有ることが。信じて信ぜらるゝぢや。

此善惡報應神祇等は。內外聖賢の通語なれども。三世に亙りて明了なることは。唯佛法の中にのみ在

るぢや。若現生に鬼神の故に通じ。因果の奥に達し。正知見を得やうと思はゞ。爰に此道が有るぢや。此道は外に向うて求むることではない。現今人事の中にあるぢや。事物上にあるぢや。今時輕躁なる者の癖として。好んで高遠の理を談ず。違ふたことぢや。高遠の理は。多く虛頭に走りて。實行にはならぬ。佛世尊及賢聖のき趣をたづれ看よ。高遠なることはいらぬぢや。」先かう憶念せよ。現今我五尺の形骸は。肉血のおしまろかれた物ぢや。生れ出る時より死し去る後の愛まで。膿血不淨臭穢の日夜に流れ出る物ぢや。此は極まりたことぢや。たとひ張儀蘇秦が辯を以てさにあらずと云ひ廻しても。言ひ消されぬぢや。まづ此を決徹して擬はれば。正知見を得る基となる。斷常二見の深坑を超過す。一切の名利は此所に脫却す。一切の我慢勝他は此所に脫却す。一切の五欲執着は此所に解脫するぢや。此名利五欲我相を脫するとき。雲霧霽て朗月を見る如く。人道も斯に明かに。天命も斯に明かなり。實智慧の光明沙界を照すぢや。高遠ならずして而も誠に高遠なることぢや。此衆不淨聚の外面。一重の引つらなりたるを。薄皮厚皮と云ふ。濁水の泡の如く。豆腐のゆばの如くぢや。此一重の皮が裹み覆うて且く内の穢らはしさを藏すを。人間の有樣とす。世の輕躁なる者が。其皮のみを見て。膿血積る其の不淨を憶念せぬを迷と云ふ。此内外の臭穢なる物を。外の莊嚴具外の香氣などを假て。且くまぎらはし置くを。通途世間人間のありさまとす。輕躁なる者が。此假借の莊嚴具香氣ばかりを見て。本體の臭穢を憶念せぬを迷と云ふ。此外面の薄皮。内の肉血と相映じて。色の黑白分る。此唯上つらの身色のみを見て。本體の肉血薄皮厚皮を忘れ居るを迷と云ふぢや。

此肉血臭穢の餘分が。地上に荻薄の生る如く。頭上茂り生ずるを。髮と云ふ。地上石ころの有る如く。手足十指の端に堅まり布くを爪と云ふ。此頭上の髮が。荻薄の亂るゝ如く。藤蔓のはひまどはるゝ如くなるに由りて。收め束れゝばならぬ。此二十指の爪が。石ころの尖り立つ如く。茨の針の物に掛る如くなるに因りて。剪調へねばならぬ。此等收め束れたる姿を見て。本體の髮を忘れ居る。剪調へたる形を見て。本體の爪を忘れ居るを。迷と云ふ。言はゞ糞中の蟲の自ら不淨なるを知らぬ如く。蚯蚓蠕蟻の自ら醜きことを知らぬ類ぢや。此薄皮厚皮もさより堅實ならず。此不淨を裹み貯ふるに堪へがたく。日夜に不淨を漏し出す。耳に聹あり。鼻に洟汁有り目に涙あり口に涕唾等あり。總身に汗垢汚あり。下に大小二便あり。此漏れ出る諸の不淨は。取收めればならぬ。其取收めやうの精しきが上段者ぢや。その收め樣の精しからぬが下段下等の人間ぢや。上下の差はあれども。不淨聚に違ひなきぢや。此不淨聚が。糞聚に蟲の生ぜし如く。大地上に衆多あつまり生育するを人間世界と名づく。迷ふ者は。此不淨聚を彼の不淨聚に對して。一切名利に使はる。一切の我慢勝他に惱まさる。一切の五欲に執着す。博學俊邁も。高官貴人も。勇力剛勁も。此に覆はれて。自己法性の智慧を昧ます者が。謂ゆる聾むべき衆生ぢや。又經中に。人の身

中。臟腑骨肉。皮膚の間。所々に蟲有りて住す。常に八萬戸の蟲有りて。日夜喰食して。暫らくも止むときないさあるぢや。此蟲のかたまりに臭皮一重を着せて。人間と名づく。飲食も。目に見口に入れ喉を通るまでを。且く人間の食とす。身内に入竟れば。此衆多蟲々たる蟲の爭ひ食する處となる。此蟲の餘分が。血となり肉となり。二便ともなり。暫らく總身を發うて。目が見る。耳が聞く。舌が動く。此所に人間は蟲の所作あることを知らず。蟲は人間あることを知らず。唯だ憍慢貪瞋のみを逞しくし居るぢや。此不淨聚肉血のかたまり物が元來かくあるに因りて。日夜唯苦惱し。飢渴寒熱常に相伴ひて相離れぬ。一切憂愁常に隨逐す。此に極まりたことぢや。たとひ富樓那の辯を以て云ひまはしても言ひ消されぬことぢや。先づ此事を決徹して疑はれば。正知見を得る基となる。此飢渴あるを。飲食を以て且くまぎらはし。寒熱あるを衣服を以て且くまぎらはして。暫らく世に住するぢや。其飢渴を止むる飲食が。腹内の臟腑諸蟲に相應するに就て。口中舌上に味ひの現ずるを樂みと思ふて。本體飢渴の苦を忘れ居るを。迷と云ふ。寒熱を防ぐ衣服が。且く身に調適なるを樂みと思ふて。本體の苦を忘れ居るを迷と云ふ。或は此飲食を貪りて。自ら病を招き。甚だしきに至りては。我他彼此を長じて。國家の亂にも及ぶ。衣服も種々に莊嚴し。着用のよそほひ。模樣をのみ思ふ。甚だしきに至りては。異底を好み。禮度を僭して。自ら災害を生ずるやうになりゆく。寔に悲しむべきことぢや。淺間しきことぢや。日夜苦惱ある故。難をさけ易に就く。勞を厭ひ逸樂を求む。凡情のありさまからぢや。怨々として難を避けて。此難が避け得られぬ。孳々として樂みを求めて此樂みが求め得られぬ。更に内に臟腑の虛實。骨肉皮膚强弱あり。外に風寒暑濕。時候の順不順あり。若くは内緣。若くは外緣。種々の病を生ず。此身あれば此病なしと云はれぬ。病あれば種々の苦あり。人に捶打せらるゝよりも苦む。上下貴賤智愚共に見ぬたことぢや。此事を決徹して疑はれば。正知見を得る基となる。斷常二見の深坑は此中に超過す。名利五欲。我慢勝他は掃盡して纖芥に留めず。世外に飄然として。實に高遠なる場所ぞ。此を忘れて。外の人交り。世の榮衰。時の威勢。子孫眷屬等にまぎれて居て。徒に時候を費やし。今且く身壯健なるを恃んで。諸〻の戲笑遊ぶ事に心をよせ。悠然として月日を過すを。迷と云ふぢや。

此五尺の身が暫らくは健かに。暫らくは病惱し。平癒して壯健に復るかと思へば。また諸〻の疾病を生ず。日を送り月を送り歲を累れて。何事が有るかと思へば。終に老衰に歸す。肩は皺む。齒は落つ。髮は白くなる。腰はかゞむ。目は暗くなる。耳は遠くなる。此に極まりたことぞ。たとひ智者の天地古今の理は通達するも。此を免れ得ぬ。勇者の力萬鈞を擧げ。一人千人に當るも。此を免れ得ぬ。此事を決徹して。疑はれば。正知見を得る基となる斷常二見の深坑は此中に超過す。今日且く少壯なるまゝに。諸〻の戲笑遊興に心をよせ。悠然として月日を送るを。迷と云ふぢや。

此身が如レ是 世界に在る間に。或は水火風難に遇ひ。饑饉闘諍などに逢ひ。王難賊難に逢ふ。臣たる者は佞者に隔られて。忠義有りながら身を亡ぼし家を敗る。君たる者は。姦臣に欺かれて。國をあやまり身を危うくす。妻子眷屬。朋友隣里の間。十に八九は憂悩ぢや。心に適はぬぢや。或は大にもあれ小にもあれ。敵と云ふ者も出來る。古書にも。女無二美惡一。居レ宮見レ妬。士無二賢不肖一。入レ朝見レ疑とあり。威勢ある家は。鬼神其短を求む。才能ある士は。衆人憎み謗る。古今同樣ぢや。此事を決徹して疑はれば。正知見を得る基となる。斷常二見の深坑は。此中に超過す。愚蒙の者の習として。世を怨み人を怨み。自ら愁ひ他を惱ます。此を迷と云ふ。又且く榮華全盛なるにまぎれて。諸〳〵の戯笑遊びごとに心を寄せて。悠然として日月を送るを。迷と云ふ。暫らくは憂ひ來り。暫らくは喜び來る。此愁ひ去れば又彼の愁ひ來り。此喜ぶこと滿ずれば又餘の願求を起して。日夜に怨々として止むこと無きうち。遲きか早きか。終に無常に歸す。世相斯の如し極まりたこと ぞ。たとひ月は熱なり。日は冷なりと云ふとも。此事は云ひ消されぬぢや。此を決徹して疑はれば。正知見を得る基となる。斷常二見の深坑を此中に超過す。今日も徒に過し。明日も徒に過し 更に百年千年の替みを思ふを。迷と云ふ。多少の人が近きを棄て遠を走る。内を忘れて外に求む。邪見に墮ちることぢや。

此身あれば此念あり。身が先とも念が後とも。念が先とも身が後とも云はれぬ。要を取りて云はゞ。小兒の身あれば小兒の心。大人の身有れば大人の心。男子の身あれば男子の心。女人の身あれば女人の心ぞや。此身心有りて此苦あり。此身心が先とも。此苦が後とも。此苦が先とも。此身心が後とも云はれぬ。要を取りて云はゞ。三尺の身あれば。三尺の苦。五尺の身あれば。五尺の苦ぢや。此苦あれば此憂惱あり。此も苦が先とも憂惱が後とも。憂惱が先とも苦が後とも。云はれぬ。要を取りて云はゞ。一念の心あれば。一念の憂悲苦惱。多念の心有れば。多念の憂悲苦惱と相應す。五十年百年の念あれば。五十年百年の憂悲苦惱と相應す。未來際の念あれば。未來際の憂悲苦惱と相應す。此身心憂悲苦惱の處が諸〳〵の賢聖入滅の基となる。此等は宿禍深厚の人とゝもに語すべき處にして。名利五欲の人とゝもに言ふべきに非ずぢや。此身心は何れの所より來り何れの所に去るぞ。何れの所に生じて何れの所に解脫するぞ。唯大聖世尊のみ明了なる處にして。諸の賢聖の憶念修習する處ぞ。斯に一つの疑を生じて。決徹の場所に至るを。大丈夫と名づく。古人も大疑のもとに大悟ありと云ふ。此に心を寄することを知らず。苦が來れば苦に惱まされて。苦の來處を知らず。妄に免れんことを思ひ量りて。種々妄念を長ず。世を謗り人を咎めて。常に安からぬ。此者を迷の凡夫と名づくるぢや。

生れ出し初めを知れば。死の終を知る。死の終を知れば。死後の去處に達す。今日かく有ることを知れば。過去の業相を知る。今生の身心を詳にすれば。當來の苦樂を知る。解脫涅槃は今

日の解脱涅槃。過去よりの解脱涅槃ぢや。當來を待ちて。解脱するに非ず。生死流轉は。今日の生死流轉。盡未來際の生死流轉ぢや。過去世業相にあづけ置くべきことではなきぢや。自ら省察して看よ。此身は皆人の知るところ。父母肉血の餘分ぢや。肉血は何れの所より生ずるぞ。肉血は肉血より生じて。水穀の聚まりなれる處ぢや。生れ出し時は如何なる心ぞ。飢れば啼寒ければ啼く。乳を口によすれば吸ふ。父母をも知らぬ。この何事なき處に。宿福の者は。はや眼中に其英氣顯る。此般のことも。よく思惟するものは。正知見を得る基となる。

此飲食あり。此衣服あり。此寒温。此晝夜。此睡覺有りて生長す。父母等の養育に因りて。次第に生長す。習はせに隨て。種々の事を覺ゆ。其覺ゆるに。はや遲速あり。利鈍あり。事にも理にも。得てと不得手とあり。此般のことも。よく思惟するものは。聖道を得る基となる。或は一類の心識明了なる者は。此小兒の未だ情欲發せぬ時に。不思議の事が有るぢや。或は遇去世慣習の事を。夢覺として思ひ浮ぶる。或は未だ知らず。世に觸れぬ歡遊樂戲藝術などに心を寄する。或は此世に未だ對面せぬ人物などを。心内に思量し。或は未だ遊履せぬ處の山川聚落の。夢中に現ずる。或は誰れ教ふとなき志の起る。此等の人知らぬ處に。業果の誤りなきことを自知するぢや。或は未だ教へぬ作業を作す小兒も有り。孔子の遊戯に俎豆を陳れ。禮容を設ける類ぢや。或は生來見聞せぬ事を云ひ出す小兒もあり晋の羊叔子が乳母に金環を求め。鮑太玄が前世井中に死せしことを

云ふ類ぢや。此等は自ら知るのみならず。父母兄弟乳母等の目にも見ゆることぢや。具に憶念するものは。聖道を得る基となる。試みに六七箇の小兒を親く撫育教導し看よ。其中志性の差別作業の差排。此業力隨逐して免れ得ぬ處有ることを知るべきぢや。今時の者の法を得ぬは。高遠に走る故ぢや。足もとに在ることを知らず。外に求むる故に。假令百千年を歴ても得る時節なきぞ。

法過去に屬すれば。此念も過去に屬す。法未來に屬すれば。此念も未來に屬す。法現在に屬すれば。此念現在前す。法久近あれば。此念久近あり。業相修短有りて。此念修短あり世界年時有りて。此念この生涯を送る。朝より暮に至るまで。生より死に至るまで。暫らくも離れ得ぬ。生死去來に暫らくも離れ得ぬ。境來れば起る。境去れば滅す。此念滅し去りて跡なきやうなれども。一念生ぜしも。必ず熏じ留むる處あり。猛利に思惟し度量せしこと。數々憶念せしことは。永く忘れぬものぢや。此熏何處に留むるぞ。色身元來念々代謝す。虚空元來熏を受けぬ。此永く忘れぬは。何處に記し得るぞ。脾胃肝膽。唯是一臠の頑肉ぢや。眼耳鼻舌身。唯これ一臠の頑肉ぢや。能く思惟して自ら得力の場所に至らば。此法は洞然明白ぢや。白晝に大路を行くが如くぢや。

此念起れば即ち滅して。暫らくも留まらぬものぢや。此念々滅して留らぬことを決徹して疑はれば常見の深坑は迥然として超過す。此念相續して暫らくも間斷なきものぢや。此念々相續して間斷なきことを。決徹して疑はれば斷見の深坑の迥然として超過す。今日の念は昨日の念に非ず。昨日身

に苦有り。心に憂惱あり。今日思ひ出すに。唯是影像のみぢや。今日樂事有りて其心歡喜す。元來昨日の知る處でない。憂惱は歡樂に相違す。歡樂は憂惱に相違す。日々かくの如く。夜々かくの如く。念々かくの如く。時々かくの如く。日往き月來り。寒暑代謝す。壯年は孩兒に異なり老後は少壯に異なり。かくの如く後念は前念ならねども。其利鈍巧拙に隨ひ。一類相續して一期の心相となる。此を流水に喩へば。雨前の流れは雨後の水に異なれども。一類相續して。此流れ斷絶せざる如しぢや。色より香に移り。香より聲に移り。復色に移り。味に移り。香に移り。觸に移る。若此を一事を曳いて西より東に過ぐる如しと云ふは非ぢや。一猫猴の六窓より面を出すが如しと云ふは非ぢや。冷煖唯自知する人に許すぢや。昨日の念相が躁しければ。今日もやすからぬ。昨日の念相が寂靜なれば今日も穩なるものぢや。老後事々惑なきは。少年修學の功に由る。死時心相の亂れぬは。平日の禪定の力による。此を流水に喩へば。前流急なれば後流おだやかならず。支派とどこほり有れば。泉源やすからず。溝洫疏通して。海岸溢れず。大海かぎりなくして萬流歸投する如くぢや。

前念と後念と。一と云ふべからず。異と云ふべからず。念々代謝して實體なけれども。後念は必ず前念に相似して起る。斷常の二見は迥然として一時超過せねばならぬ場所ぢや。今日の念は昨日の念ならねども。必ず昨日の念に似て現ず。今月の念は去月の念ならねども。必ず去月の念に似て現ず

今年の念は昨年の念ならねども。必ず去年の念に似て現ず。今生の念は過去世の念ならねども。必ず過去世の念に似て現ず。未來生の念は今生の念ならねども。必ず今生の念に似て現ず。三世に推通して。誰れ主と云ふことなく。境に對して生じて。念々に代謝す。代謝して跡なきかと思へば慣習の境に因りて增上す。瞋恚を慣習する者は。多く瞋恚の念生ず。此を習うて止れば。終に殘忍暴惡の衆生と成る。愛欲を慣習する者は。多く愛欲の念生ず。此を習うて止まれば。終に柔弱多婬の衆生となる。此を近事に喩へば。詩歌を慣習する者は。多く詩興歌情生ず。計略を慣習する者は。多く計略に長ず。伎藝を慣習する者は。多く伎藝に妙を得る如し。具に擴め充て憶念せよ。法相の。五性各別と云ふとも。此慣習より生じて。無量時其性を成ずることぞ。此等の事を能く憶念するものは。聖道を得る甚となる。今時の者は。此心の斯に在り。此道の斯に在ることを思はぬ。人事に顯れて隱れぬことを思はぬ。古今に貫きて明了なることを思はぬ。唯妄想を逞しくして。兎角に迷ふ。宋儒の類は。心は本虛にして。物に應じてあとなしと云ひ。本然の性。氣質の性などゝ。種々安排布置して。唯理窟ばかりを好む。理窟と云ふものも無盡なるに由りて。好めばいつまでも理窟が付いて回るぢや。大なる理窟を好めば。都表もなく大になる。浩然の氣。天地の間に塞がると云ふも有るべきことぢや。微細なる理窟を好めば。至極微密になり。藕絲孔中に入り。鍼鼻に滯ほり。蚊睫に巢ふと云ふも有るべきぢや。後世佛者の類は。自宗他宗の佛く

ちべ。法くらべばかりなす。我家の佛こそ尊けれ。我宗こそ便なれと云ふ。唯文字の上の勝相ばかりを談じて居る。文字の勝相も無盡なるに由りて。好めばいつまでも盡きぬ。言へばいつまでも盡きぬ。高きことを好めば。都表もなく高くなる。頓教圓教大乘無上乘などゝ云うて。甚だしきに至りては。佛語をも自己の妄想を以て取捨判斷するやうに成るぢや。微密なることを好めば。至極微密に成りて。正理顯宗。今時の因明學者の樣になり下るぢや。脚もとにあることを知らずして。外に向うて求むる者は。皆此類ぞ。儒者と云ひ。佛者と云ひ。外道と云ひ。內道と云ひ。名は違へども實の道を得ぬ者は。その迷は一ぢや。しかし此中一向に教相性相の學を棄てよと云ふではない。佛も自ら相性を分別したまふ。大乘の瑜伽中邊等。小乘の發智。婆娑等實に。正法の在るところぢや。小機の爲に小法を說き。大機の爲に大法を說き給ふ。法華の開顯も。華嚴の融攝も。密教の表德も。實に正法のある處。悉く甚深なる處ぢや。自己だに明かならば。教相の淺深も。性相の分別も。妨げぬことぢや。儒者老子の道をも。一向に棄てよと云うではない。人倫五常は。六經史傳等を用ひ。刑名吏事には申韓管晏をも用ひ。天道地道は易。道德經をも用ふべきぢや。今時の自己を忘れて。唯教相をのみ判じ。妄分別に隨順して。理窟を巧にする者は迷の大なるもの恥べきの甚だしきぢや。

此念相と相對して暫らくも止むことなき目前の境界を思惟して看よ。春が夏になり。夏が秋になり秋が冬になり。又春に回る。春が夏に移れども。此夏は必ず春に相似して。次第に遷りかはり來る。夏が秋に移れども。此秋は必ず此夏に相似して。次第に遷りかはり來る。秋が冬に遷れども。此冬は必ず此秋に相似して。次第に移りかはり來る。此冬が又次の春に移りて。今年は去年なられども。此今年は必ず去年に相似して遷りかはり來る。此中常見を起すは。起す者の迷ぢや。斷見を起すは。起す者の迷ぢや。諸草木も花が生じては實のり。實が落ては又花を儲す。一つ花がつぼみさきそめて早うつろふ。此は常見の起されぬ姿ぢや。一つ花が咲く。此は斷見の起されぬ姿ぢや。

谷響も聲あり。鏡像もよく笑ひを含む。此あれば彼あり。彼起れば此應ず。彼と此と。一と云ふべからず。異と云ふべからず。心と境と一と云ふべからず。異と云ふべからず。心轉ずれば境界も隨うて遷る。境轉ずれば心も自ら變ず。善業を作せば。此善業が直に諸天の境界となる。佛菩薩の境界となる。惡業を作せば。此惡業が直に畜生阿修羅となる。餓鬼地獄となる。諸天境中には。此心直に歡樂遊戲す。三惡趣境中には。此心直に苦惱迫迫す。菩薩境中には。此心直に三學六度を現ず。諸佛境中には。此心直に無漏大定智悲を現ず。因果報應は。信じて信ぜらるゝことぞ。信じて信じそこないのないことぞ。此斷常の二見を超過すれば必ず正智慧を生ず。正智慧を得れば。生死に自在を得。到る所正法ぢや。到る所聖智見ぢや。法有りて自心となり來る。

自心を離れて法はなきぢや。法全ければ自心全く。自心全ければ法全きぢや。諸佛世尊因地の所行。何事を踐み行ふことぞ。三乘の賢聖。國城を棄捨し。王位を棄捨し。樹下に春秋を送り。石座上に身命を終る。何を明了になさん爲ぞ。唯今日衆生現今の一念心のみぢや。此心中に三世あり。三世元來自心に相違せぬぢや。此心中に十方あり。十方元來。自心に相違せぬぢや。此に由りて斷見は外道に屬す。說似一物即不中ぢや。修證有りて染汚とし。此に由りて常見は外道に屬するぢや。斷常の二途を超過して。唯是平常心ぢや。一切智解を超過して。了々と常に自ら知るぢや。一切諸惡見趣。迥然として依り所なくなるぢや。生を他方に轉じて。來處もなく亦去處もなく。富萬國を有して。我もなく。我所もなく。分別構造して。誠に斷見を起すに起し得られぬ時節ぞ。分別構造して。誠に常見を起すに起し得られぬ時節ぞ。

此眼あれば色分る。全く不邪見戒の姿ぢや。此耳あれば聲分る。全く不邪見戒の姿ぢや。此鼻あれば香分る。此舌あれば味分る。此身あれば觸わかる。此意あれば善惡邪正是非得失を知る。全く不邪見戒の姿ぢや。此等の事を具さに憶念せよ。聖道を得る基本ぢや。一切の色は。眼に對して其光彩をあらはす。眼根は色を得て。其力用あり。此業有りて生盲となる。色の光彩。この人の爲には龜毛兎角の如くぢや。此業有りて明目を得。離衆が如きも世々其人あるぢや。色の光彩。此人の爲には麁細分明ぢや。此色眼を助けて。此明更に增長す。此眼神靈の顯るゝ所法性の顯るゝ所ぢや。法華經の中に。父母所生眼。悉見三千界と云ふも。其時節の有ることぞ。一切の聲は。耳に對して其音響あり。耳根は聲を得て其力用あり。此業有りて聾者となる。聲韻律呂。此人の爲には龜毛兎角の如くぢや。此業有りて聰を得。師曠が如きも無しとは云はれぬ。聲韻の律呂屈曲。此人の爲には治亂分明ぢや。この聲耳根を助けて。聰更に增長す。此耳神靈の顯るゝ所。法性の顯るゝ所ぢや。法華經の中に。以二此常耳一聞二三千世界聲一と云ふも。其時節の有ることぞ。」一切の香は。鼻根に對して其薰蕕を顯す。鼻根は香を得て其力用あり。此業有りて鼻根鈍濁なる。此業有りて鼻根明利なる。迦留陀夷尊者が。青蓮華香を嗅ぎ得て。輪王の七寶みな優波羅大尼の變化なることを知るも。無しとは云はれぬ。此香鼻根を助けて。明利更に增長す。此鼻根神靈の顯るゝ所。法性の顯るゝ所ぢや。法華經の中に。入禪出禪者。聞レ香亦能知と云ふも其時節のあることぞ。一切の味は。舌に對して其麁細を顯す。舌根は味を得て其力用あり。此業有りて舌根鈍なる。此業有りて舌根利なる。迦旃延尊者の輪王所食の味を知るも。無しとは云はれぬ。此味舌根を助けて。明利更に增長す。此舌根神靈の顯るゝ所。法性の顯るゝ所ぢや。法華の中に。其有レ所二悉食噉一悉皆成二甘露一と云ふも。其時節あることぞ。一切の觸境は。身に對して其輕重を顯す。身根は觸を得て其力用あり。此業有りて身麤獷なる。此業有りて身柔輭なる。明利なる無減王子の賢王所坐の榻を撫して。その織師熱病あるときの織成なるを知るも。無しとは云は

れぬ。此觸身根を助けて。明利更に增長す。此身根神靈の顯るゝ所。法性の顯るゝ所ぢや。法華經の中に。如ノ是諸色像。皆於二身中一現ずと云ふも。其時節有ることぞ。」一切の善惡邪正。是非得失は。意に對して其義理を顯す。意根は諸法に對して其力用あり。此業有りて意根鈍濁なる。天より得ろに非ず。地より得ろに非ず天地齊しく覆載して。此人。人類に非ず。父母より得ろに非ず聖智の父母。其子に讓ることあたはず。偶然としてかくあるに非ず。自然法爾としてかくあるに非ず。習學も養育も。其成立を期すべからず。唯業力誘ひ來りて。菽麥も辨ぜぬ。一切義趣。此人の爲には龜毛兎角の如しぢや。此業有りて意根明利なる。天より得ろに非ず。地より得ろに非ず。天地齊しく覆載して。此人億兆の君師となる。父母より得ろに非ず。頑闇の父。其子を移すことあたはず。偶然とかくあるに非ず。自然法爾として かくあるに非ず。唯業力裝飾して。一を聞て十を知る。一度憶すれば終身忘れぬ。此義理意根を助けて。明利更に增長す。此意根神靈の顯るゝ所法性の顯るゝ所ぢや。法華の中に。俗間經書。治世語言。治生業等。皆順二正法一と云ふも。其時節あることぞ。」一切世間。往くとして正知見ならぬことはなく。一切事物。一として正知見ならぬことはなきぢや。且く業相に因りて此人間五尺の小身となり來る。頭上に蒼々たる者を。天と名く。此所に理あり命あり。常に運轉して端なし。緣あれば此天神を見るぢや。下に塊然たる者を地と名く。此中に物あり事あり。萬物を生育して止まぬ。緣あれば此地神を見るぢや。此天に日月

五星あり。二十八宿諸星辰あり。悉く萬古に亙りて相違せぬ。天命常なし。善に與ふ。歸常二見は此所に超過して餘なきぢや。此日月各神靈あり。諸宿曜みな神靈あり。陰德ある者は。其冥助を得。此等みな得道の者の親く見る處ぢや。望氣の者など云ふ。地上一人生ずるときは。必ず上天繫屬の星ありと。漢高祖が關中を定めしとき五星東井に聚まると云ふ。後漢の光武帝嚴子陵と同臥せしとき。客星帝座を犯す。此等みな虛談とは云はれぬぢや。律藏の中にも。猛光王が婬女善賢の舍に在りて難に遇ふ時。婆羅門が。中夜に仰いで星文を見て。翌日奏して大王昨夜難に遭ふ。幸に福力有りて僅に性命を存じ給ふと云ふ。此類多きことぢや。

此地が萬物を載る。春夏に生育し。秋冬に成熟する。百千萬歲是の如し。歸見に相違するぢや。山川互に出沒し。海陸動作あり。常見に相違するぢや。山林。各神あり。河海各神あり。禾穀藥物各神あり。陰德あるものは。其冥助を得。此等みな正知見の者の知る處ぢや。此天地位定まれば。南面して右を西とし。左を東とし。後を北とす。東隣の西は此家の東となり。此家の西は西隣の東となる。經の中に。須彌の四洲。共に日の出る所を東方と定むとあり西瞿耶尼洲の東は瞻部の西。拘盧洲の東は瞿耶尼の西とあり。常見の起されぬ場所ぢや。法如ノ是なれば。此四方四維は定かならぬかと云ふに。斯く四方定まれば。主方神有りて守る。此神靈その性善あり惡あり。世人善神の方に向うて。其福を得。惡神の方に向うてその禍を得。磁石の針は。何れの所

に在りても北に向ふ。斷見の起されぬ場所ぢや。不邪見戒相の。天象にかくあらはるゝ。地理にかくあらはるゝ。此天象が。人事に隨うて時々に變生ず。此常度。此變異。互に相依り相隨ふともに斷常の二見に相違す。常度は常度にして違はれども。變を具足して相離れぬ。變は變にして常に異なれども。常度に因りて。彼あり此あり。支那に政事の亂れあらば。支那に天變あり。餘國にはなし。朝鮮琉球に國が治まられば。朝鮮琉球に天變あり。餘國にはなし。此等の事を思惟しても斷常の二見は一時に超過せねばならぬぢや。

氣候の遷り。四時の代謝する。草木の茂る。霜雪の降る。目に觸れ耳に聞きして不邪見戒の相ならぬはなきぢや。正眼に看來れば。神靈有りて存す。此道有りて存す。此中に樂事を得。此樂は諸の賢聖の樂む處ぢや。一切の人事禮樂刑政も。冠婚喪祭も士農工商の作業も。武事文學も。悉く神靈有りて存す。此道有りて存す。有道の士は。此事々物々の中に。賢聖の樂みを得るぢや。一の事緣を云へば。晉書等に。晉惠帝の時に。劉曜石勒等互に興りて。天下大に亂るその頃。佛圖澄西域より來りて洛陽に赴く。且く葛陂に往きて。石勒が大將郭黑略が家に至る黑略素より法に信あり。軍中ながら。此人を家に請じて。五戒を受持す。其後軍事ある毎に。黑略豫め成敗を決す。石勒云く。卿が智慧中人に過ず。軍事の成敗を見ること神の如くなるは何故ぞと。黑略答ふ。此れ天の將軍を助くる所以なり。我家に一人の沙門を供養す。此人非常の德有り。前後軍事の成敗を決するは。皆此人の言と。石勒悅んで。佛圖澄に見ゆ。佛圖澄機に應じて誘引す。光初十一年。劉曜自ら軍兵を引率して洛陽を攻む。石勒自ら往きて拒戰せんとす。諸〻の僚佐。劉曜の軍威を恐て悉く諫め止む。この時石勒佛圖澄に問ふ。佛圖澄相論の鈴の音を聞いて告ぐ。鈴音此羯語となす。秀支桴戾岡僕谷劬禿當と秀支は軍也。桴戾岡は石勒。僕谷は。劉曜胡位也。劬禿當は捉也。此は軍出こ捉得曜こと云ふことぞと。其時徐光此旨を聞いて。石勒に出馬あるべしと告ぐ。石勒此言を用ゐて。自ら中軍步騎を率ゐて。直に洛陽城に詣りて兩陣相接す。果して此日劉曜が軍大に潰ゆ。曜馬に乘ながら水中へ陷る。石堆と云ふ者生擒すとあり。看よ此鈴聲。餘人は何事もなく聞き過すことなるに。此佛圖澄の耳には。劉曜を縛し來ると云ふ音聲ぢや。風鈴と心法と。元來相違せぬぢや。千里の外と風鈴と元來相違せぬぢや。なに故かくの如くなるぞ。法は自他を離れたるものぢや。有情非情の差別なきものぢや。遠近なきものぢや。千里の外も。軍事百萬の成敗も。此風鈴の中にあらはして餘なきぢや。風鈴の音が斯の如くなれば。一切の絲竹管絃の聲も亦斯の如くぢや。蟲の聲人の音聲も亦斯の如くぢや。一切の音聲が斯の如くなれば。一草一木の色も斯の如くぢや。一切の色が斯の如くなれば。一切の香も斯の如く。一切の味も斯の如く一切の觸も斯の如くぢや。此等を以てよく〳〵思惟せば。決定して斷常の見を超過す。華嚴經に。一つの中に無量を解し。無量の中に一つを解すとあり。此通りぞ。得道聖者の眼には。一物を視る中に一切の事を知

る。此等の事は。初め此身此念を思惟するより入りて。人道を知り。天道を知り。鬼神の故を知り。法性に達する。菩薩不思議の解脱境界に至るぢや。

此得道感通の事は。凡愚の及ぶ處ならぬが。近くは世間伎藝の中に。著を數へ卦を布いて。吉凶を斷ず。龜を灼て兆を身る。此も心の感通より生じて。此中に吉凶も悔吝も顯るゝぢや。相者も術に精しき者は。面部手足黑子等を相して。其人の生來事をも知り。子孫の多少興廢をも言ふぢや。此も人の業相が。面部手足等の相の中に。具足して隱し得ぬぢや。此相法なども。上古仙人の術と云ふことぢや。聖教の中に。末利夫人世尊を供養せし後。婆羅門がその手紋を見て。王者の后妃と成るべしと云ふ。又妙光童女を相者が見て。此人は五百人の妻となるべしと云ふ類。外典の中は。唐叔虞の手紋に虞の字ある。唐の太宗の手紋に世民の字ある。宋の仲子が手紋に爲魯夫人の字ある。魯の季氏が手紋に。友の字ありし類ぢや。此手紋人相の中に禍福を顯すも。面白きことぢや。此小伎倆の中にも。有志の者は。斷常の二見を超過するぢや。荀子が非相篇を著して。姑布子鄉唐舉を非する。此等は一偏の論ぢや。此中に相レ形不レ如レ論レ心。論レ心不レ如レ擇レ術と云ふは。格言と云ふべし。又慧能禪師の言に相を以て人を取るは。愚の甚だしきなりとあるは。別段のことぞ要を取りて云はゞ。相は心のあるところ心は相の赴く處。たとひ一指節と云ふも。みな心の顯れた姿ぢや。家相を見るものが。家宅を見て。其主人の吉凶志性まで占なふも家宅は是れ主人業

相の姿。主人は家宅の規度ぢや。」元來不二なる故に。主人の榮衰を顯して隱し得ぬぢや。」土地を視て盛衰を占なひ知るも。古より有ることぢや中天竺國那爛陀寺初開の時。尼乾子が占なひて云ふ。此所勝地なり後。必ず昌盛。五天竺に冠たるべし。しかし龍身を傷る故に。此に住する僧。歐血の病あるべしと。支那國には。墓所を占なふ者が。漢魏六朝已來多い。此も宿福ある者が勝地を得る。地の德こ因りて身を立て名を顯す。其人に由りて。土地の德增上す。依正不二と云ふも遙かるまじきことぢや。」人の音聲を聞いて。其禍福德義志性を知る。是も古より有ることぢや佛在世に。優陀延王の侍女が。妙音長者の聲を聞いて。此人は一億の金聲なることを知る。王が試むるに。果して家に一億の金を累ね有たと云ふ。律文に女人の音聲。鷲王の如くなるものは后妃の德ありと云ふ。支那に司馬頭陀が潙山の主人を擇ぶに。靈祐禪師の聲咳の聲行步の相に因りて定めしと云ふ。此音聲も。禍福の印する處定まつて改易ぜられるぢや。」夢を占なひて吉凶を知る。冠蓋を相し。刀劍を相し。笏を相して。吉凶を察する印度に八種占相の術あり。其種類多きぢや。要を取りて云はゞ。心の赴く處に理あらはれ。力を用ふる處に術を得る。事々皆備りぢや。增一阿含の中に。鹿頭梵志が髑髏を打つて其人の命終の緣及び後世受生の處を云ふべしと。此趣きを擴充し思惟せば。支那の卜筮相法の術の中にも。後世受生も察し知るべきぢや。一草一木の上にも。此大道の顯れて隱し得ぬことを知るべきぢや。」此一切吉凶禍福人事の始末。面部に顯れ

て隠し得ぬ。手足に顕れて隠し得ぬ。器物玩具屋宅城邑に顕れて隠し得ぬ。國家の治亂軍事の成敗。天象に顕れ。地理にあらはれて隠し得ぬ。乃至所作の善惡志性の賢不肖。後世受生の處まで。片骨に顕れて隠し得ぬ斷見は此所に解脱するぢや。吉凶悔吝心に由りて轉變して實體なく。善を思へば。凶事も吉と成り。能に誇れば吉事も凶事となり顕れ狂も克く念へば聖となり。維れ聖も念はざれば狂となる常見は此所に解脱するぢや。事は常に隔歴して相容れぬ。理は常に虚通して障礙ない。一切世間に理外の物なく。一切世間に事外の理なく。理事元來不二ぢや。理事不二なれば。斷常の二見は本來解脱す。心境元來不二ぢや。自他元來不二ぢや。迷悟元來不二ぢや。佛界を知らんと思はゞ。衆生界に入りて見よ。大道徹底の所を尋ねんには。迷の源底を窮めや。唯知らぬ者が知らぬばかり。解せぬ者が解せぬばかりぞ。

莊嚴の中に。正く此戒相を示す。又離邪見菩薩。住二於正道一。不レ行二占卜一。不レ取二惡戒一。心見直無レ諂無レ誑。於二佛法僧一。起二決定信一とあり。此中に邪見を離ると云ふは。菩薩は本性として空有の二見を起さぬことぢや。正道に住すと云ふは。常に正法を以て自らの心とすることぢや。占卜を行ぜずと云ふは。邪活命を離るゝことぢや。惡戒を取らずと云ふは。佛所説の戒法を護持して。外道難狗等の戒に依らぬことぢや。末世にて云へば。人師所立の戒に依らぬぢや。清涼の疏には。戒取を治すと釋す。心見正直と云ふは。妄分別思慮のなきことぢや。無誑とは覆藏なきぢや。無諂とは。詐りを現ぜぬことぢや。佛法僧に於決定の信を起すと云ふは。三歸滿足のことぢや。大日經の中に。祕密主。菩薩應二常捨一離邪見一。行二於正見一。怖畏二他世一。無レ害無レ曲無レ諂。其心端直。於二佛法僧一。心得決定。是故祕密主邪見最爲二極大過失一。能斷二菩薩一切善根一。是爲二一切不善法之母一。是故祕密主。下至戲笑。亦當レ不レ起二邪見因緣一。とあり。此文も。大抵上の華嚴に同じきぢや。佛法僧に於て心決定を得ると云ふが。兩經の肝要たるぢや。顯密異なれども。三歸十善の。菩薩入道の基たるは一ぢや。梵網經の中に。業障深き者は二劫三劫にも。父母三寶の名字をも聞かずとあり。誠に此三寶の名字を聞くは。自ら歡喜すべきことぞ。

此地上閻浮提の中に。衆生福緣の熟する時。法身等流して其迹を顯す。譬へば衆星の朗月を籠るが如く。法身の大士圍繞して。迦維羅衛に降誕したまふ。摩耶夫人は。三世諸佛の親母となり。瞿夷夫人は。塵劫にも曠仰し盡さぬ。十六大國王は。同時受生して。成道七日の初に心地戒を聽受す。其十九歳のとき。東宮の位を棄て出家したまふ。此は五欲の實なきを。顯示する姿ぢや。三十歳のとき。摩竭陀國。優留頻羅聚落の菅内。菩提樹下。金剛寶石座上に在りて。無上正覺を成じたまふ。此は無明の本來空を顯示する姿ぢや。末は本に徹すれば。八相の化儀悉く法身の妙德たるぢや。本は末に異なられば。今日の泥木鑄畫。全く三身を具足して缺減なきぢや。其勝義諦の智慧は。上德の聲聞迦葉舍利弗も量り知るべきなられど。世俗の心を生じたまふ時は。下蟻子等に

至るまで能く知ると云ふ。一切世界の事も一切衆生の事も。過去際より未來際に至るまで。大小麁細悉く徹見して。一切時一切處に。念々忘失なきと云ふ。今日此方共が一念の淨信も。一拜禮敬一四句偈も。誠に空しかるまじきことぞ。」法寶の尊重なることも。信ずれば信ぜらるゝ。今日此方共が稱嘆すべきなられど。且く信解の分齊を云へば。萬物みな條理あり夷狄もその道あり。此佛有りて此法あり。此法有りて此佛あり。法性の身。法性の土互に融攝して未來際を盡す。此衆生ある所として法性ならぬはなく。此國土ある所として法性ならぬはなし。法々自爾。心念を絶す。思惟せば禪定相應ぢや。一切時中。言論の及ぶ處ならず。若說げば。刹說。衆生說。三世一切說ぢや。此佛身を開示する。此佛土を開示する。此衆生界業相昇沈を開示する。且く大聖世尊の。菩提樹下に獲る處の法。衆生各自その根機に應じて聽受し得る。在世滅後此を貝葉に書して後世に遺す。支那に翻じ傳へて。住持の法寶となり。根機差別し。法淺深種々なれども。一文一句ことく甘露味なることは一ぢや。初成道より入涅槃に至り。人天小乘の數より。大乘圓極に至るまで。說相差別すれども。その法性等流なることは一ぢや。信受する者ば。今世の大明燈ぢや。奉行する者は身心の勝安樂ぢや一文一句と雖も。誠に身命にかへるに惜からぬぢや。無量劫の無明煩惱を一時に照破するは。此法寶ぢや。無量劫の罪業障礙を一時に消滅するは。此法寶ぢや。功德を一時に滿足するは。此法寶ぢや。

僧寶の尊重なることも。測量すべき處でなけれど。今且く信解の分齊を云ばゞ。大智門の中。普賢等の大士。無漏大定に住して。常に十種寶大行願を現ず。大悲門の中。觀世音等の大士。無漏大定に住して。常に衆生の爲に三十三身を現ず。此僧寶等流して。萬國に化を布き。末代に法を傳ふ。此に凡聖も雜し智愚も雜すれども。皆生死解脫を以て本懷とせるは一つぢや。王子公孫も其位を忘れて物外に。飄然たるぢや。勇者智者も。その腕力思惟を脫却して。柔順謙下の委さなるぢや。六和敬を體とし。剃髮染衣を相とし。上佛智に順じ。人天の勝緣となる。佛在世の大迦葉。阿難。文殊。彌勒等よりしゝ。今日に到るまで。師資相承けて。其儀違はず。燈々相傳へて其明永く存す。人天所歸投の處。群生福緣のある處ぢや。其應現に至りては。十六羅漢も世に久住して時々出現ありと云ふことぢや。賓頭盧尊者阿育王の供養を受け。羅睺羅尊者。有信優婆塞の供養を受し類ぢや。諸の菩薩も。時々世に交り現ずと云ふ。世友尊者僧伽羅刹尊者の類ぢや。此三寶の尊重なることを知るを人道の初要とす。正智見を得る基本ぢや。要を取りて云はゞ。三寶と云ふは。法性の世の福緣に隨ふて顯るゝ姿ぞ。法性が本來明了なる處より。佛寶顯る法性が本來清淨なる處より。法寶顯る。法性が本來平等なる處より。僧寶顯る。三寶と說けども唯是れ一法性ぢや。誠信に佛に歸する者は。佛の外に自心なく。自心の外に佛なく。能歸の心が直に是所歸の佛寶ぢや。誠信に法に歸する者は。法の外に自心なく。自心の外に法なく。能歸の心

が直に是所歸の法寶ぢや。眞正に僧に歸する者は。僧の外に自心なく。自心の外に僧寶なく。能歸の心が直に是所歸の僧寶ぢや。此に至りて。三寶長く世に住して。增減なしと名づく。一行禪師の三三昧耶品を釋する中に。以二大悲方便一成佛。次從レ佛有レ法。次從レ法有レ僧。此三即一體。其寶無二二性一。とあり。

華嚴經に。邪見之罪。亦令二衆生墮二三惡道一。若生二人中一。得二二種果報一。一者生二邪見家一。二者其心諂曲。とあり。此三惡趣に墮するを。異熟果と云ふ。惡趣より出。たま〳〵人間に生じても。幼少より邪見をならひて。其性を成し。或は惡友惡知識に遇うて。邪教を受け。其心も自ら諂ひ曲るとあり。此を等流果と云ふ。世上華果までも。淨妙の色香味を失ふとあり。是を增上果と云ふ。恐るべきものは邪教ぢや。此邪教に由りて。生れまゝの善心を失ふ。畏るべきものは邪見ぢや。此妄分別に因りて。人理天道にも違背す。毫釐の差。動もすれば千里を謬る。佛在世の增上慢の比丘。滅後の無垢友論師。新羅の順憬法師などの事跡をも憶念すべきぢや。法の中に於て己見を執するは。有るまじきことぞ。

此道有りて此天地あり。此天地有りて此人あり。古も溪山日月。古も男女大小今も亦男女大小。此人の人たる道は。佛出世にもあれ。佛滅後にもあれ。常に世間に在りて衆生を利益するぢや。人機教へて道行はれぬと云ふは非ぢや。時世異にして法利益なしと云ふは。愚の甚だしきぢや。此

末法世中。一般の人有りて。戒法を持つはむつかしきことぞ。通人の及ぶ處ならずと云ふ。此一言を以て。衆人の眼を瞎却し。引いて黑暗路に入る。看よ殺生するは。よほどむつかしきぞ。人を殺すは勿論のこと。假令禽獸魚蟲を殺害するにも。身をも動かし。心をも勞す。それ相應の殺具網羅刄物などを用ふ。不殺生戒を持つは。此造作にわたらず。泰然として護持のなることぢや。偸盜を犯するは。よほどむつかしきことぞ。盜賊の部類に入りて。家燒劫盜をなすは勿論のこと。穿窬私竊も。身も心も働かされねばならぬ。人の目をも忍ばねばならぬ。不偸盜戒を持つはこの造作はいらぬ。行住坐臥泰然として護持のなることぢや。邪婬を犯するはむつかしきことぞ。他の妻妾を犯するは勿論少々の婬戲も。世間國法に許さぬことは。人の目をも忍ばねばならぬ。身心をも勞せればならぬ。不邪婬戒を持つには。何の造作がある。家居恒に安く。交友も亦安く。悠然として護持をなすぢや。屋漏にも愧づることなきぢや。童眞淨行の人は。尙更相好言辭威儀も。衆に異なりと云ふこゝぢや。妄語もむつかしきことぞ。餘程思惟分別を用ひて。世を惑はし人を誑るに足るぢや。大妄語等。或は世に害あるほどのことは勿論のことぢや。萬事有體に言ふほど易きことはない。不レ見を不レ見と云ふ。見るを見ると云ふ。安然として常に護持して。身を終るまで其患ひなきぢや。綺語もよほど辯舌利口を用ふべく。むつかしきことぢや。惡口も。兩舌も。尙更心勞なることぞ。不綺語。不惡口。不兩舌を守る。何の造作有るべきぞ。惡貪多欲も。瞋恚嫉妬も。身心を苦勞す。不貪欲。不

瞋恚はこの造作なきぢや。上下貴賤二六時中。自ら省るに疚からぬぢや。邪見は尚更むつかしきことぞ。邪法邪宗は勿論のこと。假令少分の邪見も。元來無理なる道理を拵へ立てる故。其心勞するぢや。正見正道理の通りに佛あることを信じ。神祇あることを信じ。善を好み。惡をにくむ。何のむつかしきことはなきぢや。此不邪見の德ある者は。人主は明かなるぢや。能く群臣の邪正を知る。鏡の長へに明なる如く。胸中に物なければ。好醜自らあらはるゝぢや。老人は事へ安し心邪曲なければ。兒孫各その長ずる處に隨ふぢや。臣となれば事に任ずべし。其私を雜へれば。作こと忠直ぢや。少壯の人は孝順なるぢや。人に邪智なければ自ら道にかなふぢや。誠に十善は。上下貴賤。智愚賢不肖。悉く通行すべく。假令夷狄に在りても通行すべき道ぢや。又大日經の中に。在家出家の行用の別を示して此文有るぢや。彼在家菩薩受二持五戒句一。勢位自在以二種々方便一道。隨二順時一方。自在攝受求二一切智一乃至謂持二不奪生命戒。及不與取虛妄語。欲邪行邪見等。是名二在家五戒句一。此中不奪生命戒とは。第一の不殺生ぢや。不與取とは。第二の不偸盜ぢや。虛妄語は第四。欲邪行は第三。邪見は第十ぢや。此文は。出家たる人は。十善具足して受持すべく。在家の人は。種々の藝能舞伎。四攝法を以て。衆生を攝取する故に。開通あることを明す臣佐の類。初心の菩薩。護持の分際ぢや。要を取りて云はゞ。此五戒だに滿足すれば。自ら十善もそなはる。虛妄語の中に餘の綺語。惡口兩舌を攝す。不與取の中は不貪欲戒を攝す不奪生命戒の中に不瞋恚戒を攝するぢや。

又華嚴經の中に。此法の。初め聲聞緣覺より。菩薩乃至無上道に通ずることを示して此文有るぢや。

又此上品十善業道。以二智慧一修習。心狹劣故。怖二三界一故。闕二大悲一故。從レ他聞レ聲而解了故。成二聲聞乘一。此人たる道を全くする中に。智慧相應すれば四向四果に至るぢや。清涼の釋に。上の有漏の中。人善を下品とし。欲天を中品とし。色無色を上品とす。今傳戒相承には。輪王已上の十善を。上品と名づく。此經に聲聞緣覺菩薩。皆上品の十善と云ふ。後佛果に至りて。上々品の十善と云ふ。此上中下。上々品と云ふことも。凡慮差別の見を以て測るべきことではなきぢや。此穀の品類は。相對する上に就て三品九品を分別することぞ。又此上品十善業道。修治清淨。不レ從二他教一自覺悟故。大悲方便不二具足一故。悟二解甚深因緣法一故。成二獨覺乘一。此人たる道を全くする中に。修行清淨なれば。無師自覺。甚深緣起の觀ると云ふことぢや。又此十善業道。修治清淨心廣無量故。具二足悲愍一故。方便所攝故。發二生大願一故。不捨二衆生一故。希二求諸佛大智一故。淨二治菩薩諸地一故。淨二修一切諸度一故。成二菩薩廣大行一。此人たる道を全くする中に。心廣無量。上求化の願あれば。是を菩薩廣大の行と云ふぢや。

又此上々十善業道。一切種清淨故。乃至證二十力四無畏一故。一切佛法皆得二成就一。是故我今等行二十善一應レ令二一切具足清淨一と。此人たる道を全くする中に。乃至佛果もあらはるゝことぢや。要を取りていはゞ。一切惡をして十惡業にもるゝことはなく。一切善をして十善業にもるゝことはなく。一切戒法として。此十善戒に漏るゝことはなきぢや。五戒。八戒と云ふも。此戒の支分ぢや。沙彌戒。大比丘戒と云ふも。此十善の體相ぢや。經中に。二百五十。五百。三千威儀と云ふも。出家たるべき軌則を守り。諸の賢聖の行儀を全くするに。此條目の分るゝことにて。本體は此十善ぢや。菩薩の輕。重戒。乃至八萬威儀などゝあるも。別事でなきぢや。出家人は。賢聖生の威儀法則に違へず。此十善を全くせば。人間天上の師範となるべく。在家は各其國に在りて。其國法を守り。其家に在りて其家法を改めず。此十善を全くせば。其身を修め。其家を齊へ。其國を平治するに餘りあるべきぢや。人々箇々賢聖の地位にも入るべく。次第に滿足すれば。佛身と合一する時節の有るべきことぢや。

十善法語 大尾

不邪見戒之下

正法律興復大和上光尊者傳

文化元年甲子臘月二十二日中夜。正法律興復大和上尊者。滅二度于京師阿彌陀寺一。法臘六十有七。世壽八十又七。遺命不レ許二俗士從一事葬瘞一。諸弟子涕淚悲泣。相與舁二靈龕一。還就二高貴寺一。以二二十五日中夜一。殮二全身于奥院高祖大師祠堂右一。樹五輪石塔婆于其上一。後二十年。文政癸未。以得法弟子多已喪亡。而未レ有レ爲二尊者傳記一者。小比丘諦濡。大懼二高行丕勳泯滅一。不レ著二于世一也。不レ量二己之劣一。稽首和南恭詮二次其梗概一。以諗二來裔一。尊者諱飲光。慈雲其字也。自號二百不知童子一。姓源。族上月氏。浪華人也。父安範。播州田野村人。其系自二赤松一。嗣冠移二居浪華一。爲レ人卓犖不羈。有二俠者風一。輕レ財重レ義。趨二人之急一。甚於己私一。人稱爲二長者一矣。母桑原氏。阿州德島産也。其族川北又助者。鞠爲レ女。又助仕二高松侯一。爲二浪華米倉校官一。慕二安範之爲レ人。以二養女一妻焉。尊者生二於外祖父家一。享保三年戊戌七月二十八日也。幼而狀貌異二凡兒一。性凝莊。不二妄舉動一。稍長益俊邁而其踏レ矩循レ矱有レ若二成人一。父謂二族人一曰。他年興二吾宗一者。必斯兒矣。父有二七男一女一。尊者乃第七男也。母氏素信二三寶一。法樂寺貞紀和上者。其所二深歸敬一。和上字忍綱。行學兼備。

爲時碩德。時屈請其家。而飯焉。和上見章者氣貌異常。謂其母曰。此殼若種也。豈宜使其終沒塵中耶。蓋以我乞。時父已沒。母氏即以章者乞和上爲弟子。時年甫十三也。章者雖剃染。固非其志。然性至孝。從母命耳。明年秋。和上授以如意輪法。至受道場觀。汗流淋漓。歎曰。豈料佛道如此甚深。如此廣大矣。丞作書謝母曰。今日方知出家德。亦是悲母之鴻恩矣。從時厥後。激勵勤修。廢食殆廢。和上喜曰有弟子如是。我復何憂矣。即授悉曇章。習學梵字。年十八。和上命俾從伊藤長胤氏學文字。意謂。苟無學術。不足作法將以伏外道。章者蒙命。趨抵京師。學屬文辭。僅數月。藻思滂發。縱橫順逆。意所欲言。筆亦隨之。先生大加賞稱。未期年。聞和上爲病。歸侍醫藥。迨病瘳。脇不沾席數十日。人咸感其至孝矣。年十九。遊和州。肄顯密教。冬隸籍於河之野中寺。從秀嵐和上。受沙彌戒。嵐師一見期以遠大。謂之曰。子實千里駒也。善自愛重。莫恃才傲人。莫得少爲足。噫吾老矣。恨不及見子他日建法幢擊法鼓耳。年二十。受具支潅頂于嵐和上。嵐祕密儀軌。于戒龍和上。年二十一。受滿分戒。所謂通受自擔得也。自後研究毘尼。不滯寒暑。四律五論。及南山疏鈔。探賾討幽。年二十二。和上退法樂寺。命章者。嗣其席。章者主法樂寺。雖在閭中。行學兼修。斯須匪懈。且修阿字觀。因諏澤

趣於大輪律師。和上見之。語曰。汝雖祕密粗備。猶未窮源底。在我今授以藏塔奥旨。即擇日莊嚴道場。授唯授一人妙訣。祕璽玉册。無所遺脫。所謂附法灌頂。西大正嫡者也。當此之時。顯密法門。靡不貫煉矣。一日自慨歎曰。所貴乎法者心也。心倘不明。萬法爲徒設。喻諸積金不知用者。何異彼瓦礫。我將明吾心。乃以寺附法弟照林。脫屣萬緣。兀座一室。瞥究明心源。雖暑流金。寒折膠。足不踰戶限。二閱寒燠。覺有所證入。然而不自許。踽履振錫。疾走信中。求證大梅禪師。禪師曹洞之者宿。道價重北方。及見互相詰難數回。章者留彼九旬乃還。還後歷叩諸師。如納鑿不相投。後還法樂。禪座東堂。猶如枯木。一日忽豁然。如釋重擔。胸中洞然。萬象森羅。箇々光曜。三世十方無罫礙。若白雲在空。卷舒自在。爾後自樂所證。怡々如含甘露。不知飢寒切身。入定連日。不覺雷霆破柱。年二十七。移住高井田。蓋隨師命也。寺號長榮。又稱西之坊。于是親證覺法。覺賢。豎四方有志徒。不召而集座下。無檀施以供香積。日分衛以度居諸。辛苦艱嘗。人所不能耐。所之裕如也。精修純一。彷彿有佛世之風。年廿九。結三周界。以寺爲僧坊。明年親證登壇受具。所謂別受羯磨得也。蓋吾邦過海大師後。興正大悲已來。大抵通受自晉得也。雖有間有唱別受者。或行或否。而又其式不一準。章者有

所レ據創二制規則一。爲二後代標準一。是時門人中。親證最賢而純懿。以レ匡二翊正法一爲二己任一。動靜云爲。一效二尊者所レ爲。猶三顏回於二仲尼一。尊者亦特器二重之一。間勵二學徒一曰。汝曹以二證之志一爲。則大法其庶幾復振乎。一日證奮然請二尊者一曰。方今正法不レ絕如レ縷。苟不二急維持一爲。恐佛日墜二于地一矣。自レ今後事無二大小一。一順二佛世正軌一。莫レ雜二澆末弊儀一。尊者曰。汝之志雖レ可レ嘉。其奈二時未レ到何一。則不下惟無二裨于斯法一。反來二他詘誘一矣。證曰。佛世尚有二外道起レ謗。況今日乎。世雖二濁濫一。法水未二悉枯涸一。又幸有二二三同志一。始號二正法律一。大而衆法界之結解。戒之受捨。懺之輕重。安居要期。悉說示二同志一。小而心念法。衣鉢坐具。祇支覆肩等及日用鎖事。遠原二律文一。近據二傳戒治擯等一。悉革二其弊習一。正二其規制一。使レ可レ貽二悠久一矣。時有二剎嵒紹應二禪師一。視二榮名利養一。若レ將浼焉。聞二尊者之所說一。拳々服膺。佐二尊者之化一。以至レ終二其身一。正法之興。二師頗有レ力焉。嗚呼。若二二師一者可レ謂能守レ道而弗レ遷者矣。年三十。移二有馬桂林寺一。復結界。廣作二佛事一。尊者恒病下唐宋已來。袈裟之裁製不レ順二佛制一。着法亦失二搭肩之式一。隨意施鉤紐。遂發憤執レ筆。依二經律紀傳一。反覆參驗。又據二古像古畫一可レ爲レ徵者一。廣搜遠索。殫レ心畢レ慮。遂二方服圖儀二卷一。廣本十卷。刻二其略本一。以惠二有志之徒一。可レ謂高見卓識。過二越等夷一者。於レ是乎。沙門之標式。再備二於千載之後一矣。居常以下擔二荷大法一。毘下翊襄敗上爲レ志。惟知二有法一。不レ知レ有二己身一。朝一汲々焉唯恐二法輪不レ轉。煆二煉學徒一。諄々誘掖。苟有レ益二於法門一。輒千里不レ辭レ勞。遇レ有下來請レ講者上。卽日就レ道。講二南海傳於南山一。而述二解纂鈔一。講二表無表章於界浦一。而著二隨文釋一。講二無門關於長慶一。而撰二論說一。其他大小經論。新舊諸律。或密或禪。罔二年不レ講。凡尊者之講レ書也。善析二宗會一。亭句或略。因緣譬喻。冥與レ理應。所謂九方皐之相レ馬之風也。是以聽者心地開朗。自忘二其疲一。年四十二。自レ茲聲華日播。藉々遐邇。根來寺常明僧正下二尊者德一。授二興地藏院相傳祕密關奧一。瀉瓶無レ遺。僧正者。五智山曇寂闍梨之嫡嗣。醍醐之正統也。夫尊者起二法幢於既倒之時一也。一賴親證之懇請。法幢方起未レ幾。莫然長逝。悲夫。尊者曰。命也哉。噫天喪レ予。作二尼父歎辭一。以悼レ之。覺賢。覺法。亦相繼而亡。尊者曰。羽翼未レ成。不レ可二以高飛一。今吾失二羽翼一矣。我且レ從二吾所レ好。從レ是翛然有二隱栖志一。遂卜二居于生駒峯西。長尾瀑布之上一。有二禪尼智鏡者一。爲二尊者一造二關若一。扁云二隻龍菴一。蓋尊者所レ奉釋迦尊像。下有二雙龍一。而扶二持蓮座一。故得レ名也。尊者禪觀暇。日取二行願贊。心經。彌陀經等梵本一。而讀焉。讀久而漸通二其義一。愈讀愈通。知下有二神物一爲二之開導一者上。其蘇漫多。底彥多者。皆不レ假二師授一。心通意解。若二

宿習。然。讀二梵文一。猶レ讀二翻經一。於レ是召二護明法護諦濡等於山一而口授焉。護明筆記成二七九鈔五卷一。刻而布二之四方一。法護諦濡亦レ與レ有二助筆微功一矣。尊者用二意梵文一也。蓋力矣。竟作二梵學津梁一千卷。折爲二七詮一。其中雖レ有レ未レ脫レ稿者。豈不二亦盛一哉。夫梵學失レ傳也尚矣。近世論二八轉一者。不レ爲レ不レ多。人々自謂攝二靈蛇之珠一。家家悉誇抱二荊山之玉一。然而要二其所論一。率不レ免レ爲二滌桶掃箒之摸索一也。八轉尚示。況九韻乎。至レ如二尊者一。七例九韻十囉聲等亦皆眞象現前。恍若逾二葱嶺一而遊二印度一。何其愉快哉。五十四。尊者嵩棲澗飲殆將二十載一。深壑不レ能二久蘊光彩一。京師四羅競來而請。其言切。其意深。尊者勉強應レ之。諸居士揖レ貲。得二阿彌陀寺于西京一。延二尊者一居焉。居亡レ何。問レ道之徒槃至蝟集。縉紳鉅族。貴戚妃嬪。亦稽首恭敬。咨二決心要一。其職務鞅掌。宮門深邃者。尚有二獻レ香呈レ書。樂レ結二法緣一。尊者應レ機說レ法。譬如レ一雨所レ施。大小草木。各獲二霑潤一。嘗因二貴人請一。說二十善法一。諸弟子錄爲二十二卷一。名曰二十善法語一。然其說宏特。不二止十善一。大小權實。眞俗二諦開闡。無二餘蘊一矣。尊者每言知レ我罪レ我者。夫十善法語歟。年八十。尊者春秋既高。氣力稍衰。不レ勝二接應之勞一。退遷二河之高貴寺一。々在二石川葛城嶽之西一。乃高祖大師開二三寶鳥一之處。而後鳥羽天王嘗一臨幸焉。尊者相二其地一。幽邃閒寂。眞修道之良場一也。遂開二公廳一。築レ壇。結レ界。爲二十方僧刹一。定作二正法律一。派本山一。尊者又痛レ近世語二神道一者。妄爲二淺陋一。鄙媟之說。大傷二國之遺風一。往山之暇。留二意神書一。所謂三紀亡レ論。兼采二諸家紀錄一。旁考二先哲之遺書一。普會二衆說一。捨レ短拾レ長。遂成二一家神道一。傳二之門人及有志士一。謂神道玄妙。與二吾密教一。相爲表裏一。學密之徒可二閑而不レ學耶一。宜矣。傳教弘法弘教之大士。竭二力于此也一。尊者既在レ山日修二五密瑜伽法一。四威儀中。住薩埵三昧一。以其冥益一。回二無數有情界一矣。未レ幾。嚮嘉者日影。懇請彌切。尊者亦不二固拒一。云世尊尙不レ帶二一方一。應二請萬國一。吾何人。敢不レ效二前蹤一哉。或授二戒京師一。或說二法浪華一。不レ選二寧居一。時遊二戲翰墨一。下レ筆成レ章。偶有レ求二語句一者。作爲詩歌一。歸二諸第一義諦一。得者皆珍襲寶藏焉。晚邸山城主甲州侯。欽二尊者風猷一。屢請二城中一。問レ道受レ戒。執二弟子禮一。以敬重焉。迨二尊者之示滅一也。殿二千僧齋于山一。以極二殷勤之意一矣。年八十七仲秋。覺二體不レ佳。迫二緇白之請一。就二醫于京師一。在二氣力耗滅之際一。尙惓惓々法門一。未二嘗少懈一。至レ策二勵學徒一。斥レ邪衛レ正。則辭儀壯勵。凜々乎不レ可レ犯。聞者自懾伏。每誡二學徒一。曰。大丈夫兒出家入道。須レ具二佛知見一。持二佛戒一。服二佛服一。行二佛行一。醍醐佛位。切莫レ做二末世人師所レ行。須飲二淨粹醍醐一。與レ啜二雜水腐乳一。此尊者終身所二履踐一。故亦用レ是以誨レ人也。平生持律嚴峻。行業高潔。望レ之威容可レ畏。及卽之。溫和若二陽春一。人咸

悅服。尊者廣額豐頤。鬚眉雪白。望見之者不問而知其爲有道士。及聞尊者示滅也。近遠知與不知哀慟號泣。不翅喪其考妣。尊者道。浹洽於人者豈可知。所度弟子數百人。至聞道受戒。就弟子列者殆萬有餘人。受菩薩戒及傳印明者。又不知其數也。於戲。世習教者。必修禪修禪者。未嘗聞教。精於顯者。或疎於密。專於密者。多略於顯。獨吾尊者則備衆美而有之。兼通儒典。文又足以載其道矣。以故群機盡攝。萬一理貫。卓然爲一代人天之師。震黃幢于瓦岳雷鳴之際。翔靈鳳于衆禽紛飛之時。謂之如來之長子。護法之隆堆。其孰曰不然哉。其孰曰不然哉。至于神靈之感通。佛陀之妙應。則門人之所目擊。里巷之所說。不可以一二數。第事涉奇怪。非尊者意。所以茲不錄也。末賛比丘捫莽謹濡熏香稽首拜撰

大正八年一月五日印刷
大正八年一月十日發行

京都市下京區寺町通五條北入西橋詰町
編輯兼發行者 藤井佐兵衛

京都市下京區北小路通新町西入井筒町
印刷者 須磨勘兵衛

不許複製

發行所 京都市寺町通五條北入
藤井文政堂
電話下五八五 振替東京四五九五 口座大阪三一五一

8. 2. 15

3/
840

終